尾張名所圖會

前編

ル 4
4597
1

尾張名所圖會前編

門 九4
號 4597
卷 1

早稲田大学図書館
昭和 35.1.28 購入
藏書

扈張名所圖會序

扈張之為邦也北極出地三十有六度則得緯度之中者也勾芒之送春風而滋芳芽徽膳脂錦繡而呈富貴繁華之態南陸之日燭炎熱而

帝國圖書館藏

蒸蔚岑寂之雲峯張
蔚密濃鬱〻林帷清南〻色
悠悠氣慄烈木蘭之露芳菊
〻英山背之後〻而生陰〻〻
炎〻而寒分有蟠鱗者潛其
候〻於脩麻不者一美奈是

其驗也又其爲邪也東西不
異〻星程是淫
皇國經度〻中者也其態也玉
壺〻膏腴田野〻衍沃
神廟之憑隆字鬱林城樓之
翼然于雲表伽藍〻宏麗而

清淨衆唐〻殿富閎閎〻交
易爾乃山〻奇則突翅一四
一凸哉矚目乎此以愛其畢
儻畫屏掾觚於彼而寫其
錦繡〻心腸者昉于古人而全
乎今人爲形〻美之堂書圖折

方流而已詩歌其風景以酬
名區畫畨其勝槩追舊蹤古
自古不絶其人而於之觀其畫矣
或人曰如子之所謂天〻驗白
地〻應則仙釋之道無其
比爲曰然而我輩一以證〻古

之人物守庫垂而悠閑謝
絲華而鎮定之後恭倫推讓安
節死義之士及其姿容鸞鳳
其生之文章出姑舍而不論爲
若夫掌握兵權威武以一變
天下辟易萬人於嗚噫咤嗟
殲殘敵乎一戰之下蕩之奇
而神速瞬息而成大勲者
六日有餘乘之際而生其三曰
源右幕曰平右府曰豐右閣也
豈豈非天之中與乎雲雨所
產而其人之傑乎武威人惟之而

退録以為序

天保十二年歲次辛丑長至

尾張世臣 六十九翁香實深田正韶識

七十有之 柳澤維賢書

[illegible]

引

諸忘莫作鼎著奉行者業唯在此八字耳而俞氏自得以樂屋諸霞載中〻一閑人也閑人而與閑事不亦因緣乎哉書也余得四癖以成爲文園性躭讀國書

有涯眼窮無涯書而藏書積
有一萬卷專精誦讀年若不
倦或至持竿漂麦人目為嘉魚
後身是一癖也梅居稽查
皇和古今人物自搢紳武林至僧
儒隱疇〻生卒出處無一不
明了又覩想宗祖法師為人常
法來于雲霧白石風流為衣
好事為裳余最以地仙與焉是
二癖也貯書和与文園等故世
稱兩家二萬卷矣春江自幼善
摹寫縮圖而目所覩〻萬物足

所到之百景無收不蓄焉然未嘗
者師天資玄妙寫其微則足以
代衛人而悅燕王可謂刻彫衆
形者又頗錢拓我屋山水名靈
神祠佛刹縱橫幾將無不容蹕
之地是三癖也瑞齋特名臨池
家工于細字業鋒遒動寸錢抓
人其抽毫之際不知暖寒苛然
膏嗜八雲之道是四癖也余乃
此四癖猶醫有玉丹赤青且春
旺瑞齋之為人也靈退溫雅實
蓋之姿拈之姿雙而時時照耀

吾暗室也曩四癖來謀法余〻
爾不立文字〻儒也何以當〻
輙然不應四癖頭〻然於是乃
曰卿等而爲之易於以齋五今
鏹基与時相待而來吾將乘
勢歟四癖依〻余遂爲〻鼓

吹以舞四癖歲去歲來爰茲前
編苟完〻功此編雖周屬稗史
此擘也不出三歲而其撰〻精
詳綿密殊覺力果知玉丹
赤青能奏引年〻效矣嗚呼
夫太平之人而寓太平〻象

以觀太平之人豈不大幸乎一
樂事哉抑四座舞蹈之力
耶將余鼓吹之功耶觀者俟他
日後編之苟羲章丑冬十一月
精一屋士深田精一併書

深田精一
字号皿精

尾張名所圖会序

いにしへ國々に風土記といふ書ありて其産の
生れ出るものをはじめ其國々に
あるもの所の川原あることを海山水
なりいはゆる金銀毛乃あるを法毛乃
和物をもれ毛れ法はるのはやのよるを
木草多むしにいたりてあさち原
川ちゝに志ゆ流れるを庶仁法

出るよ雲これたうちつきたる初の京に
皆り勢はて〻お雲一國乃外ハ海こく
孤きる事なくまろ尾張風土記を中略
彩の後ハのこりて其餘乃殿失たるを
あの欠ハをしきかなる成ハいとも
精一如一乃四人の癖人ハ世をとを
あ川めてえ〻れる此書ハ早振
神代ハあるつ〻こと〻いハのうり〻法

多ゆあはて度そ乃ハ海くこと乃老
おちあ尚ハ氏ハのわ祢きこ〻ろに書しハ
はきこあ祢かハ風土記ハ氏あうれあ
世法さ乃ハ無ハて〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻
ゆるこ〻ハ〻ハ乃世ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻
たるこ〻ハ又なき切ハ乃ハ〻ハ〻ハ
君ハ乃ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻
海乃宮ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻

はしたまへるはちすの葉は天のしたにいとも
かぐやかなる金箔銀箔にてをしたるおとは
ものしくおもはれ書きいとうつくしき清水の光とも
なるまぬるんにおもしりくたるふとく
てなるむかしいまを上田仲敏

ちるきくこそ名所圖會といふもの
世よおくにてをしたる五畿内ばかりなれども
ほうのゆくへのもつきくれはてやはあわ
さるいとうはきこゆあくわの所のさまをも
山ばかりをもあらはしてくくとる
光のしさいさるあてひとをれわかし

あるかぎりをつくしてさいこうたるあるべし
なるべしいとまをとりかへるべきものさきをも
こいこあわうしこいかくわかさきこと
はかりこころもしてあるまうしたのき
わかぎみわかぎみこころの尾張のぐの
をもあををやとおもひこあるいとの乃

いとまをこきこの宮田路地口道西ゝや
あるこちいこあ限かく地山寺はかわ
こあわき所のよをもとれかぎたして
こちこあるこあらくいこん人わまを屋
つ屋しふこあきひとをいそをやくせま
ひろあこやこいこきこふてこ考これ

この[illegible]を書[illegible]すきて[illegible]
おほ[illegible]して板に[illegible]
くいふ樫松茂岳

天保十二年丑十月　孫村春書

凡例

○此書の序次前編ハ府城小華と起し　奥田宮小中し
津嶋社小終る則当国八郡の中宅智知多海東海西北
下四郡とし前編七巻とし後編ハ中嶋春日井丹羽葉栗
の上四郡を五巻とし　一の宮漸々犬山を始東終小序づ前
後十二巻としその完きをいとす

○當國ハ地勢坦夷して山堅少く土壌膏腴にして五穀菜蔬
ますます奥介小ものるまで名産多く郷里戸口も四隅小達し古
今の沿革少くとも当初の開肇古くして勝地名區も
亦多けれバ中に就て尤著明なるを出し怪譚俚語小亦多きハもとて
省くとも[illegible]の古さことのハ稀小載るもわり

○神祠梵刹の奥嘗勧請小新さみて舊説古傳なきことのハ
悉く措て挙ずとも森然として巨礎高棟なるハまく見て義せ

小祠支院の傳説なきものハもべて登俎せべ粗旧傳ある古社古寺の跡の脱漏せるもの少く称バ後編落成の後拾遺と撰べ補ふ

○天塲古蹟の跡新古の諸説紛擾して一定ぐきものハ多く正籍野乗とも参伍錯綜して考據ふ便ア

○奥田真清田の神賓大須真福寺の古書籍妙典寺の古書画其餘の神社佛閣ふ什傳るる所の古説碑銘鐘銘及び古器物の跡希世の名品ふる又尚ふ世人の人物と考ぜるもの其多く徳美名馨の傳由まで以ても汗牛充棟して悉く収録ぐ

けれバ他日尾張集古一覧毎図縮摹同人物一覧ふの二書と綴ア其埋没と彰べ編の羽翼ふそ人好事家ふ問んと千

○道場法師が書始元興寺少て夷鬼を挫ぎ尾張濱を清添殿前ふ和風長寿楽と舞奏べ加茂清正が朝鮮ふ勇威と振ひ〜如きの跡と図画ふ寫せバ童稚の眼と喜ばしむるふ足と以ども加る他境ふ事績と弟ハ絶て描ずす

○秀吉公微賤の称ふ小竹或ハ茂吉郎と題べ義朝に贈内大臣われば供養の図上に公字と加る跡もべて以ても倣ふ

○編中に採摘べ図上ふ配題する所の詩歌連誹當國ハ古人ハ他邦の百家とも取るとも漫りふ似ざるものとて附會せべ必其地ふ實践允當ぢとの〜謄録す今人のかきハ他境の諸家と雑へて

○図画ハ春江の筆に成るとも〜或ハ図轍一軌の展觀ふ供んすを恐ぢ〜諸家とて什が一二と補ハしむ故ふ毎図ふ落款べてもと須つ去れども他邦の人と借ふわべ

○二十餘年前奥田の源川忠豊奥田名所図会と撰んとて功半ぢ〜いまだ業と卒へずして止べ此編の本に鐫

むことを望て主稿本とも見るまゝ中に統く真佛ゞ畫き
し一圖と義是て共小図志と遂さゝむ方に此図のゝ古人の著
なり其説のごきを防及して三四の卷を収めぬ
○編中引用の羣籍古事記旧事紀六國史をゝゞり殆ど千紀
小玉ゝも多くハ全文と抄もそ志れども文の長きハ要領と撮く
裁截ゝるとわりたる簡冊の多寡小限りわゝと斟酌ゝるふ
ゝり

尾張名所圖會卷之一

目録　愛智郡

廣井の官倉に貢茶と納る圖　地理疆界
國號濫觴　神武天皇東征圖　愛智郡解
赤深衛門馬津驛舍に宿圖　名古屋府
那古野古城　信秀城中よ矢狭間と切關圖　府城
御宮舞樂圖　魚棚賑合　御宮（別當尊壽院 神主吉見氏）
亀尾天王社（別當 安養寺）　天王祭片端試樂　御祭禮全圖　将軍家御靈屋
芭蕉翁の古事　花井臼古事　名古屋山三宅址　伊藤呉服店
清正普請場址　驛馬會所（土屋店）　櫻天滿宮（道磨碑）　植木市（三藏圓店 大丸屋店）
鳥屋圓店　廣小路　福生院　覺正寺
紫川　御旅所　柳藥師　朝日神明宮
阿弥陀寺　木佛涅槃會の圖　若宮八幡宮　若宮祭の圖
性高院　朝鮮人應答の圖

極樂寺　大光院　烏瑟沙摩明王縁日参の圖
總見寺　閻山和尚の古事　清壽院　那古野山
大須真福寺　馬の塔の圖　七ツ寺　同境内茶屋の圖
善篤寺　浄久寺　光真寺　西本願寺掛所
二子山の古跡　妙善寺　日置八幡宮　千本松
延廣寺　東輪寺　犬御堂　古渡
稲荷社　大泉寺　洞仙寺　南方鍋
闇森八幡宮　古渡橋　川口長館店　柳森
元興寺　道場法師の傳　為朝塚

有圖無解似圖無此
解詳而有此圖展玩
初知一帙裡宛然八
郡舊名區

魯菴石川嘉貞題

迂菴丹羽輔之書

廣井宮倉に貢米を納る図

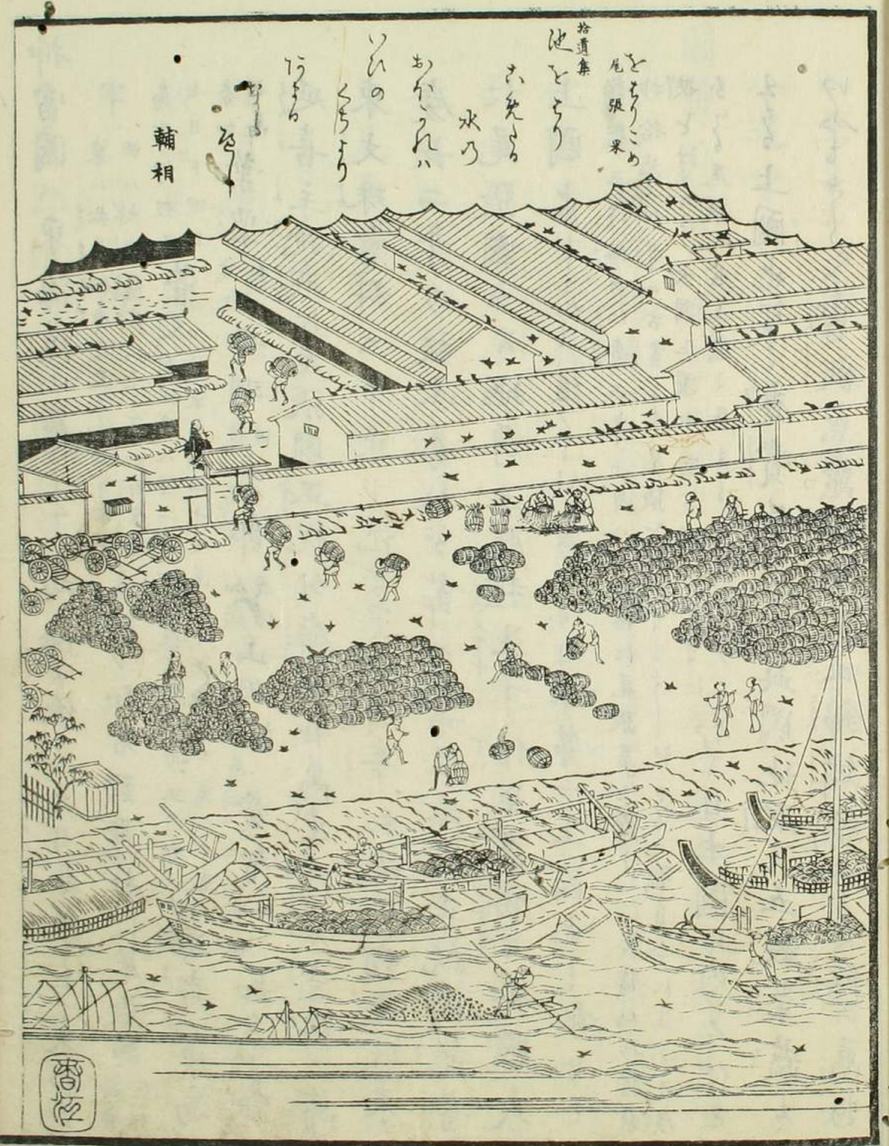
太閤秀吉公小田原北条退治の時尾張の國主織田信雄ゑ加勢いたしが兵粮の時へなくして用途欠けらるゝ福島正則公の時其先駆にあたらく数百間に大うゝ蔵三棟を清須の城内に作りて多くの兵粮を納めをし是を十五年御遷府の時を清須の三ツ蔵と成廣井ようしに多くの蔵を作りをくるゝ

いつくまで其倉名ようゝ今に残るを三ツ蔵と也

拾遺集 尾張米

をちこち
池とちり
ゆ発る
水の
おとこれハ
いとの
くちち
ちるる

輔相



抑當國ハ東海道小屬ニシテ南海ニ依テ大日本のうち東西の半 東ハ松前蝦夷に至りて三百余里西ハ大隅薩广に至りて三百余里 より和名類聚抄に尾張國 國府在中島郡行程上七日下四日 管八 田六千八百二十町七段三百十歩正公各二十萬東本稲四十七萬七千束雜稲七萬二千束 海部 阿末 中島 奈加之萬 葉栗 波久利 丹羽 波 春部 加須我倍 山田 夜萬太 愛智 阿伊知 知多 延喜主税式に尾張國正税・公廨各廿萬東國分寺料二萬東文珠會料二千束と記セリ又丹峯和尚ガ類聚往来慶長二年の板本易林ガ節用集日本國正統圖記等に尾張國云云地厚土肥種生千倍里多勝日本國大上國也と後に此書も日本第一上國也と記セリ類聚三代格の仁壽三年六月八日の格に尾張居上國とよい官職秘抄職原抄拾芥抄等の古書も尾張を上國なりと記セリ職員令に法云の廣説をけりて大國上國中國下國と四等にあるに尾張ハ其上國ニ居まるがゆえなり 扨日本國の内にて係を上國也なり褒賞セラルハ此國地肥て五穀菜蔬そ[illegible]禽獸魚鼈材木器皿錦繡絹布其餘の萬物小至ルまで民用一も缺るものなく豊饒他國ニ勝レ殊に四方八達中央の地なるゆえなり

國號の起リハ尾張風土記の殘缺に尾張國者經世穂曽績古之所領行也 神日本磐余彦天皇神武天皇 東征之時討伏湯貴首人歸化之場海部佩室臣奉射 天皇天種子命以三角石弓及玉太羽矢射殺佩室臣討終於海部氏姓因此號其國謂於波里乃國謂尾張者音之訛也と云ふ尾張國號の濫觴ハ又惺窩先生のかける職原抄に頭書小 日本武征東夷而還於尾張所帶之劔在熱田勢田明神是此劔本自大蛇之尾張出劔也此劔留此國故曰尾張國と云ふ又凡そ新治今治小治字書ニ墾治也と云ふ なぐ云ふハ田畑を墾開きしより起リたる地名にて今の春日井郡小針村ハ國の中央ニ居て延喜式ニ載ル山田

尾張國號の濫觴神武天皇東征

法眼橋山筆

ひろうさ田に糸をさ
呼ふ下をるをとく
のかんと思ひて
いさふさるるひろ
てえのかぬ小品月さ
ニうあるるとして
いと春なきこちて
ふくあてにおの
たあるふくれ名を
よみる
ところ　柿本人麿

家集
春ごてハ
うめれ花かさ
笠れ
ふるとりて
めいとむ
三笠

郡 武衛斯波氏領國の時山田郡とやめ春日井郡にうつせて一郡とす 尾張神社は鎮座ある地なれど當國の田圃を墾そめ本土なるべしさればバ皇居の本土より起りて日本を大倭國と称せしごとく主郷の小針より呼そめしものなり墾開よりうるる名なんうさざうねど今ちき諸説をも並べ挙る次贅して以て参考に備へ南方知多郡にて亦の尾北もくはへうもしれバちう名つけしうしうも亦丸ごとき説し

愛智郡

愛智郡ハ國のうち東南の地にて文字ハ文字も定らず日本書紀の神代巻に吾湯市同紀の 景行天皇紀及び萬葉和歌集に年魚市古事記に相津 今の学者相の字の假名たがへりとす 日本靈異記に阿育知 本朝文粋ニ阿育寛平の熱田縁起に阿由知 ごとくさまざまにかけり 今は文字ハ續日本紀の和銅二年五月庚申の記を始とし 日本後紀三代實録類聚國史延喜式和名抄等は古書どもに愛智とかに從へるにかハ物の湧出をいふ古語にて榮華物語に血あえさせ給い源氏物語にあせにぬるうちもなどかさごとく此郡ハ水のうるさきあく田を墾に便りうるうるる故をうる田のいはゆるごとく称せしなり萬葉集に 小治田之年魚道之水手間無曽人者挹云時自久曽人者飲云挹人之無間之如飲人之不時之如吾妹子尓吾戀良久波已時毛無 ニ新撰姓氏録に小治田宿祢石上同祖 欽明天皇御代依墾開小治田鮎田賜小治田大連 又赤染衛門家集に尾張へ下ら云ふうるづしい所にあるる夜うるやはさぐいなりてすもるは杉ハ水小をのこぬるをばりのうるくさざうるほを何もうるるくばいやうなるおもいをにおきへまるぞよふ 沖なるうるは水いるるやめうるうむさうるうるなるを人のうるうし

赤染衛門馬津の
驛舍に宿る図

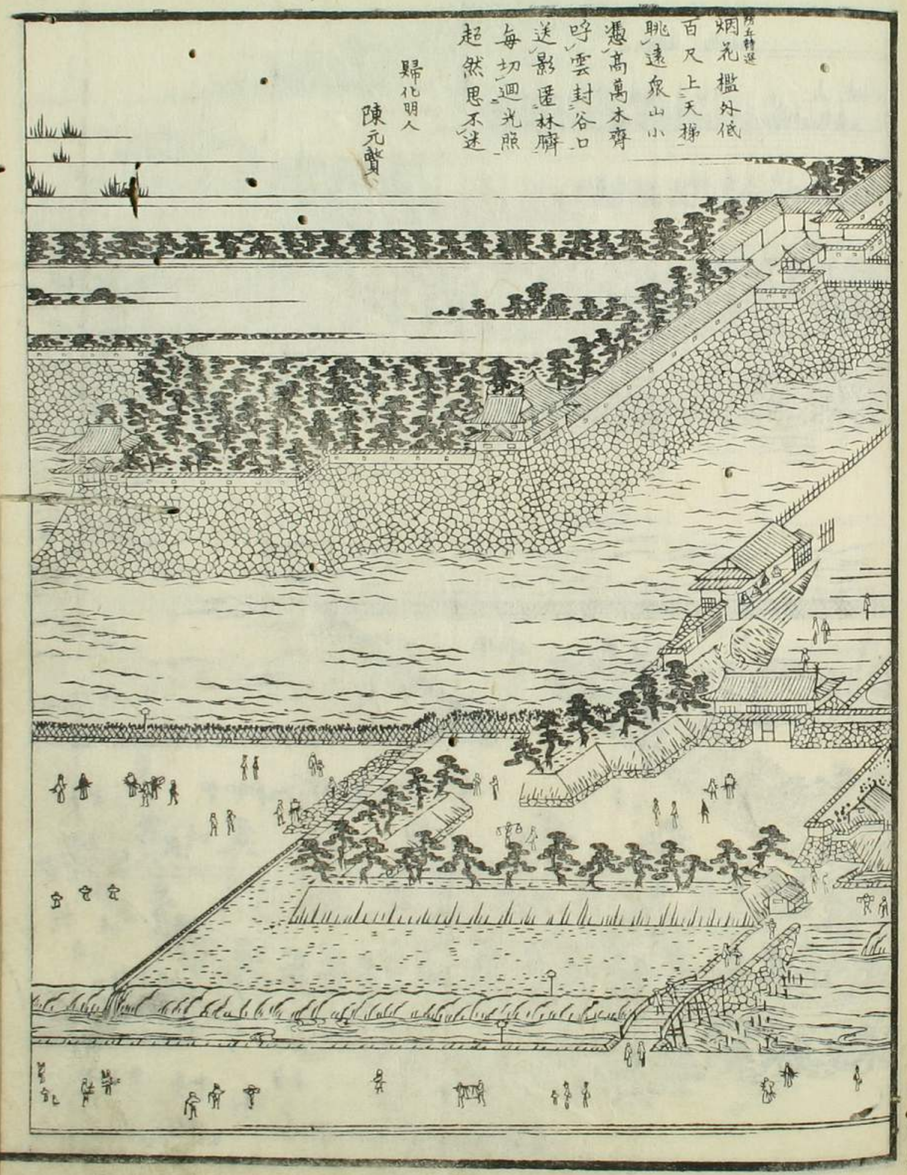
雅

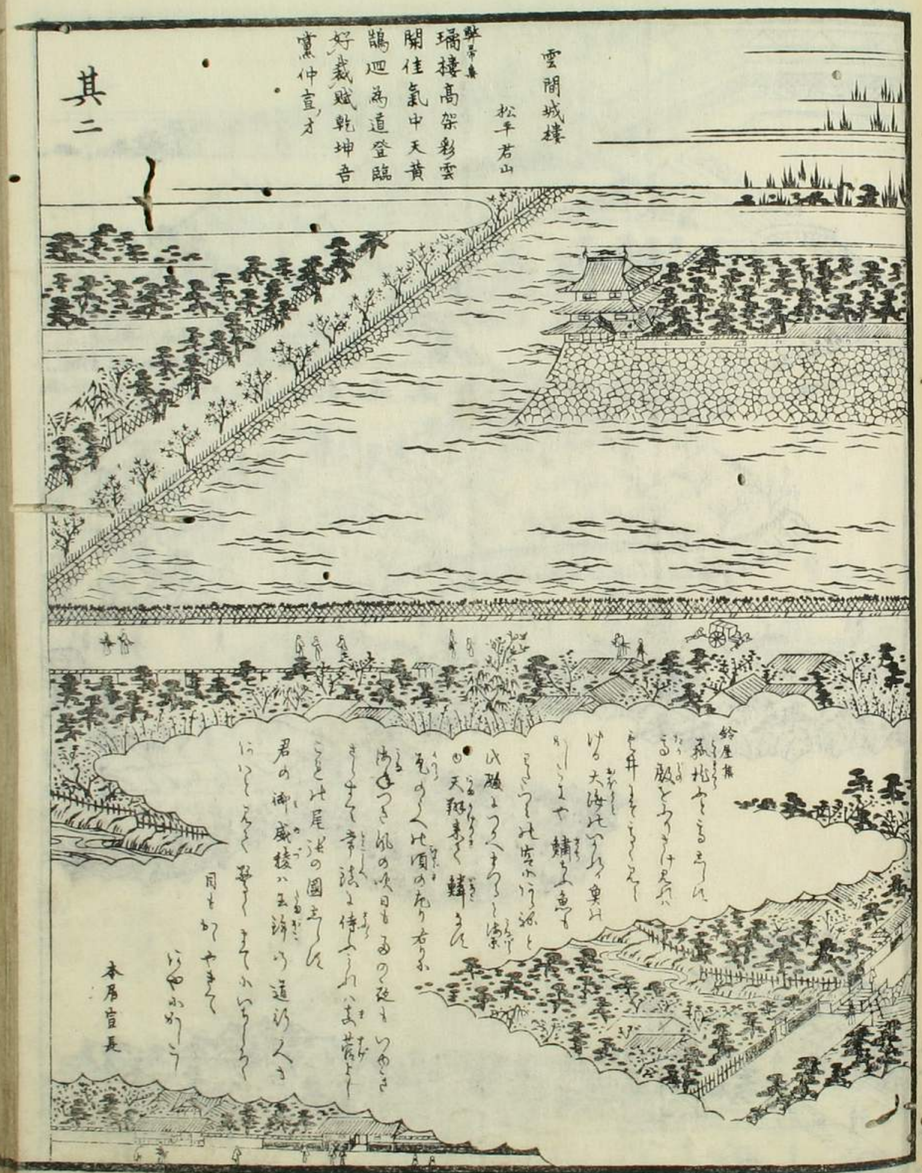
行と又同集に京いぞ〜九日にこそなりよ乱れいてかみ（尾張守大江匡衡朝臣）
やこいそ〜ふさぬのよりよりとりしば
こりれ山よりうりこの形とりもう〜又現存和歌六帖よの中前
攝政太政大臣の警れ分よ　ささたる沼田のうををかと
とて〜おもちの水ハわ〜ハ色もう　とりてうきあれと
きわるうとるべ〜（この万葉集のせう小治田と有づきと印刻本ハ小澤田と書しごく治田と沼田とあやまりしるす）
のたけれバはおもぐも
りくよれ〜うぐ〜

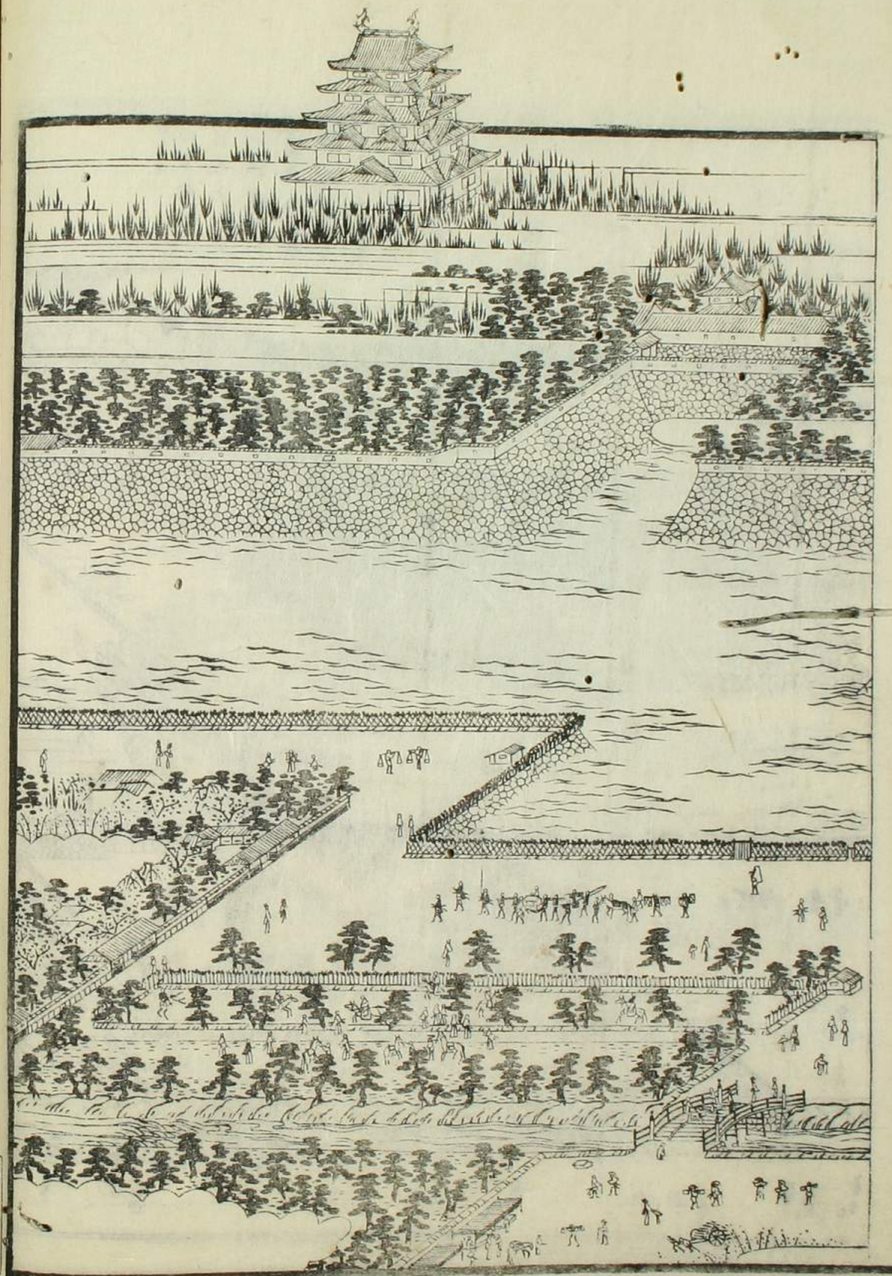
名古屋府　名古屋真福寺（大須観音と称す）所蔵の弘法大師御入定勘決記の奥書に于時貞治第三暦黄鐘中九日於尾張國那古野庄安養寺壇所忍寒氣書寫了と云しごく昔ハ那古野しかきてうづうる村里ハ庄園うりしが國君御居城の後ハ名古屋と書て廣大繁華の一都會となり東海道より美濃路へ通る本道其うちをつぬきて熱田の突出町より下小田井の松原町まで三里が程街衢五しきゝ孫工高軒をなべ西國北國の諸侯方參府帰國の往還はゝ京江戸上下の旅客常にたゝるはうさるべ三都ハも劣らぬ名府なり（府内の街衢多く堂宇郡と唐せり其うち大名根志水及び下小田井の三所ハ春日井郡に屬しれども町つゞきなるゆゑ名古屋の終よりとす）

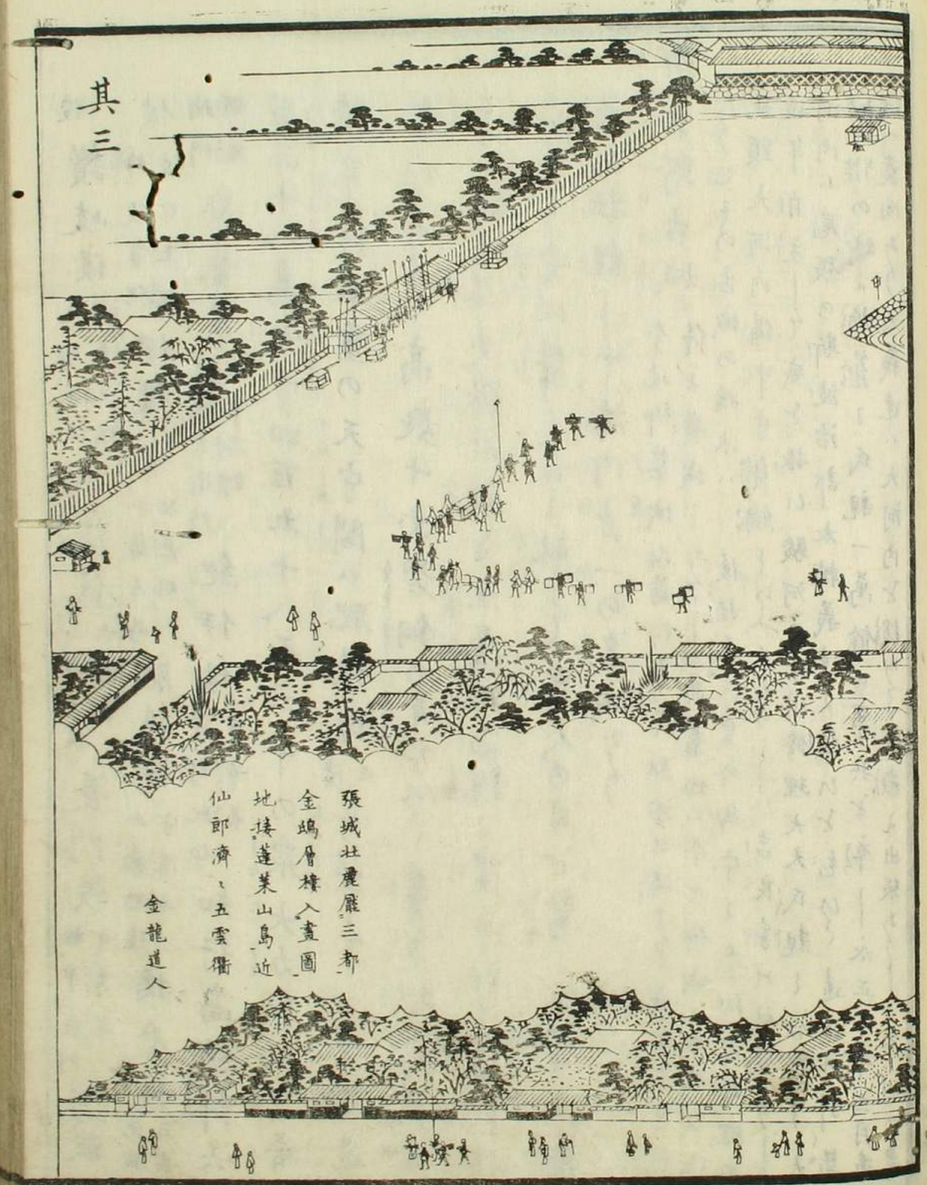
府城　足利家の連枝尾張守高経の子孫斯波氏當國の守護なりしよりて春日井郡清須小ゐしを二百餘年ハ後慶長十五年清須の舊城を廢して此名古屋に新城を御營築有りうバ　東照宮ハ仰を奉じて西國北國の諸侯二十人加賀侯（松平筑前守利光）筑前侯（黒田筑前守長政）豊前侯（羽柴越中守忠興）筑後侯（田中筑後守忠政）肥前侯（鍋嶋信濃守勝茂）肥前唐津侯（寺澤志摩守高廣）豊後佐伯侯（毛利伊勢守高政）豊後臼杵侯（稲葉彦六典通）豊後高田侯（竹中伊豆守重門）豊後日出侯（木下右衛門大夫延）飛驒高山侯（金森出雲守可重）

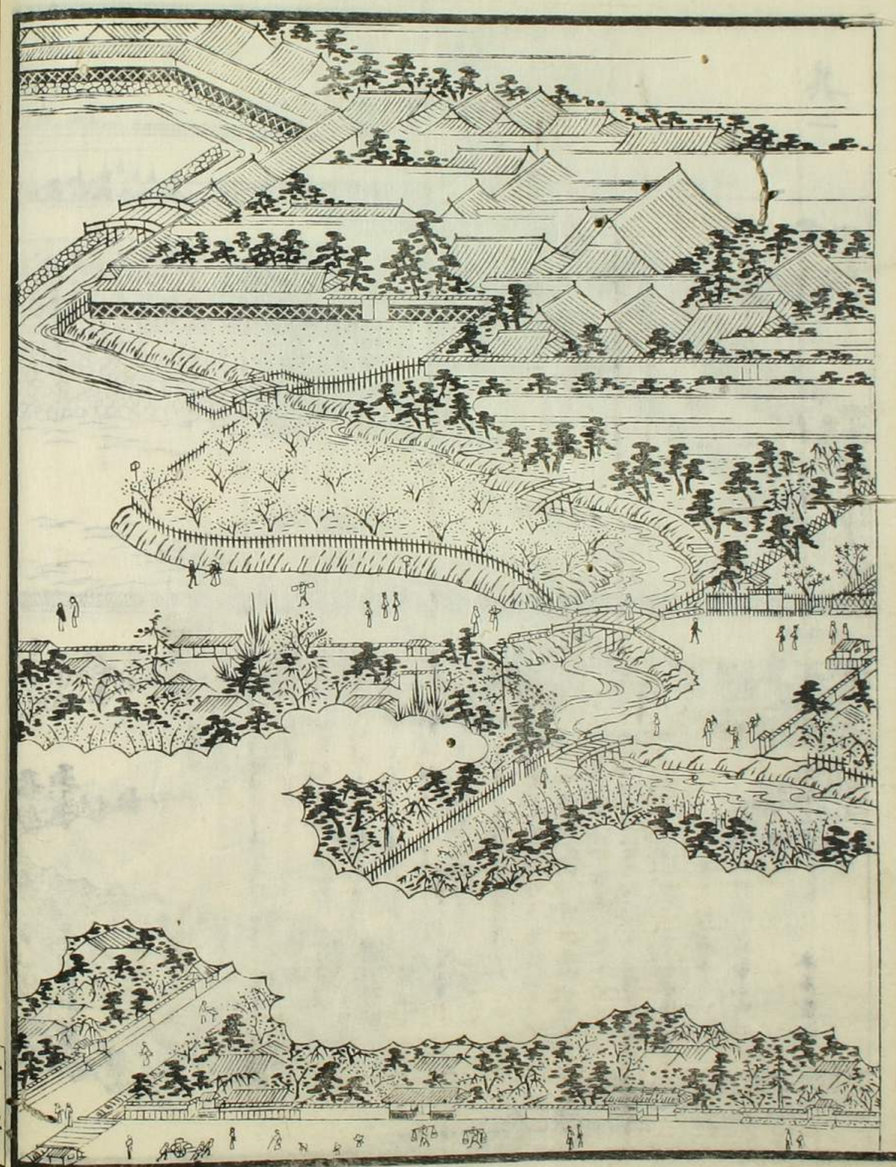
巾下新馬場より
御城を望む
図
宣阿
水雲集
西宣


梧左詩選
烟花檻外低
百尺上天梯
眺遠泉山小
憑高萬木齊
呼雲封谷口
送影匿林辟
每切迴光照
超然思不迷
歸化明人
陳元贇


其二
雲間城樓
松平君山
璫樓高架彩雲
關佳氣中天黄
鵠迴為道登臨
好裁賦乾坤吾
黨仲宣才
本居宣長




其三
張城壯麗麗三都
金鳩層樓人畫圖
地接蓬萊山島近
仙郎濟々五雲衢
金龍道人

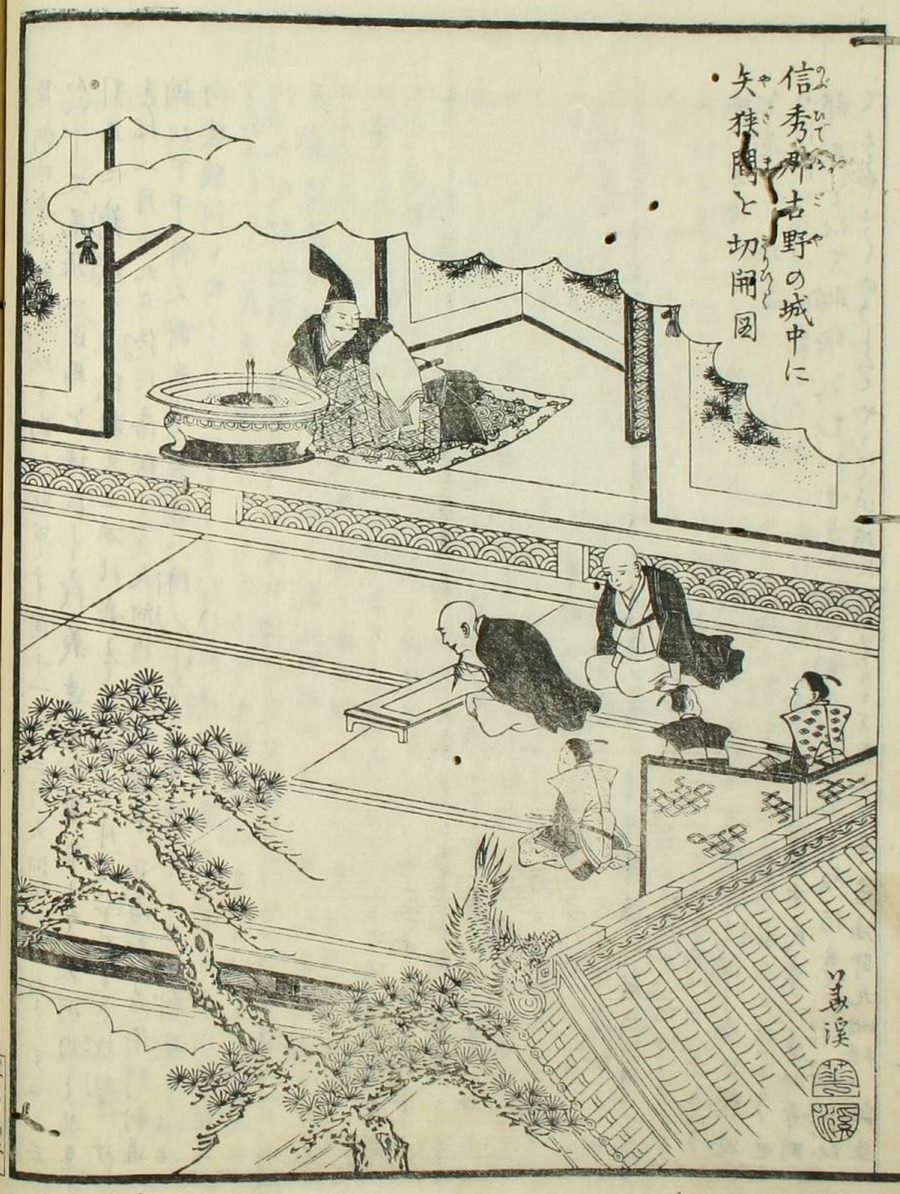


俊讃岐侯（生駒左近大夫正俊）土佐侯（山内土佐守忠義）長門侯（松平長門守秀就）阿波侯（蜂須賀阿波守至鎮）伊豫侯（加藤左馬助嘉明）肥後侯（加藤肥後守清正）播磨侯（池田三左衛門輝政）安藝侯（福嶋左衛門大夫正則）紀伊侯（浅野紀伊守幸長）知行高總計六百三十八萬七千四百五十八石三斗の衆大力を以て普請せ[illegible]五重の天守閣ハ肥後侯（清正）所望して一手よ造營ありし高數十丈碧銅の瓦を葺き菁きかゝね黄金を造まを丈餘ハ鯱を上層のあゝ置きけるゞ今に至るまで空に聳え日よ映して衆人の目を驚ゝ實よ無度の壯觀にして海内第一の名城なり

那古野古城

今ハ御築城以前にあるて弘治の頃ゝを城ともなく後柏原天皇の御宇よ參河國卧蝶の吉良家ハ被官なりしゞ後ハ地頭大河内備中守貞綱と云人ありしゞ其舊地ハ今の御城二の丸のうなりしゞその古城の始末ハ終よ廢城と云ハ近年自立して威を振い駿河の今川修理大夫氏親と合戰す大河内ハ尾張の斯波治部太輔義達よ援ひを乞ひゝ遠江の引馬（今の浜名の城よ相模了氏親一萬餘の軍兵と卒し永正十年三月遠江へ發向あり又義達ハ大河内と援けて深嶽よ出張あるゝゞ今川の家臣朝比奈十郎泰以ゞ為に敗軍す同十一年三月大河内勢ゝ引馬取ゝ引馬に籠城ゝ又尾張へ出馬を請ひしゞば義達再び進發して大河内と共よ攻撃けまゝば八月十九日終に落城して大河内貞綱其弟巨海新左衛門尉道綱以下千餘人討死し義達ハ降人となり普濟寺よ入て剃髪し（法名安心）向後駿河よ對して弓引まじきむね起請文を書めてぞ尾張へ帰國ありゝゞ大永のはじめ氏親尾張の那古野城を攻て子治部太輔義達家督ありしゞ大永の末ゝ義達の姉氏豊に嫁して東西隔てゝ志賀清須（斯波義統の居城也）の押へとなりぬるゝゝ義統の姉氏豊に嫁して東西隔てゝ志賀清須（斯波義統の居城也）の押へとなりぬるゝゝ義元を入ゝ勝幡の城主織田彈正忠信秀（清須三奉行の一人）今川氏豊と共よ連歌を好みゝ互よ贈答せしゞ或時小田井川の洪水よ使者過ちて連歌の懐紙を入まし文箱を流失させしゞ其後ハ互よ會合し信秀那古野の城中に至り一間の居所を乞ひ得て五三日或八十日程て逗留し連歌茶湯ありて恣ひゝ事禄五年の春例のゆく信秀滞留あるゝよ本丸に向いて窓を切開きしゞ今川の家臣是を怪しみ客人として有るゝゝ御館よ矢挟間を切るゝゝ心得ねとゆせしゞ氏豊聞入まゝ次ゝ人よ限ゝて別心ハあるゝゝ大樹覆ひいる柳の丸のゝゝけまゝ風流の窓よこそ[illegible]ゝ大病と偽て清須勝幡の家人を呼び集めてしゝめきゝゝを夜よ入ゝて今市場の方よ火事あるゝて城中さゝぎ立ゝ程よ若宮社天王天永寺安養寺に火かゝて火の子を城へ吹つをしゝ城の東南の方より勝幡の兵士ゝ置の城主織田丹波守と調し合せ鯨波を造て攻寄せゝに柳の丸よも関の声を合せて火を放ち内外ゝりせめけゝゝバ今川の家士不意の夜討に驚い負て皆討死す氏豊ハ藥師寺刑部丞と以て助命を乞い母方の縁と便ゝに上京しぬ信秀ハ計略を以て城に移ゝゝゝゝ天文三年吉法師丸（信長の幼名）の誕生

信秀丹古野の城中に
矢猟閑と切開図



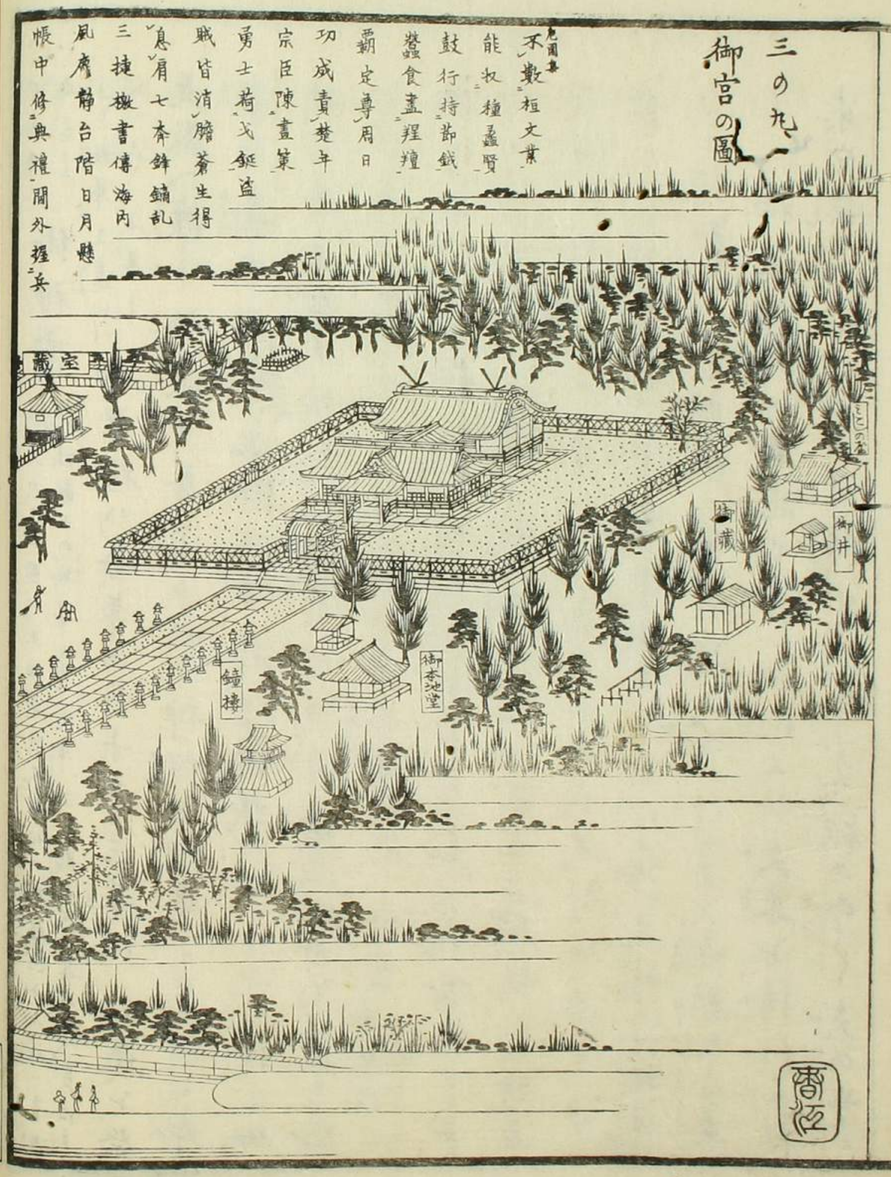
の翌年南の方故渡に新城を築きて信秀引移り那古野ハ信長の居城
同廿三年七月十二日清須の家臣織田彦五郎信友斯波義統を
弑し猶清須よりも那古野に押寄せ其城よりも那古野ハ信長の叔父孫三郎信光の居城と
郎と云ふ其年十二月廿六日信光も亦其家臣坂井孫八郎に殺せられ
明き心にて信長に追ひ後に廢城に成代り同三年正月信勝も
殺心にて信長に追ひ後に廢城に成代り那古野合戦記宗
長手記同宇津山記遠山信春惣見記木村高敦の續武家閑談尾陽雜
記鹽尻に見えたり
考畧抄に見えたり

東照宮御宮（御郭内の三の丸に御鎮座）

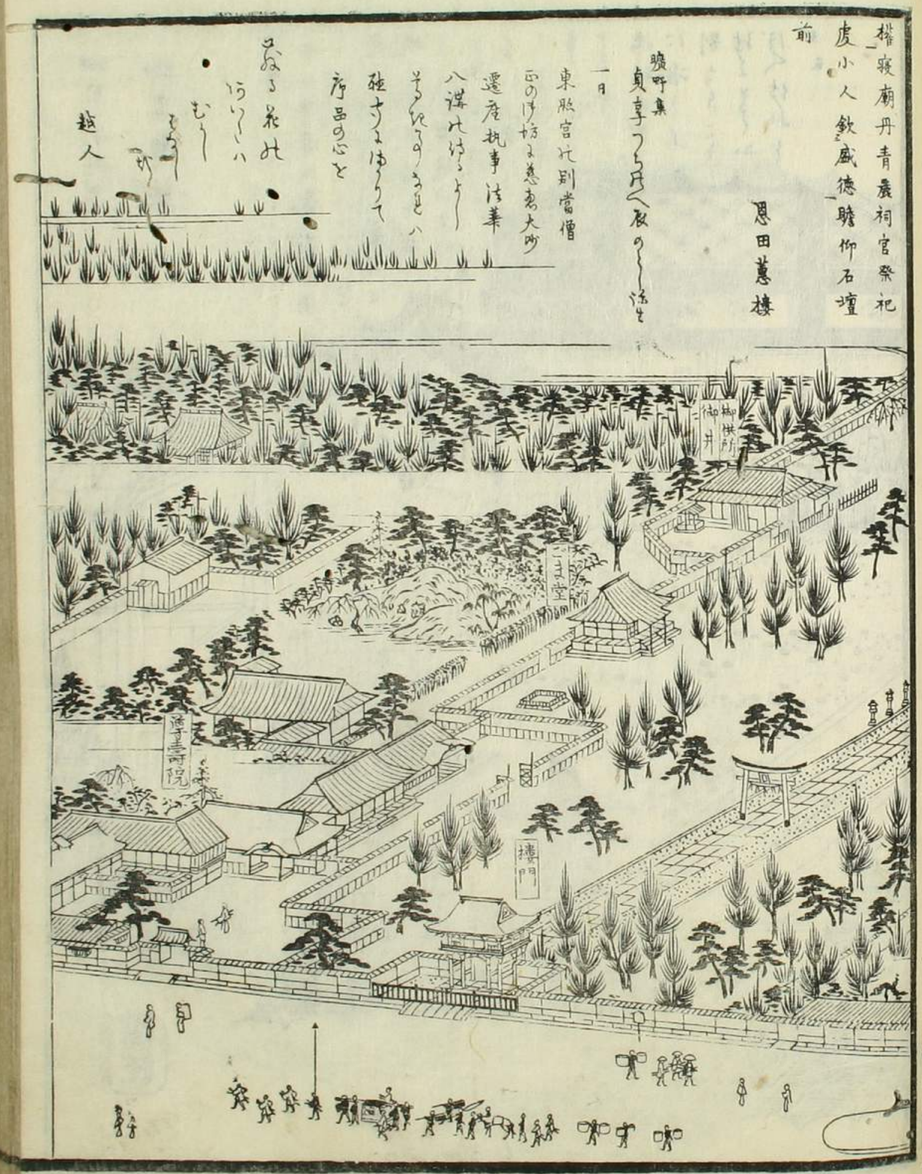
國祖源敬公大僧正天海（號南光坊）を請
待して元和五年己未九月十七日此御宮を創建して
中央に　贈太政大臣正一位源朝臣家康公の御神像を
安置し奉り左に山王權現右に日光權現を配享し給
へり○御本社（南向）祭文殿渡殿中門瑞籬御供所鐘樓神輿
殿御寶蔵御井鳥居樓門行道善美を尽し或は朱粉
丹青を施し又は金銀銅錢を鏤め莊嚴の美麗いとかぎりなし
○御本地堂（薬師及び脇士三菩薩十二神將四天王の像を安置し護摩堂不動及び四天の木像十天

の画像を安置す）御神實（御太刀三口國行正恒宗近又歌仙の色紙三十六枚ハ青蓮院法親王の御筆なり又半切一顆なり其外数多なり）
板峯に遣はる御祭禮ハ毎年四月十五日三基也　神輿を祭
文殿へ渡し神供を奉り十六日神饌を調進し早朝に舞
樂を奏す同夜　御神前に社僧論議なり十七日暁に御
供を奉り罪人行赦の義ありて後車樂及び町々の数多国
を引渡しかくして
神幸まします　神主（騎馬）社僧（手輿）末寺の僧十人（騎馬）御城下十
社の神主まて供奉し警蹕の官士前に二騎後に二騎其
餘徒行の諸官人まて悉く四千余人にして善美華
麗を尽すのみならず嚴重端正かくのごとくハ又比類稀
なる行粧なり　神輿の前に樂人歩行して音樂を合奏
し神輿通御の御道すがらハ両側に竹矢来を結いて往
来を禁じ家ごとに濡掃して砥のごとく矢のあと

三の丸御宮の圖



危圖事
不數桓文業
能收種蠡賢
鼓行持節鉞
盤食盡程羶
霸定尊周日
功成責楚年
宗臣陳畫策
勇士荷戈鋋
賊皆消膽著
生得
息肩七奔鋒鏑亂
三捷檄書傳海内
風塵靜台階日月懸
帳中修典禮閫外罷兵



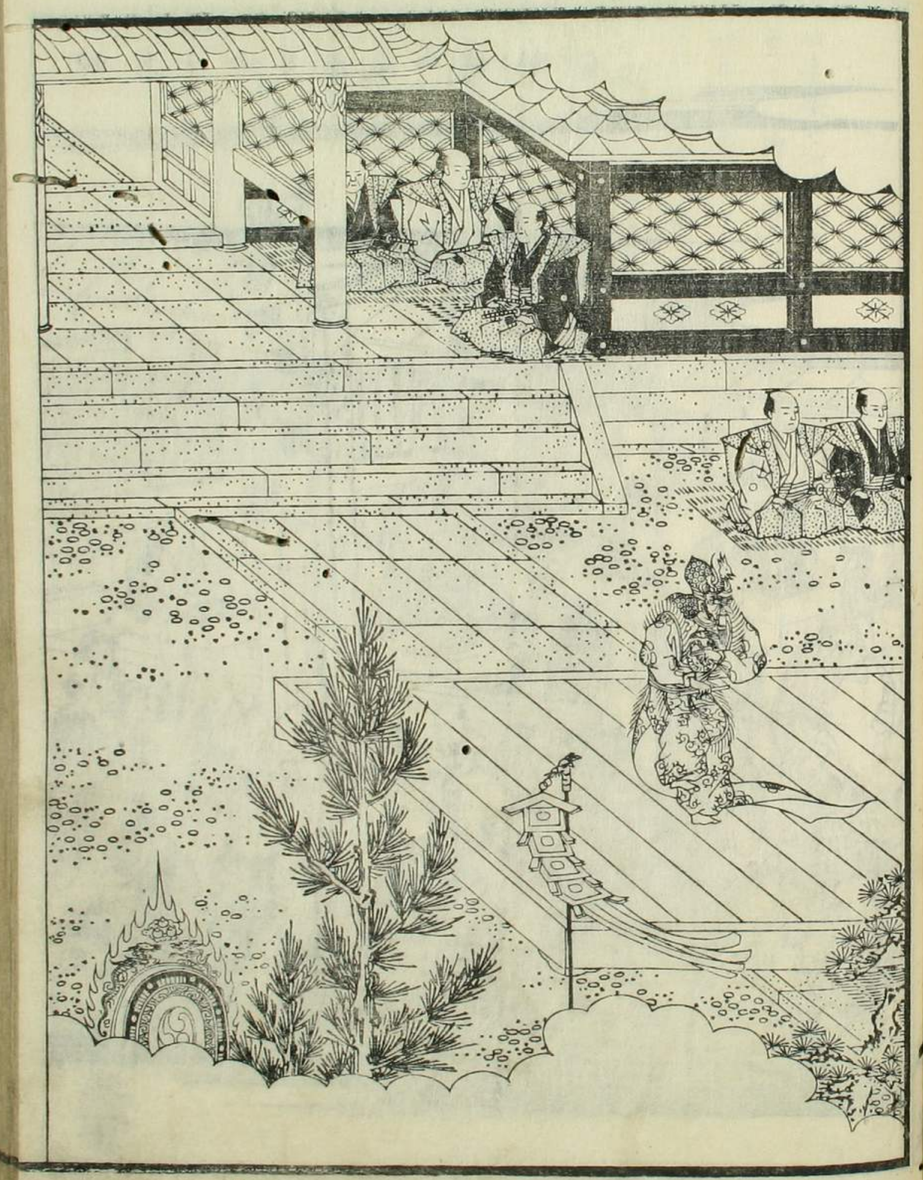
檜寢廟丹青震祠宮祭祀
虔小人欽感德瞻仰石壇
前

恩田蕙樓

曉野集
夏享つら〳〵夜のしらけ
一日
東照宮に別當僧
西の坊なる慈恵大吵
遷座執事法華
八講れはるよ〳〵
そ〻ぬるのもとハ
独すまはりて
序品の心を

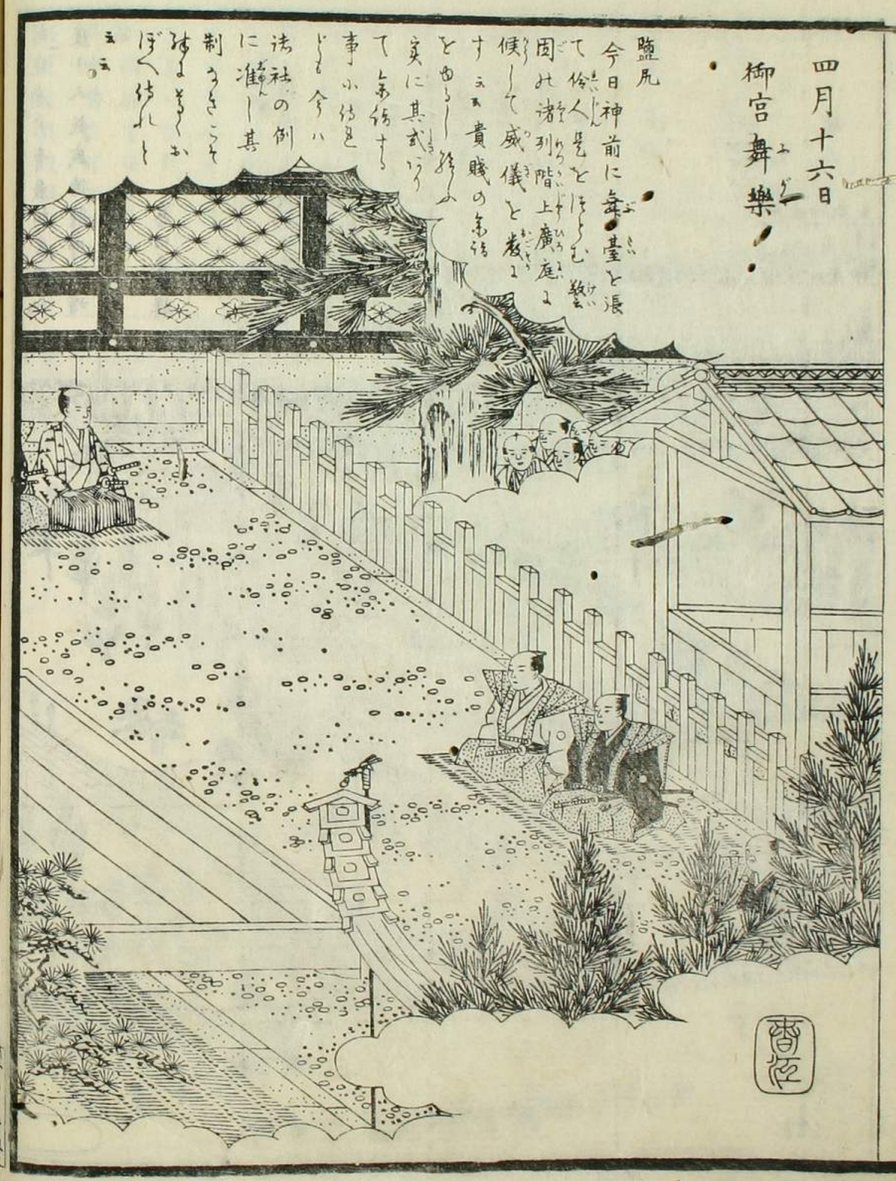
ふるる花は
ら〳〵ハ
むし
もち
ゆ

越人

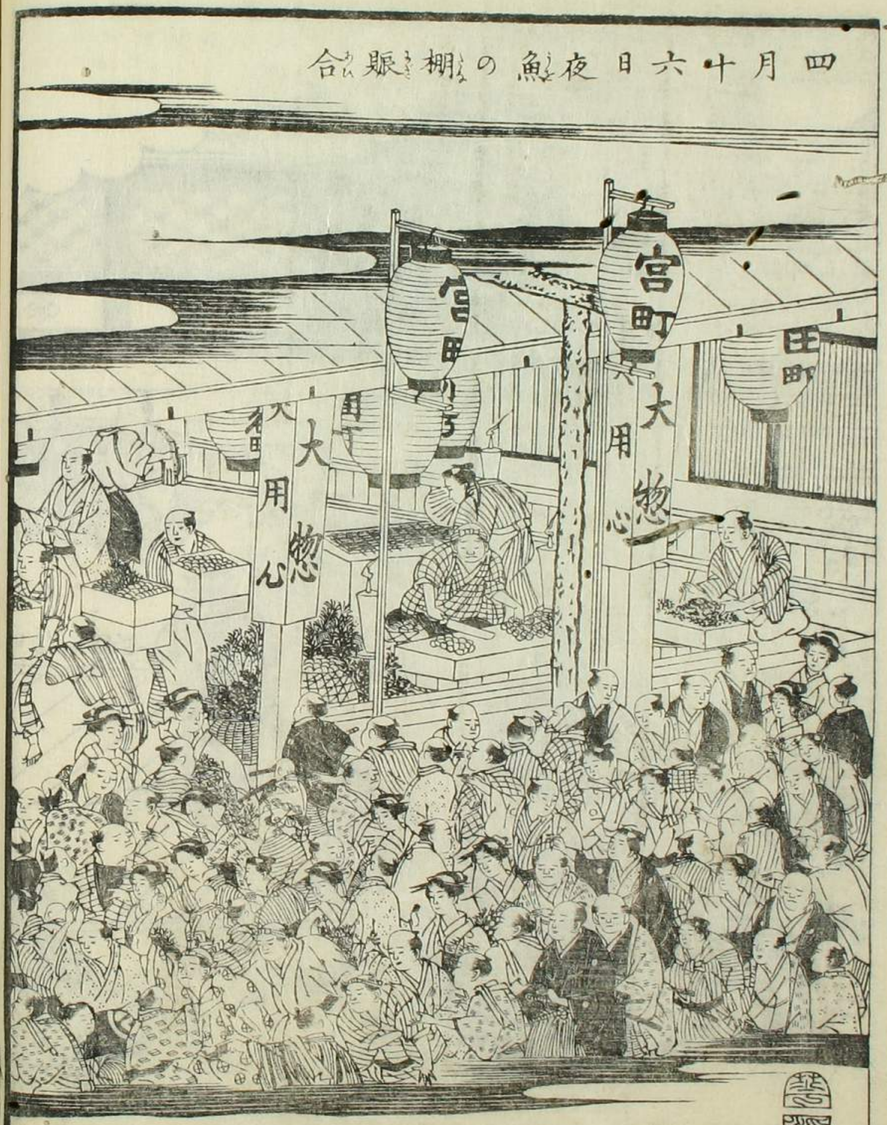


四月十六日
御宮舞樂

盤凡
今日神前に舞臺を張て俗人見物をゆるし數
因れ諸列階上廣庭に
候して威儀を
す云云貴賤の分位
をあらはす
実に其式うて分位すること
事ふ位を
じる今ハ
法社の例
に準し甚
制ききこそ
はよきこと
ぼく位れ
云云

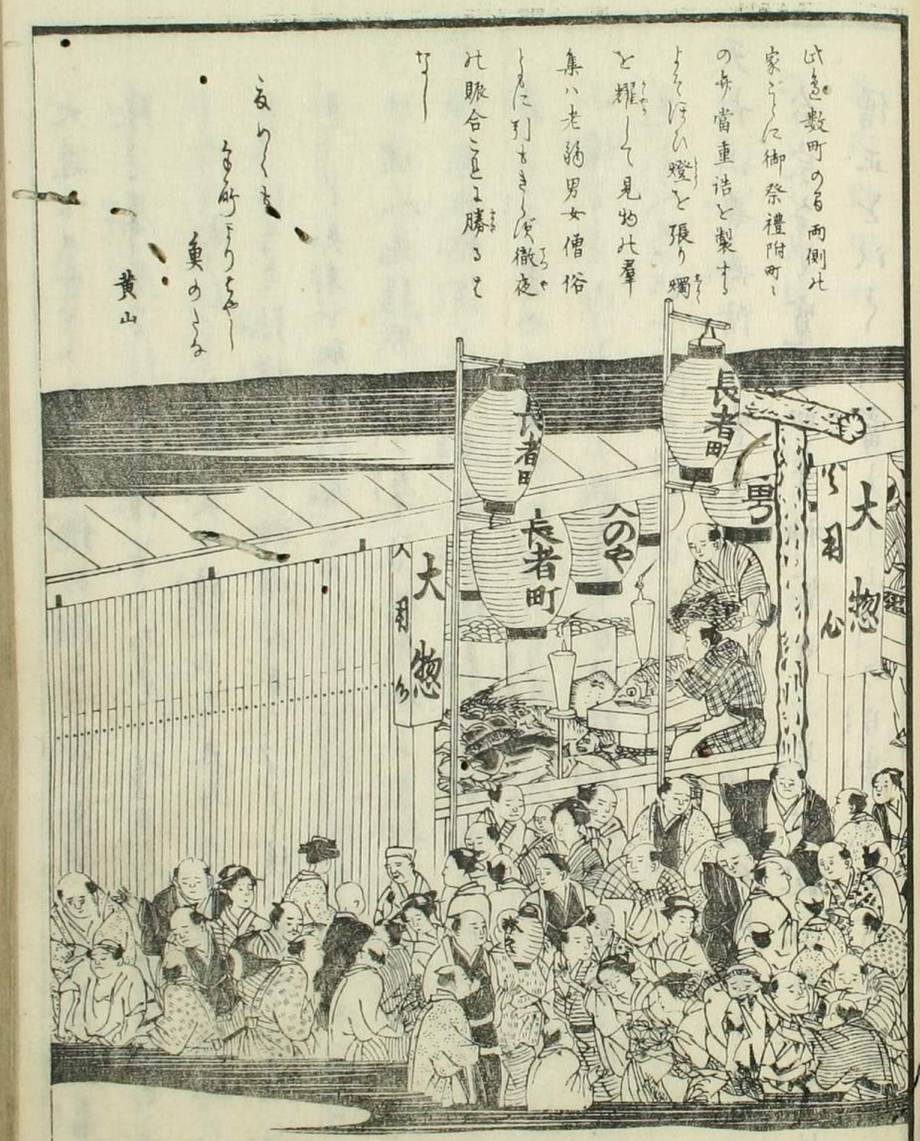


四月十六日夜魚の棚賑合



武邑數町の名所両側に家々に御祭禮附町々の名所當重詰と製する ろうそくほい燈と張り燭と耀して見物に羣集ハ老弱男女僧俗また引もきり後徹夜に賑合ことに勝ること

黄山



大道もさかり磨ける鏡の面に似たるあゆの桟敷に幕と
張り屏風をたて毛繧繝などきて拝見の男女貴賤少長
をとわかつ美を競へるも太平のさまにて　神徳のか
ぎりなきを弥増しぬ　神輿還幸ありて後八家だに我後
れじと矢来を取拂ひ居くのかざりを本へ復るありさまは又扶桑
に諸人老弱男女手を攀て往来挟しと押合ふ賑合まで今
神恩の餘澤にて昇平の瑞象上下万歳を謳ふ慶びいと
尊くぞ見せる猶御祭禮の首尾次序等委しき事八画図
小讓にくはしく略す画者筆力に精詳細密至り盡せり
見る人思ひを潜め心を留る

天長山尊壽院神宮寺　御宮の別當なり　天海僧正の開基にて天
台宗なり寛永四年神宮寺と号け敲山の珎祐權
僧正とゝく別當にて山門の日蔵院及び當國春日

井郡野田村の醫王山密蔵院を兼帯して上来院と名
のりて其後世に僧正に任じ尊壽院を通称とす

神主吉見氏　もと京都の人にて岡崎左近菅原直勝
にゝ　勅にて　東照宮の祠官となり姓名を
改めて吉見宮内太輔幸勝と号し正五位下に叙し代ゝ
神主職なり

将軍家御代々御霊屋　御宮の西隣なり

亀尾天王社　御宮の東隣なり鎮座

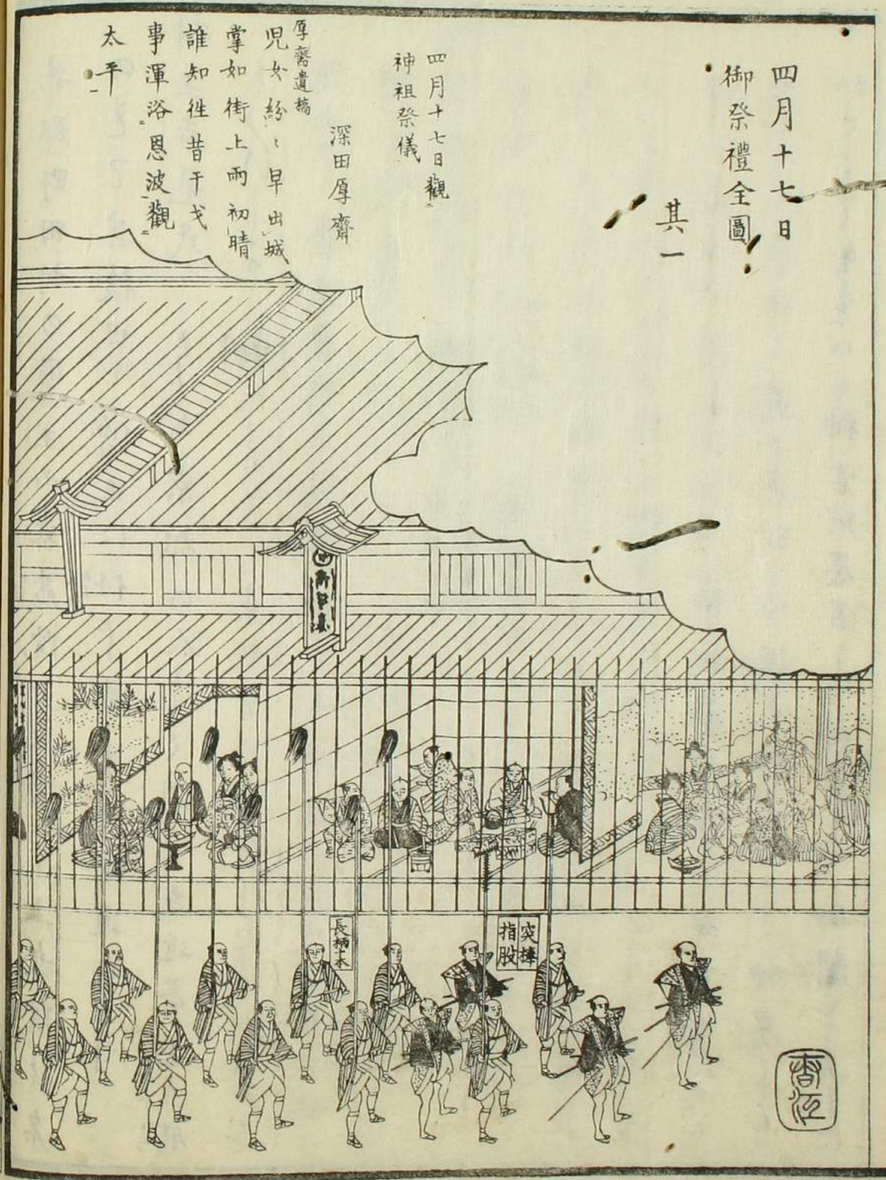
醍醐天皇に延喜十一年三月十六日
勅によりて此地に鎮座あるべしと當社縁起に見えたり天
文元年三月十一日那古野合戦の兵火に焼亡せしかば同八年
再び造立ゝ慶長十五年御城御宮築の時御郭内に
ありしを他に遷さんとむしの議定ありしかど神慮にて
かゝるべきもなしバ　神君に思召て神前にて御闔とりしに

四月十七日
御祭禮全圖
其一

四月十七日觀
神祖祭儀

深田厚齋

厚齋遺稿
児女絲〻早出城
掌如街上雨初晴
誰知往昔干戈
事渾浴恩波觀
太平



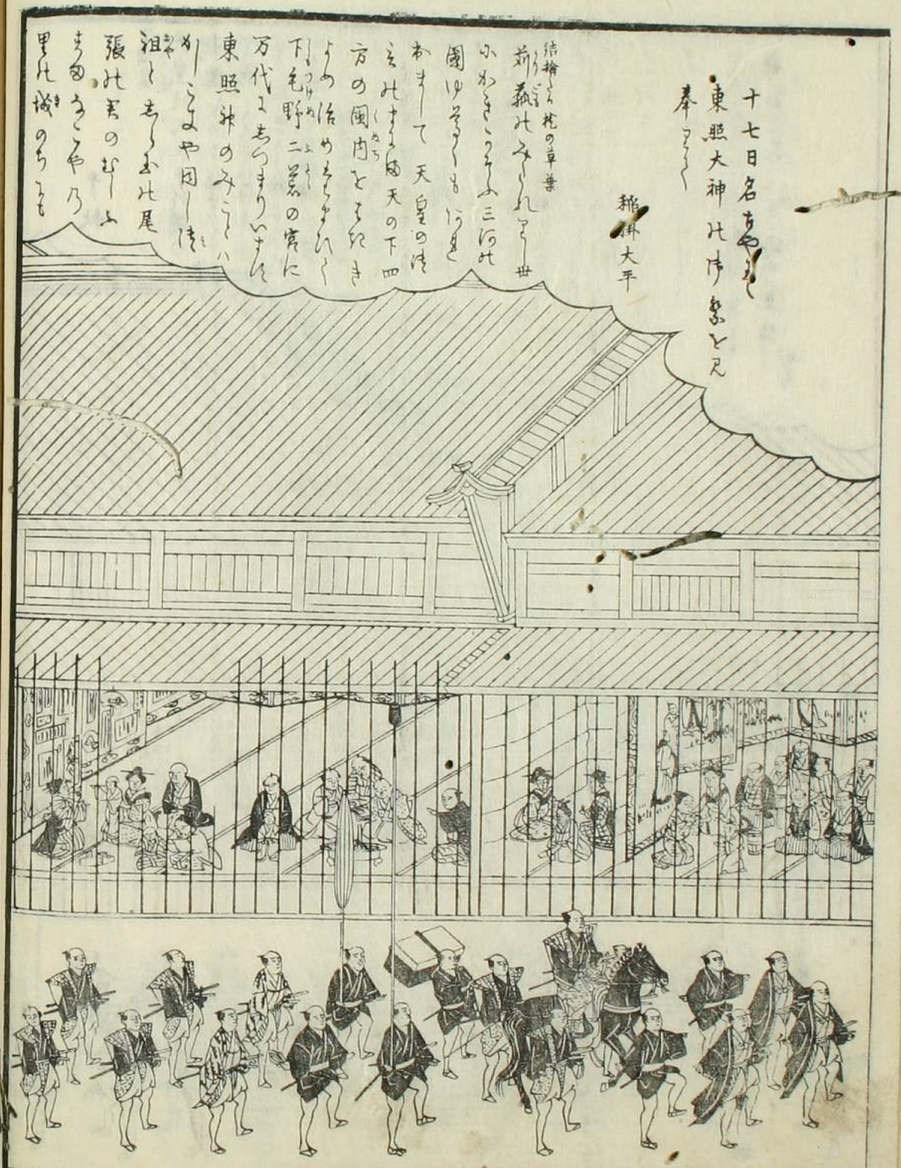
千秋

千浦の玉
天皇はたきたん國の
女國といはるる
女國とは
こは神さまい
ます　東照神の命
はたきたん月日は
ようこそ　ふかやはま
て天の下四方のおも
おもしろくあめつち
ひろく此神はいとみあ
ゐく食國とみちそ
らてきた世ひらけの
日ふとにその時きよいら
きはるる人くれはけ
そ〻〻〻

十七日名高き東照大神社御祭礼奉る

稚林大平

結構なる花の草葉
前義社みそれ
かかさうふ三河社
国ゆそくも
おまして天皇の
えみまる天の下四
方の国内をとろき
下毛野二荒の宮に
万代をちまりいまし
東照神のみこと
なりこそや国しき
祖と志て玉社尾
張社宮のむしふ
まる国をとろ乃
里社樹のちも

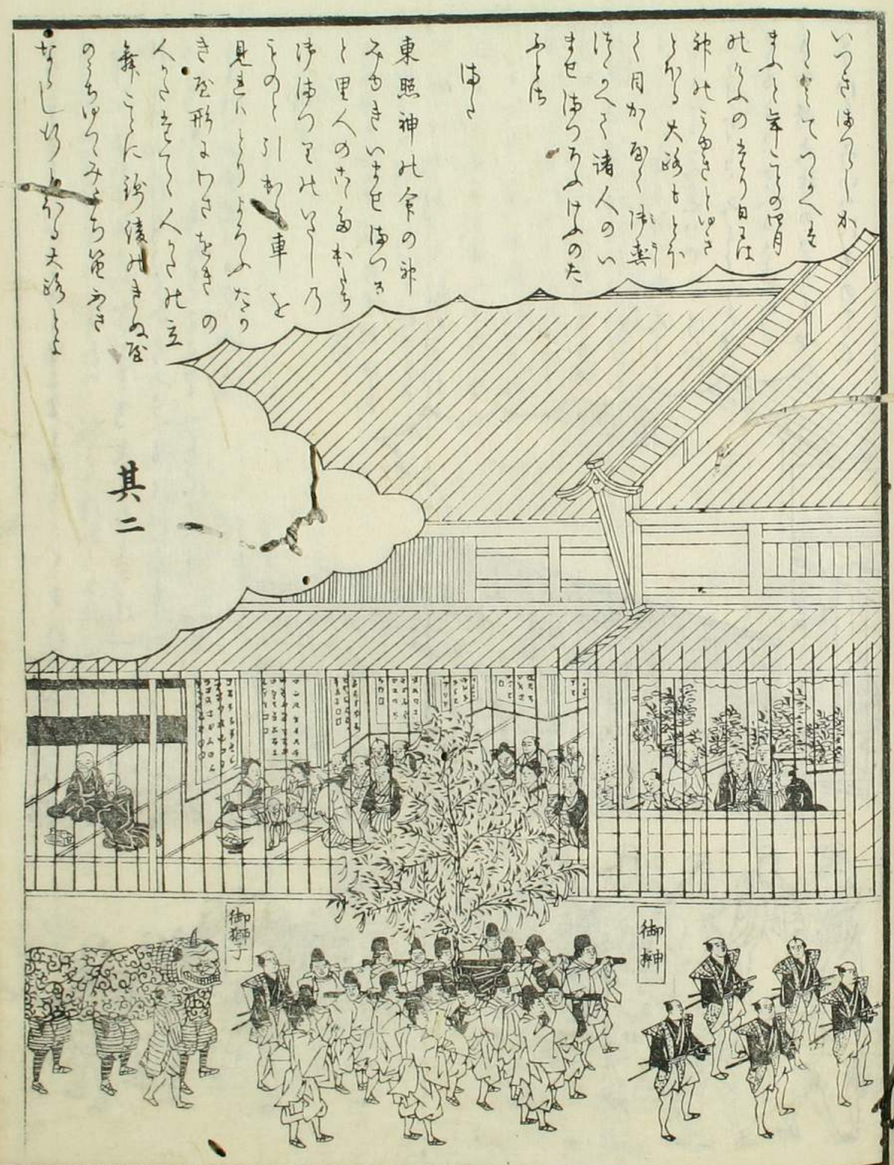


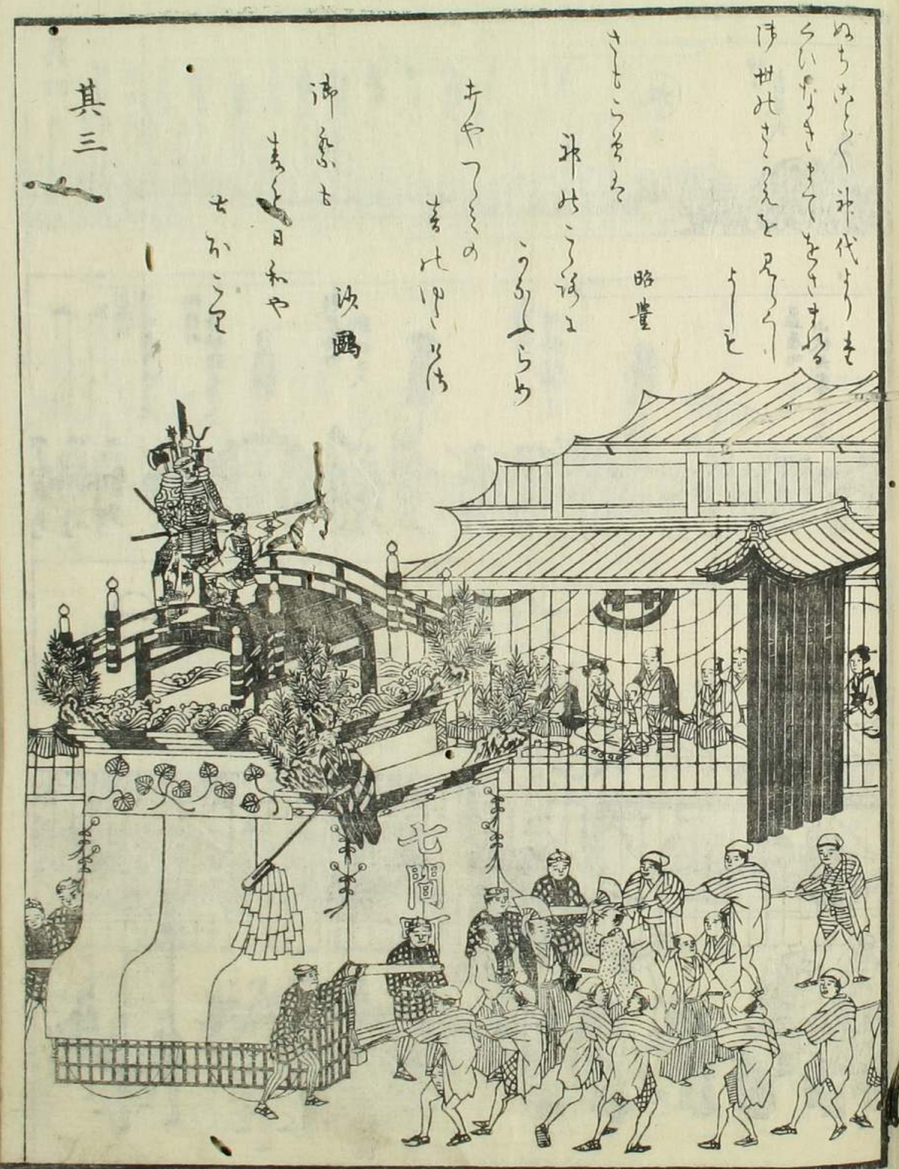
いつきほうしかしてつくをまふしを年こをの月日は神社こうもきしゆさ
ふる大路もまかく月かく国無ほうこく諸人のいませほうろふけふのたふとさ

ほうさ

東照神社宮の神
みもきいませほうる
し里人のかくるおもち
ほうほうをけいをしの
うをの引車を
見まいふりをふなう
きを形よりさもきの
人をそをく人をけ立
森こに珍後社まふ
のちゆくみをち宮おさ
なしかりふる大路をを

其二





其三

其四

伏見町
淀町
下御園町
御園寺町
上材木町
下材木町
元材木町
納屋町
鹽町
堀江町
堀詰町
戸田町
已上
七十五人
神主
吉見氏
九

玉屋町
懸指長柄者七十五人
両替町
子供鎧武者九人
瀬戸物町
頼政三人
大津町
弓鉄炮持十人
孟屋町
山伏大峯入九人

傳馬町
駿河町
突袖子供十人
外ニ
羽織着子供
十人暑之
一

御神馬三疋
御弓三張
御長刀三振
御鎗三振
青神者

閼伽治町
唐子十人
五條町
順礼花荷十人
和泉町
同
十人
上七間町
壽老人
鹿
唐子遊十人
練屋町
比丘尼十人
八

傳馬町
林和靖車

傳馬町
雨霰

其五

十

御太刀一振
御鷹匠二人
御弓十人

樂師十人

御簇

御神輿

嶋田町
関羽十二人

小市場町
羽織着子供六人

吉田町
刀指子供八人

二

上畠町
雷車

七

石町
鍬鉋持十人
鹿狩子供十五人

小牧町
追狩子供廿二人

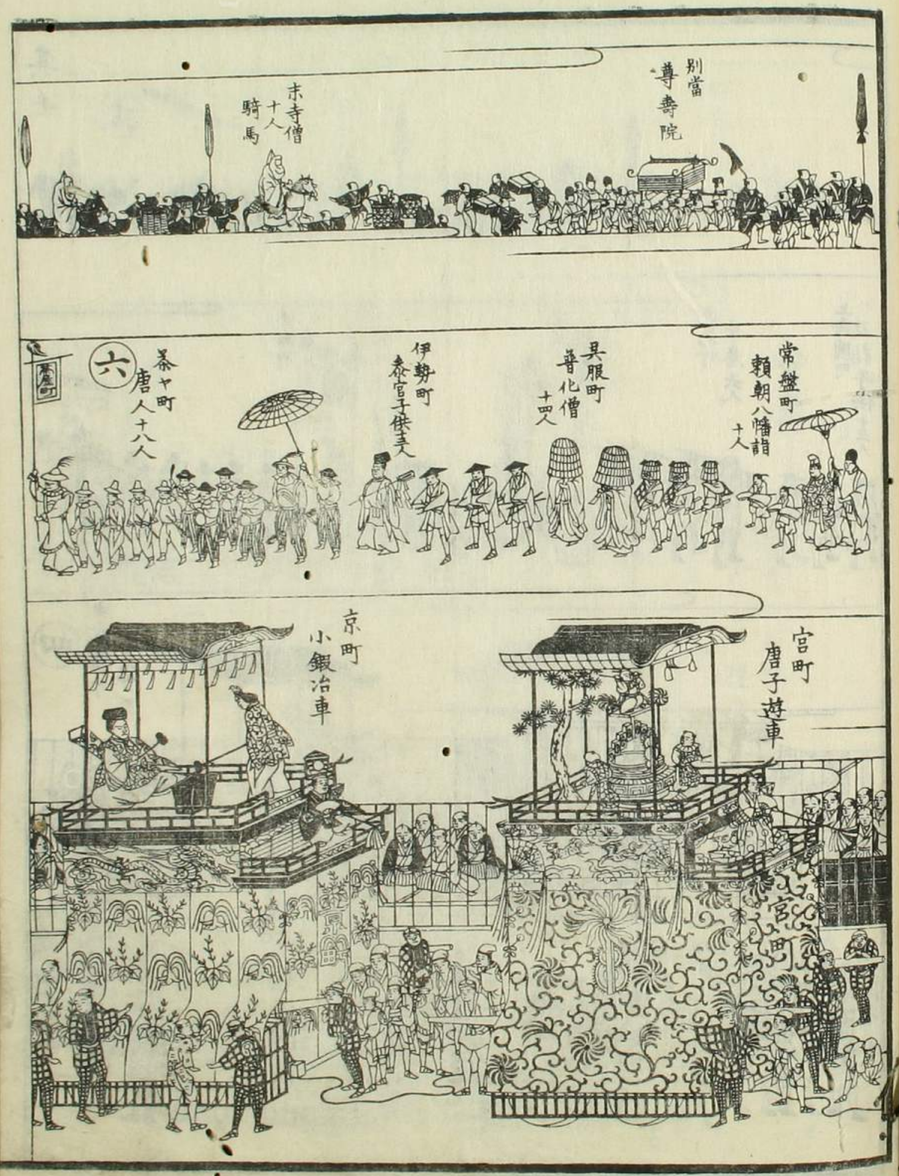
西鍛冶町
茸狩
三人

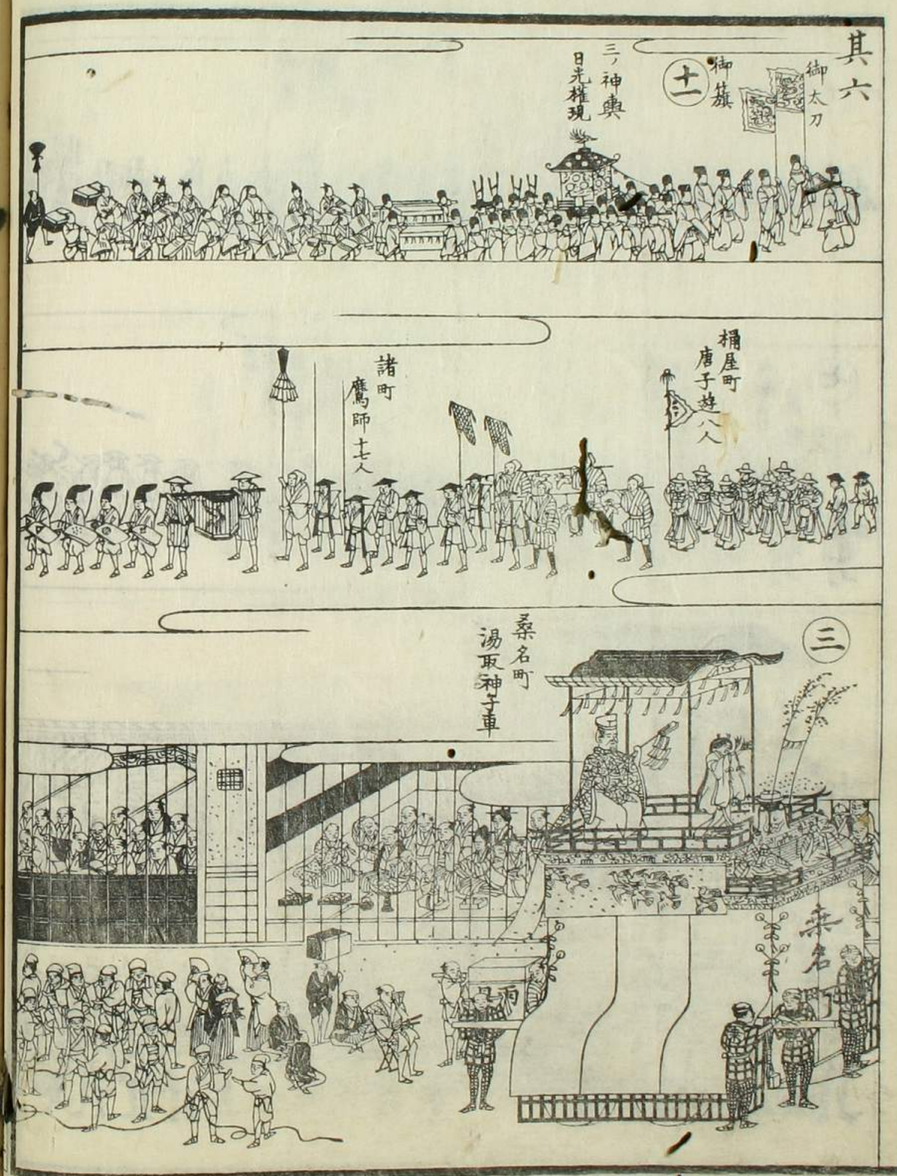
御簇

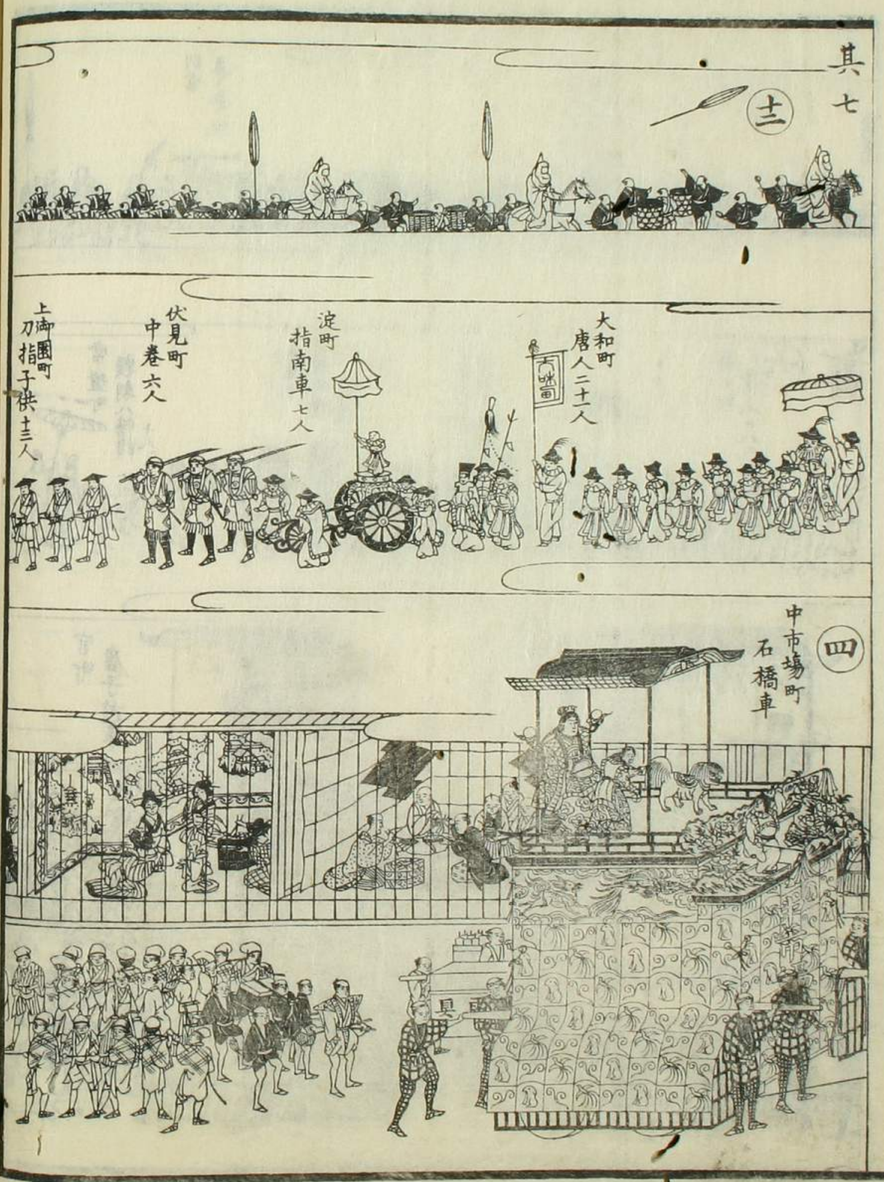
御太刀

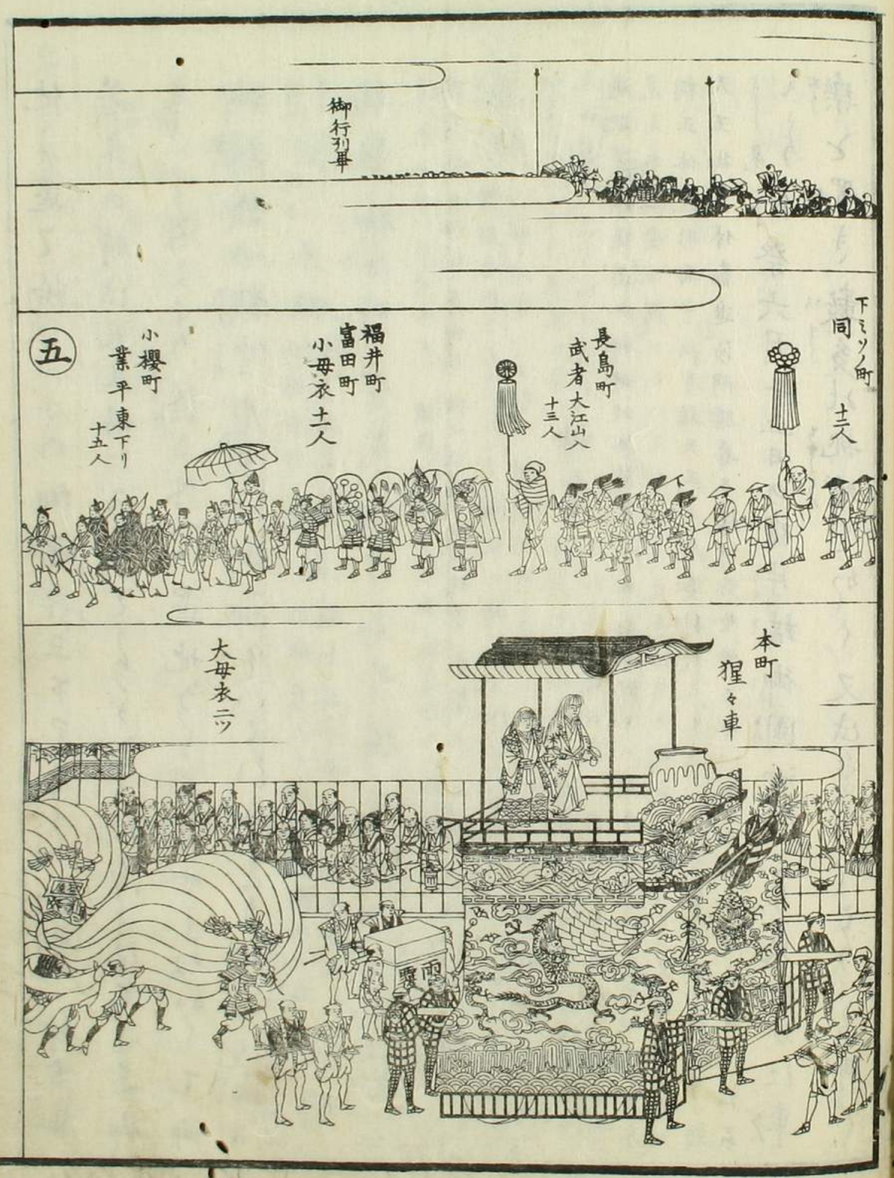
二ノ神輿
山王権現

長者町
二福神車


別當
尊壽院
末寺僧
十人
騎馬
六
茶ヤ町
唐人十八人
伊勢町
奉官子供三人
異服町
普化僧
十四人
常盤町
頼朝八幡詣
十人
京町
小鍛冶車
宮町
唐子遊車


其六
十一
御太刀
御旗
三ノ神輿
日光權現
桶屋町
唐子遊八人
諸町
鷹師十七人
三
桑名町
湯取神子車
桑名


十二
大和町
唐人二十人
淀町
指南車七人
伏見町
中巻六人
上御園町
刀指子供十三人
四
中市場町
石橋車


御行列畢
下ミソノ町
同
十六人
長島町
武者大江山入
十三人
福井町
富田町
小母衣十人
五
小櫻町
業平東下り
十五人
本町
猩々車
大母衣二ツ

他よ遷ヒ給ひしの御闈再三下ラうへ往昔 神君御
若年の時は天王坊に三年ぐらゐたちはせ其御
ちこしみよりう終よ外へハ遷地うくしてやうねかくて御
城擁護の鎮守府下の氏神といそ祭まう 小児の髪置祝 著とらしめ諸人
常に絶ス事うし 本社 南向祭神素盞嗚尊 拝殿 緒紳家三十六歌仙の額を掲ぐ画ハ宮脇有慶し 中門
瑞籬 御供所 寶蔵 御井 鳥井 摂社 八王子社ハ本社の右 兵主社ハ本社の左小ハ寛永六
年巳巳十一月十六日 源敬公新ら御造営うり 瑞籬の外の末社ハ 白山社等みな本社ノ右ハ右ハ 神木公
稲荷社 日神社 月神社 弥五郎社 拝殿の西にあり むし姥 妬婦人呪詛せんとあ志ぐこの樹に釘を打
孫樹 事ハ有しうど 國君の御はらいて寛文十二年樹ハ巡ヒに柵も
ひまハせしうり後木のかへ 神寶 雪舟十六羅漢の屏風周文花鳥の屏風等多
人の寄るこ 進状等數通其外神佛ハ画像多し 拝殿の鰐口ハ元亀元年八月廿四日の文字
見え本地堂の鰐口ハ大永八年戊子正月日鑄之と彫り又陰風ヨ天王
祠正体鏡形面中画牛頭天王上画婆利女左右画八王子裏曰奉施入牛頭
天王御正体勸進沙門勝尊并縁阿弥陀佛正安二年壬寅四月十一日と有
ら見 例祭六月十五日の夜片端御園御門ら東の方に車
樂を置き數多ハ挑燈とかく又氏祭ハかくらる町く

ら小さ山車を曳来る是を見舞車ら其外府下ハ
子供等ハ笹に小挑燈とけ手捧るあるハ皎こる月に
映ぜる數千の紅燈白日を欺き貴賤の羣集潮の湧ぐ如
し實に夜景の壮觀又十六日朝前夜ハ車樂ヨ紙人形
をかざりて引渡す児の舞ありて古雅うる祭式と

亀尾山安養寺 天王の別當うして天王坊と號し真言宗

して京都仁和寺明王院と兼帯ス伊勢國多氣郡長
松山安養寺と同流して開山惠日國師ハ禪密兼学ハ
知識うと 後園の假山樹木の位置自ら幽致うり是古田織部の好りて 唐土廬山の風景とうせと又彩室も日人の好なるう今ハ
存せり亀尾山の額ハ明人陳元贇の筆安養寺の額ハ
朝鮮人雪峯の筆ヒ塔頭常林坊南坊西坊の三宇あり

登亀尾山呈如實上人 畅園詩草 岡田新川

瑜伽境在大城間緩歩乘春試一攀浴水文會含苔
帯満園芳樹結華鬘香雲徧覆三摩地彩石嚴空九
仮山幸有闍黎憐翰墨優遊共得樂餘閑

名古屋山三宅址 名古屋藏人高信の屋敷跡三の丸の内西南の方

の武士屋敷の内ハ皇土居うとのあり今

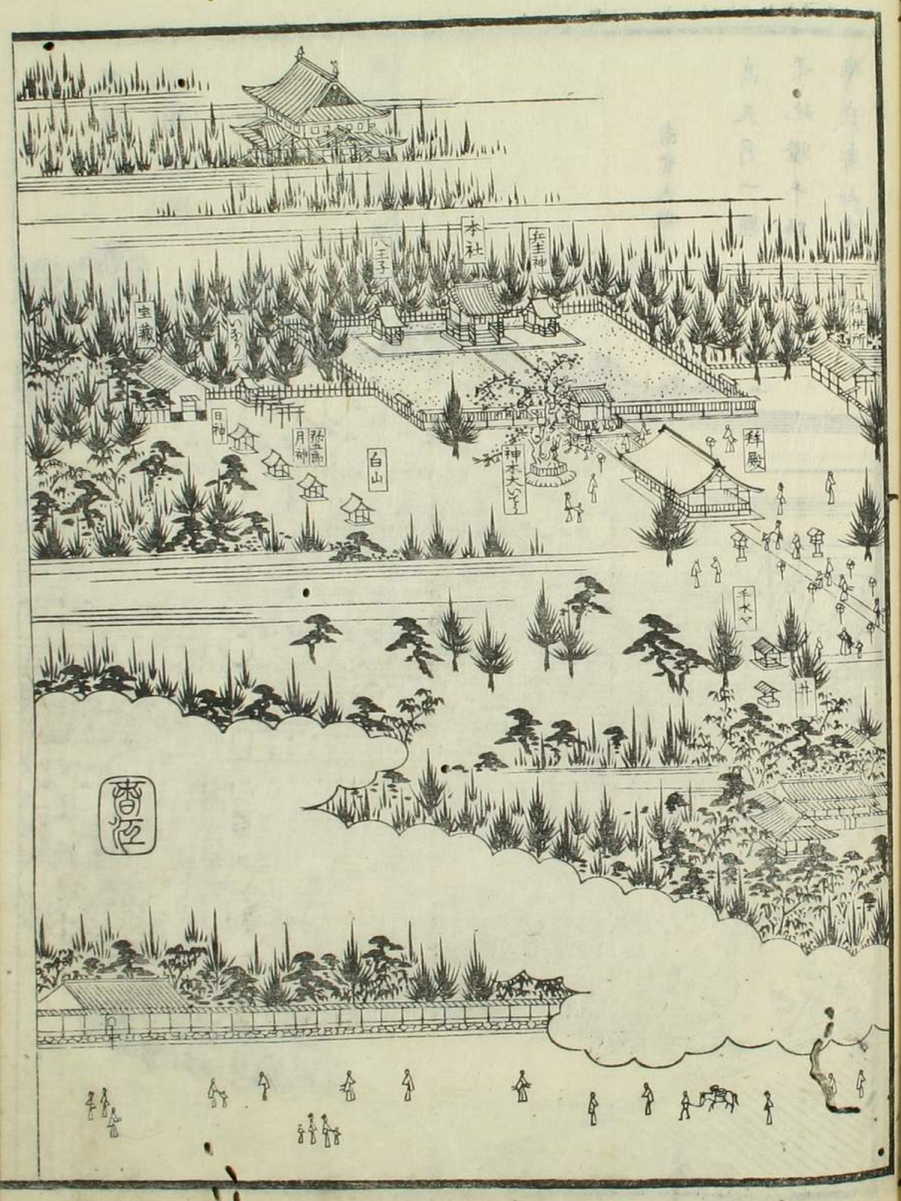
亀尾天王社

浴泉の村々氏社そ
星祭りと称りてし
時奉納せ懐紙に

年星れはるりな
いとゝきて

入道前大納言澄覚

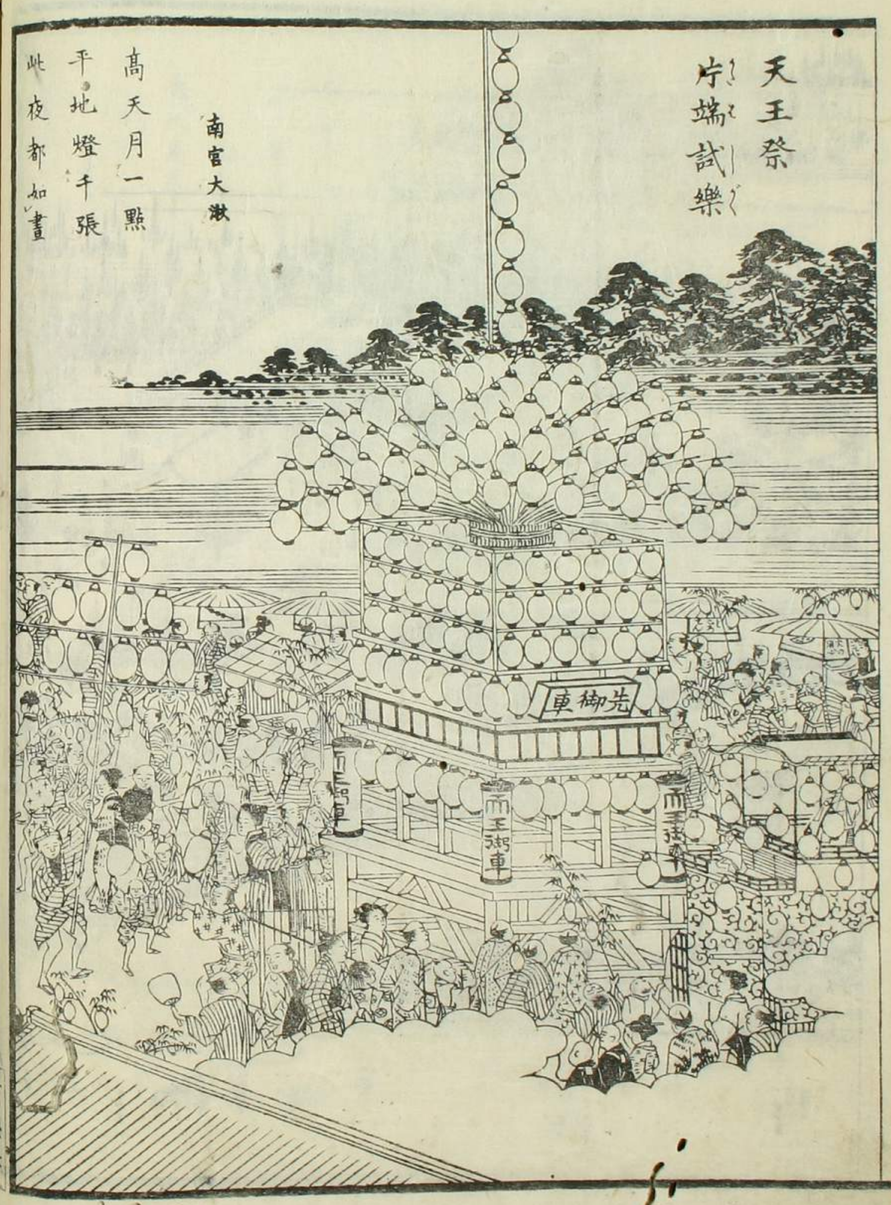
けさそ世ーな
今年せ星の
はれ来
亀せ尾ゆ乞
山を
もとーよ



天王祭
片端試樂

南宮大湫

高天月一點
平地燈千張
此夜都如畫



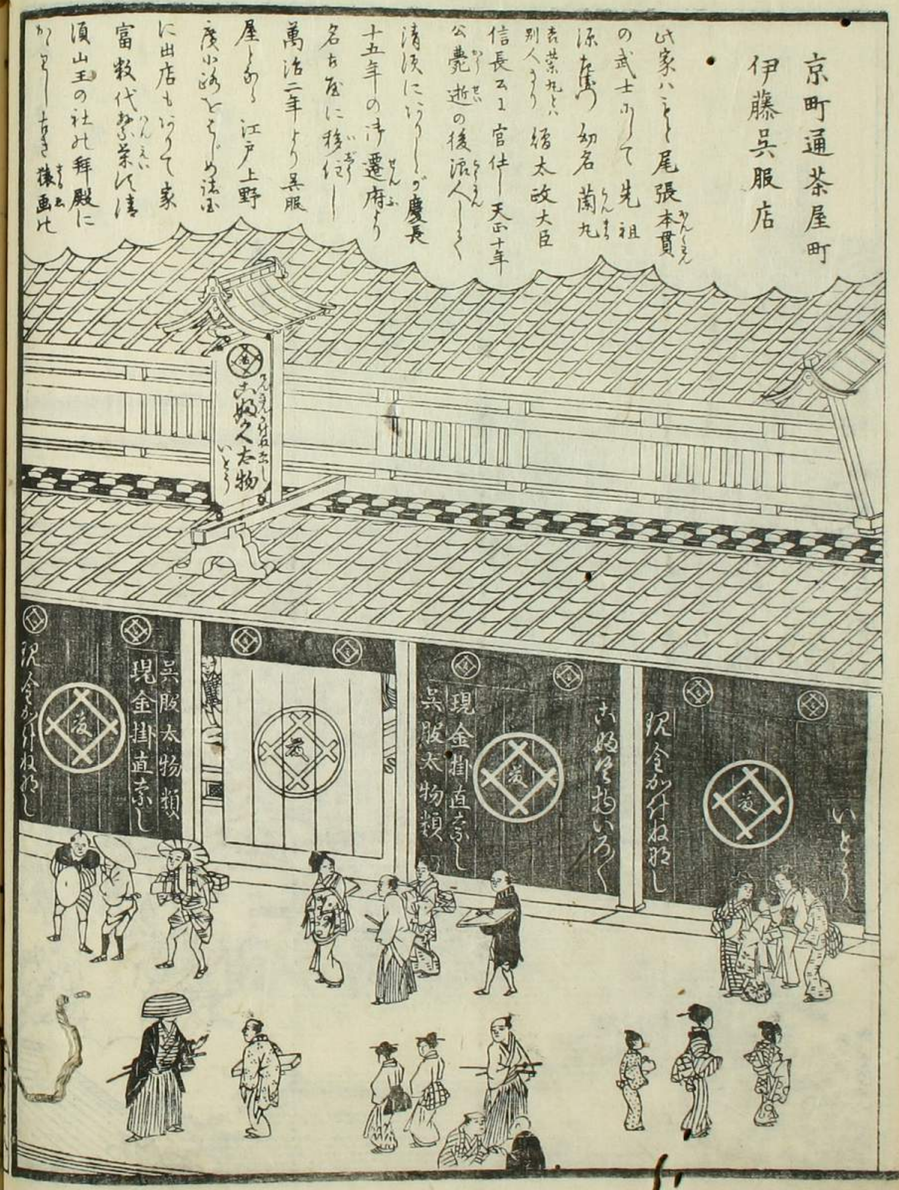
人〻来納涼

春江

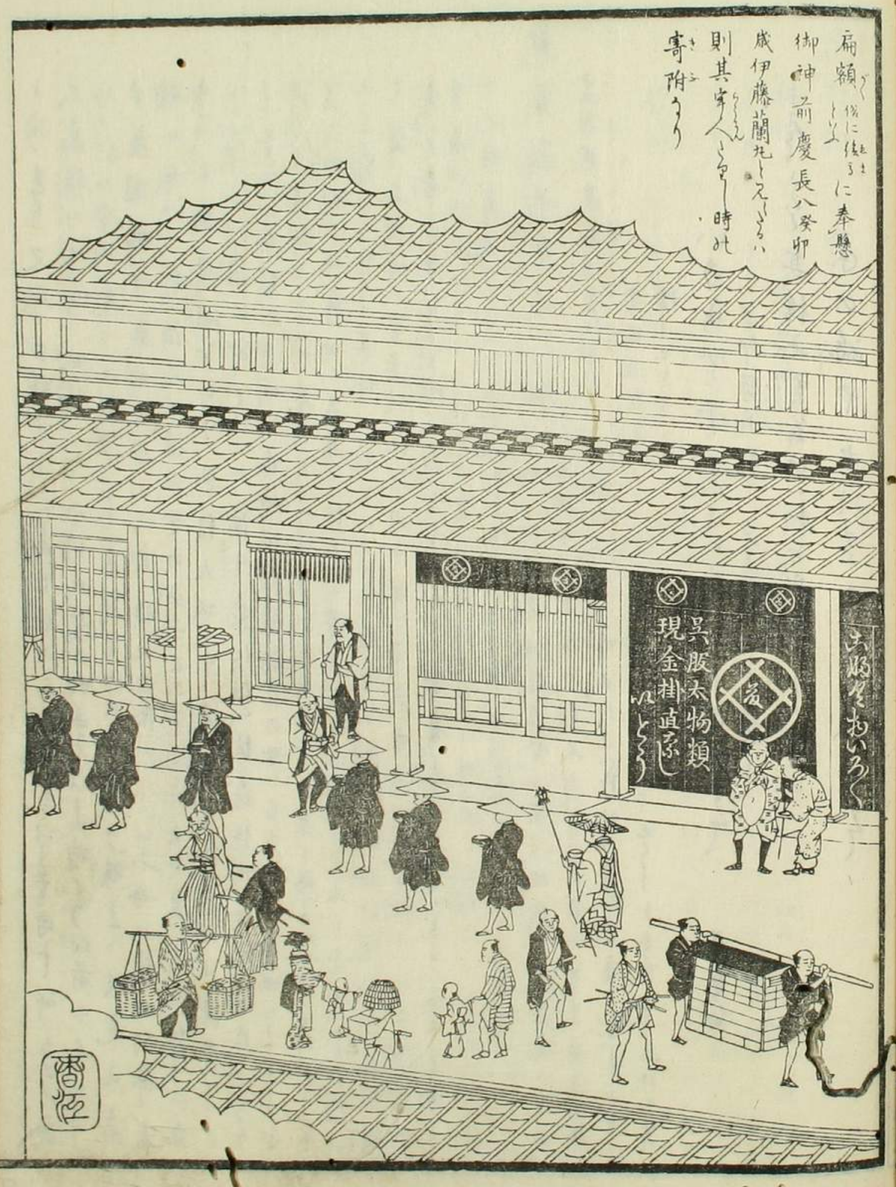
提灯ハ山も
ゆらゆらとうきよ
もうさとすなり
水の糸ハ

京町通茶屋町
伊藤呉服店

此家ハもと尾張本貫の武士にして先祖源為朝公の幼名蘭丸表紫丸ハ別人なり 豊太閤大臣信長ゑ官位一天正十年公薨逝の後流人しく清洲にうつしゝ慶長十五年の冬遷府より名古屋に移住し萬治二年より呉服屋をゝ江戸上野廣小路とゝめ法花に出店もうけて家富数代繁栄清須山王の社内拝殿にかゝゝ き 狩野画



扁額 後に徳川氏に奉懸御神前慶長八癸卯歳伊藤蘭丸しゑゝゝ則其家人ゝ時代寄附なり



[illegible]ハ古野古國に名古屋山三屋敷[illegible]も同じ所[illegible]蔵
人高信ハ[illegible]地侍[illegible]て今川氏豊の城主[illegible]時[illegible]以前の人なり
[illegible]ハ今川麾下の士[illegible]山三ハ[illegible]の一族[illegible]屋尻[illegible]名
古屋因幡守敦順の子山三郎後九右衛門と[illegible]母ハ織田刑部太
輔の女山三郎浪人の後出雲の巫子[illegible]女と共に京都三条
[illegible]て女歌舞妓を[illegible]其後大坂[illegible]淀殿[illegible]悪名[illegible]沙汰あり[illegible]
[illegible]山三郎[illegible]めて蒲生家に仕へ後森作州侯に家臣となり
[illegible]森家の系図に森侍従忠広朝臣の母ハ名古屋山三が妹[illegible]小
[illegible]其縁[illegible]て奉公[illegible]山三後に井戸某が為に害[illegible]
[illegible]又北國[illegible]舞世小名高く信長公豊太閤の御前[illegible]出[illegible]余高貴の門[illegible]
入[illegible]態[illegible]其体天冠を[illegible]白衣を着し水晶[illegible]珠数を首に掛
て舞[illegible]或ハ男子[illegible]体[illegible]刀を帯し名古屋帯に細糸をたげ或ハ
髪を垂[illegible]仏号を唱へ鉦[illegible]て歌舞せ[illegible]凡そ山三於國が
事雍州府志をもつて近代の書[illegible]諸況[illegible]て一様[illegible]
二人歌舞妓の[illegible]を[illegible]と仕出し[illegible]諸人の[illegible]

芭蕉翁雪見の一軸

本町一町目書林風月堂が家に珍蔵す風月堂二代目の主孫助ハ蕉翁の門人にて夕道と号す貞享四年十二月芭蕉翁浜店に立[illegible]雪に降出けるハ即吟の句を夕道に[illegible]

書林風月[illegible]ハ
澤出[illegible]

いさ出[illegible]を雪見[illegible]

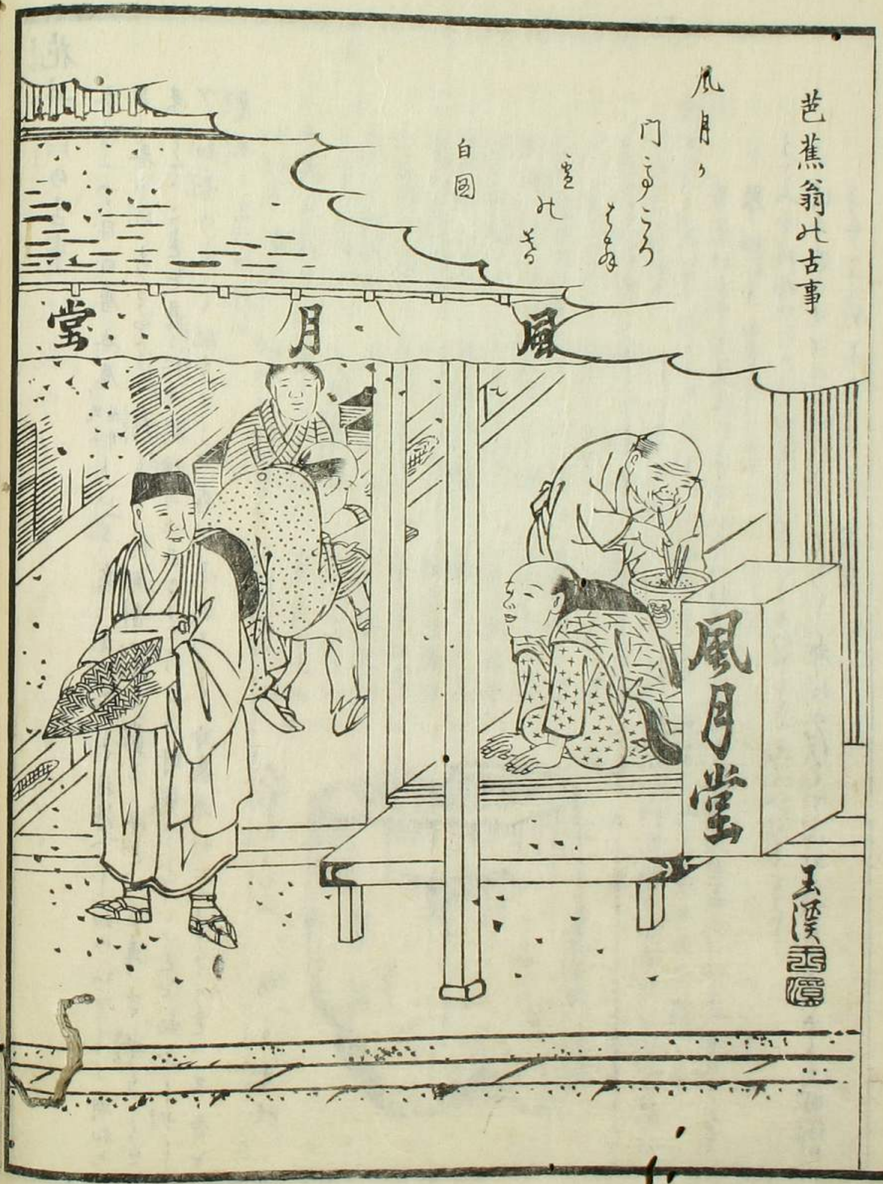
丁卯臘月初　夕道何[illegible]贈る

[illegible]其後也有翁此一軸を見[illegible]時
手の跡や雪に[illegible]見ぬ世[illegible]

花井臼の古事

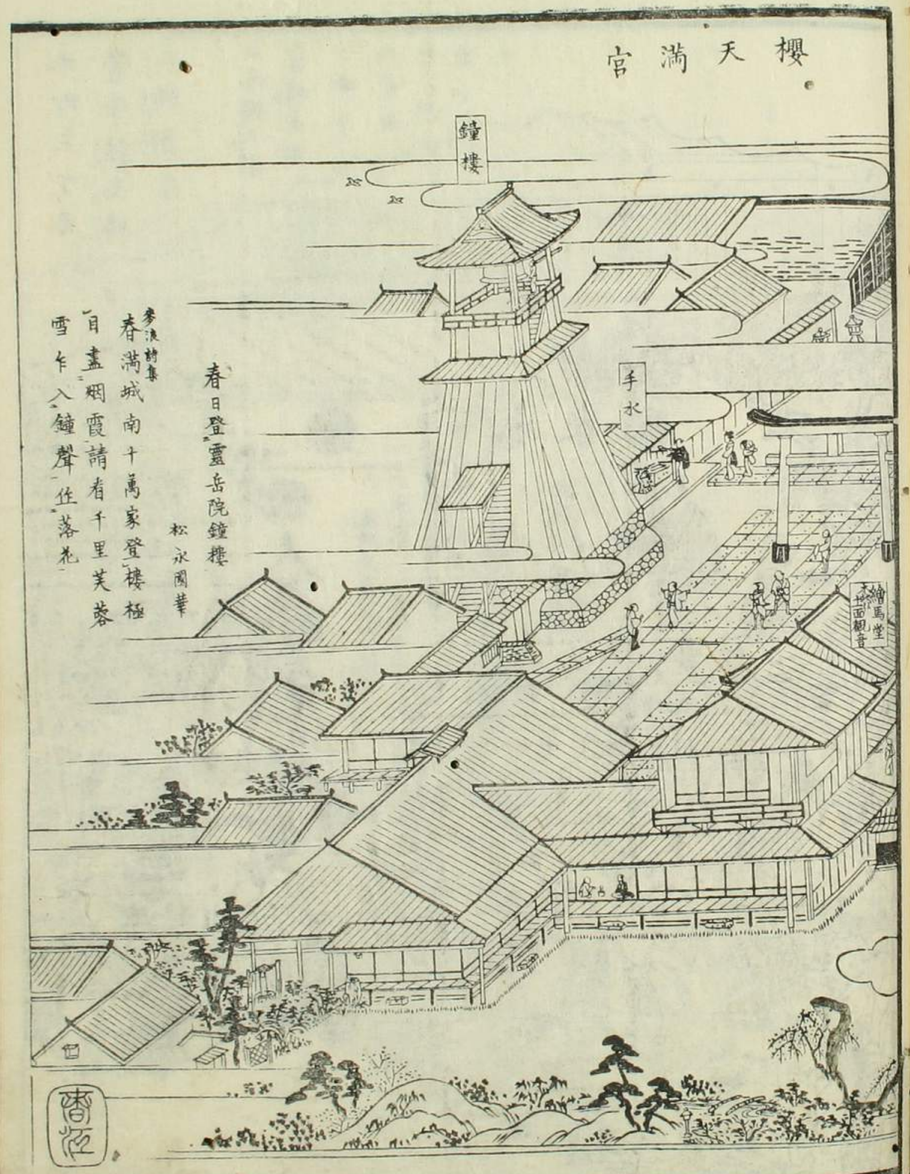
本町一丁目の唐本屋氏ハ花井と[illegible]家に年久[illegible]お伝へ[illegible]臼の[illegible]明和九
年春の比井戸[illegible]に異香四方に薫じけるハ近隣皆[illegible]
来[illegible]を見[illegible]に赤梅檀の上品[illegible]則焚[illegible]秘蔵[illegible]
て知音の方へも配[illegible]と森川某奴[illegible]冷泉為村[illegible]奉[illegible]ハ其香を
夏衣と名づけ[illegible]

おほろ夜に　[illegible]
日数ようる　[illegible]
うけうろも　[illegible]
すし紀風よ　[illegible]
初尾を郭　[illegible]
琴の[illegible]
[illegible]
[illegible]



櫻天満宮 小櫻町本町西へ入南側ゟあり 織田信後守信秀つゝゝゝ天満宮を信仰し武州京都北野へ参詣ゝけるゝ一夜の夢に菅神枕上ゟ立ち給ひ我ゝ梅松院ゟあるゝ年久し今汝ゝ住國ゟむゝゝゝゟ諸民ゝ安全と守らんと告給ひしゝゝゝ梅松院ゟ出て其旨を語るゝゝゝ梅松院も前夜ゟ月夢の霊告ゟ符合せしゝゝゝ彼院の尊霊ゟ御自作ゝ神像を信秀に附与しけるを天文九年ゝゝゝゝゝゝ社を創建して安置し万松寺ゝ清庵ゝ慶長御遷府の時万松寺を今ゝ所へうつされゝゝゝ御闈の神慮ゟはゝゝゝ社ハ御ゝてゝゝゝゝゝ入道前菅大納言のかゝゝ縁起あるゝゝ文ゝ大同小異なり 神木ゟ櫻の大樹あるゝ故櫻天満宮と称す別當櫻花山霊岳院ハ曹洞宗にて則万松寺の末刹開山ハ清庵宗仙首座ゝ彼樹ハ万治三年正月の大火ゟ焼失して今ハ其名のゝ残るゝ 本社菅神御自作の神像 薬師堂本尊智證大師の作

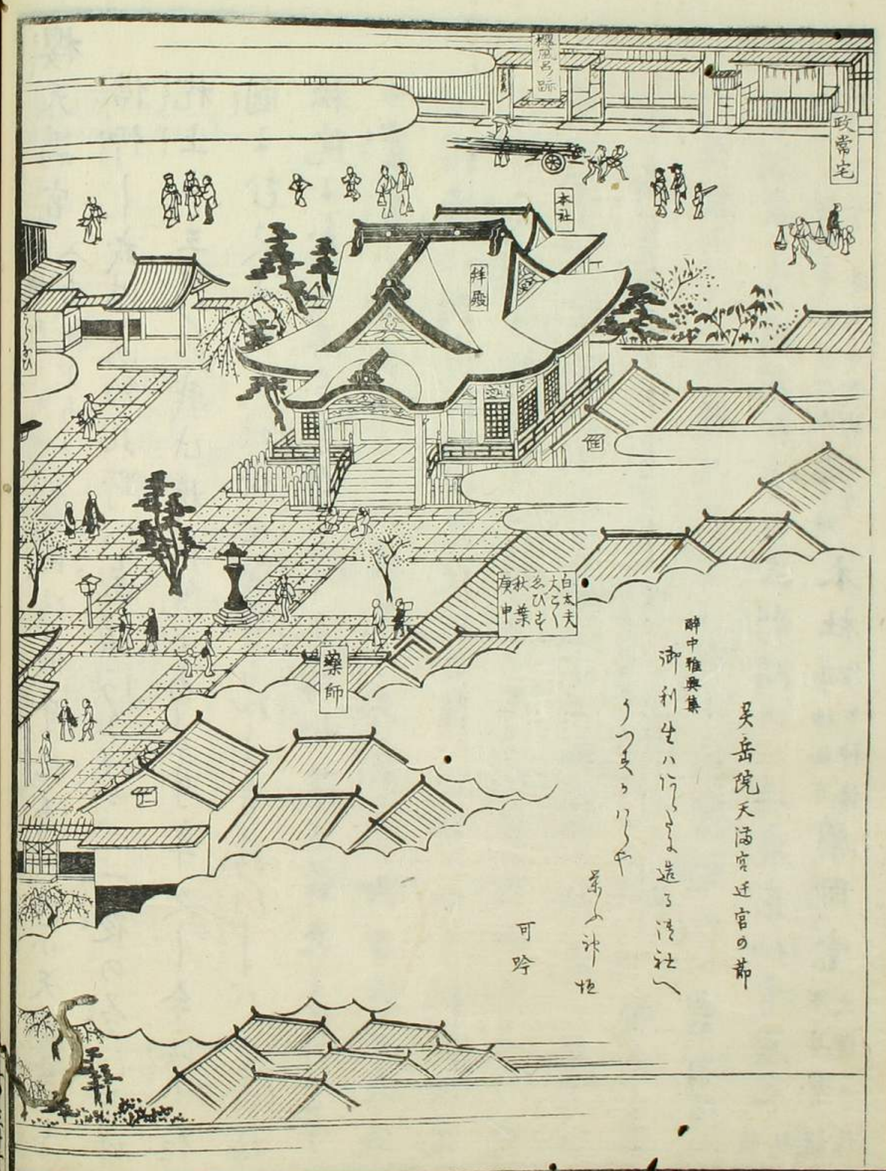
櫻天滿宮



春日登靈岳院鐘樓　松永國華

春滿城南十萬家登樓極目盡烟霞請看千里芙蓉雪乍入鐘聲作落花

参浪詩集



吳岳院天滿宮遷宮の節

醉中雅興集

御利生ハ行くさき遠る淺社へ
うつるうつるも

可吟

本町三丁目
醫學館直傳
三臓圓店

二月櫻天満
宮植木市
の賑合
此邊數
町の間
殊よ
多〳〵

人參三月

尾州醫學館

人參三臓圓

本家

尾州名古屋本町三丁目
花輪秀係高製

本家

伯馬

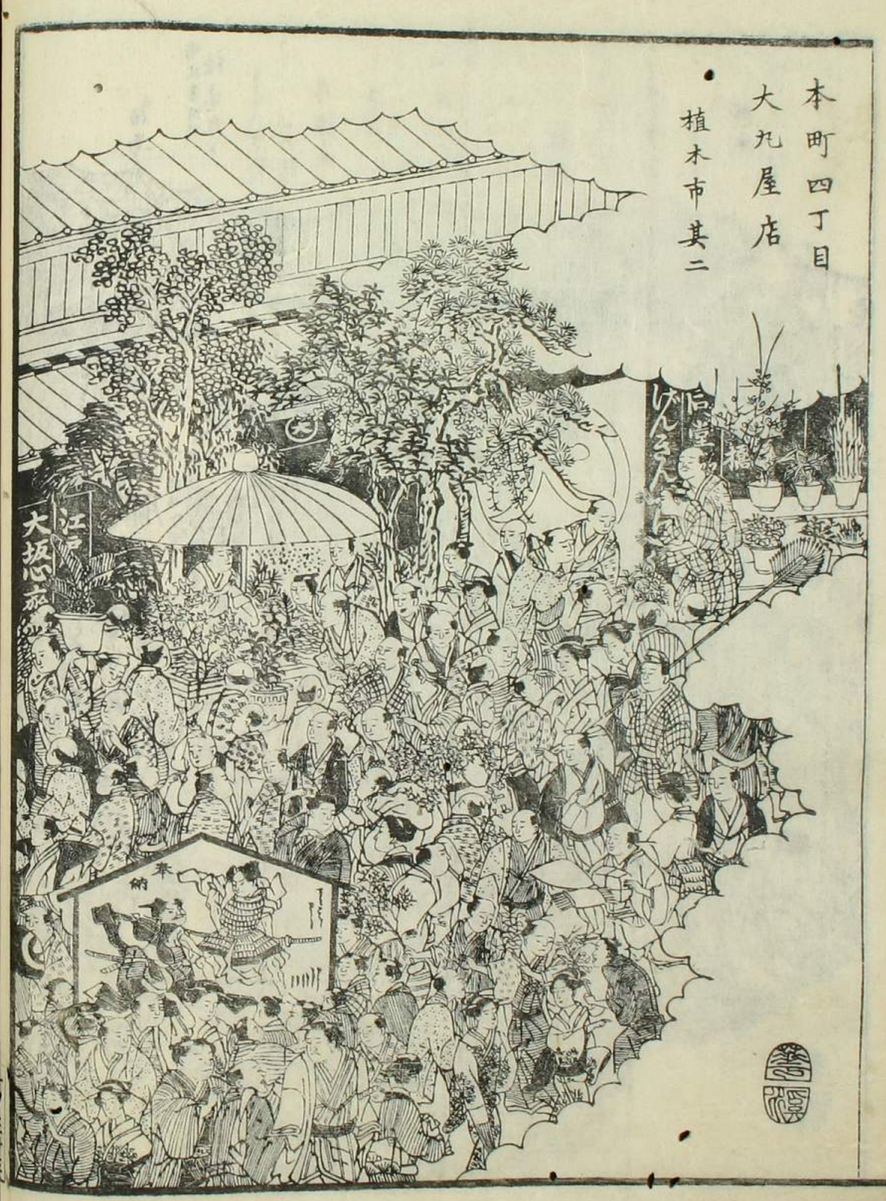
梅間
十町も
一ゑ〳〵
桂木

三臓圓

花山

靈方五龍圓

本町四丁目
大九屋店
植木市其二



末社數祠あり 拜殿 繪馬堂

本社の事に記す二月例祭の式府下は寺子や又天保七年に至りて諸國凶作打つづき米價高直なるのすくなるに其比府下の志ある町人共所々施粥堂を設け廟額を掲げて日々若干の金錢米穀或は衣類等まで恩恵に負債を惜まず凡二万両余に及べりとぞ翌年の春までに施行の為計り下さるゝに及べるなりしかるに連年の凶作よりく御仁恵の鐘樓萬治四年三月より官命を奉じて晝夜十二時より此後を限りなく町中に告ぐる故ふ時の鐘と称す古鐘の銘は小出永菴の作なりしが寶暦十三年に焼失し今の鐘の銘は須賀安貞の作なり

尾陽城下鐘銘并叙

於乎擊鼓以警晨昏鳴鐘以紀子午乃古今之通典也辛丑之春　邦君出命新制一鼓掲諸譙門而準挈壺之職每時鼕々靡有差謬然尚恐不達遐方重命有司鑄洪鐘懸諸市街之正中而主時候之數於是鐘鼓俱鳴而后晝夜之道如示於掌群僚得是成官私之務黎民得是修利養之業所謂聲音之道與政通者其斯之謂歟數于一時以垂于萬世鴻勲之盛不可勝記焉因奉公命謹勒事狀乎銑間且作之銘銘曰

筍虛瀏漠　授時四民　洪音徧播　城市鄉鄰
錫文思武　和人感神　邦君偉績　千歲無湮

萬治四稔辛丑春三月穀旦

詞臣永菴小出五庭謹首撰
府下鑄匠水野太郎左衛門藤原則重

題下重鑄方時鐘刻古銘後

自在昔我　先君敏置景鐘于菅神叢祠之南報時牖民奮庸熙載以来仰其賢享其利者既百餘歲皐々之政百姓日用而不自知也寶暦癸未十月六日叢祠罹濫失之殃縣鐘俱焚頓為烏有人咸始知最為欠事於是　邦君允重民事乃命鳥氏改鑄以脫鑪翼然鉤之縣陰陽相變無滯無散侈弇克諧不窕不揪鏗鏘横武昭嗣徼音以暢達于四境矣其聲嘽嘽以緩安以樂闔國聽者訢々然相慶曰禹聲文聲孰先孰後終日竟夕民之攸暨也　邦君悅焉蓋徼角之律相得者此謂先民之憂而憂後民之樂而樂也臣安貞奉命欽紀所以紹復丕績之由而鳴休祐於億齡踵舊文之武以不贅銘辭于此者然明和改元甲申冬十二月

須賀安貞（見氏則重口伝）
水野太郎左衛門藤原孝政

神寶

方丈佛間に安置せり十一面觀音は唐佛也銅像なり又菅公十一歲の御時かきたるゝ梵網經南化和尚自画讃の渡唐天神の像康安元年の書し天神縁起一卷その外古書画古佛像等多し

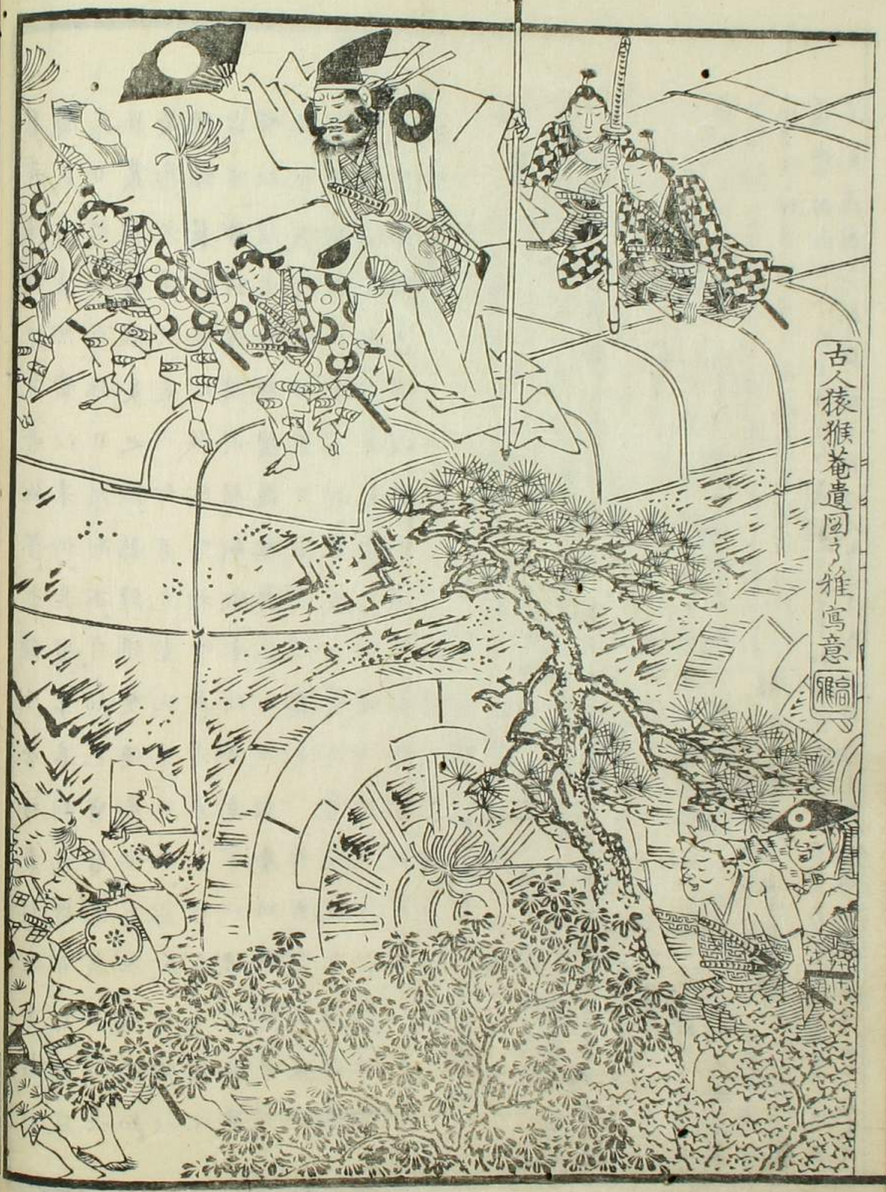
例祭

二月廿五日神前に大般若を轉讀し繪馬出すものよりさまゝ洗物より地に及ぶまで大文字をかきて境内に懸ぶ又祭日前後三日の間府内及び遠近の村々より本町通諸人の目を驚し也又祭日前後三日の間府内及び遠近の村々より本町通数町の内両側に桜木と商人縁令盆鉢に植る造花樹木はさみ大樹喬木も殿ゝ車にて車来りて車来りて紙をつゝて或は三寸或は五寸或は三寸かゝるゝ

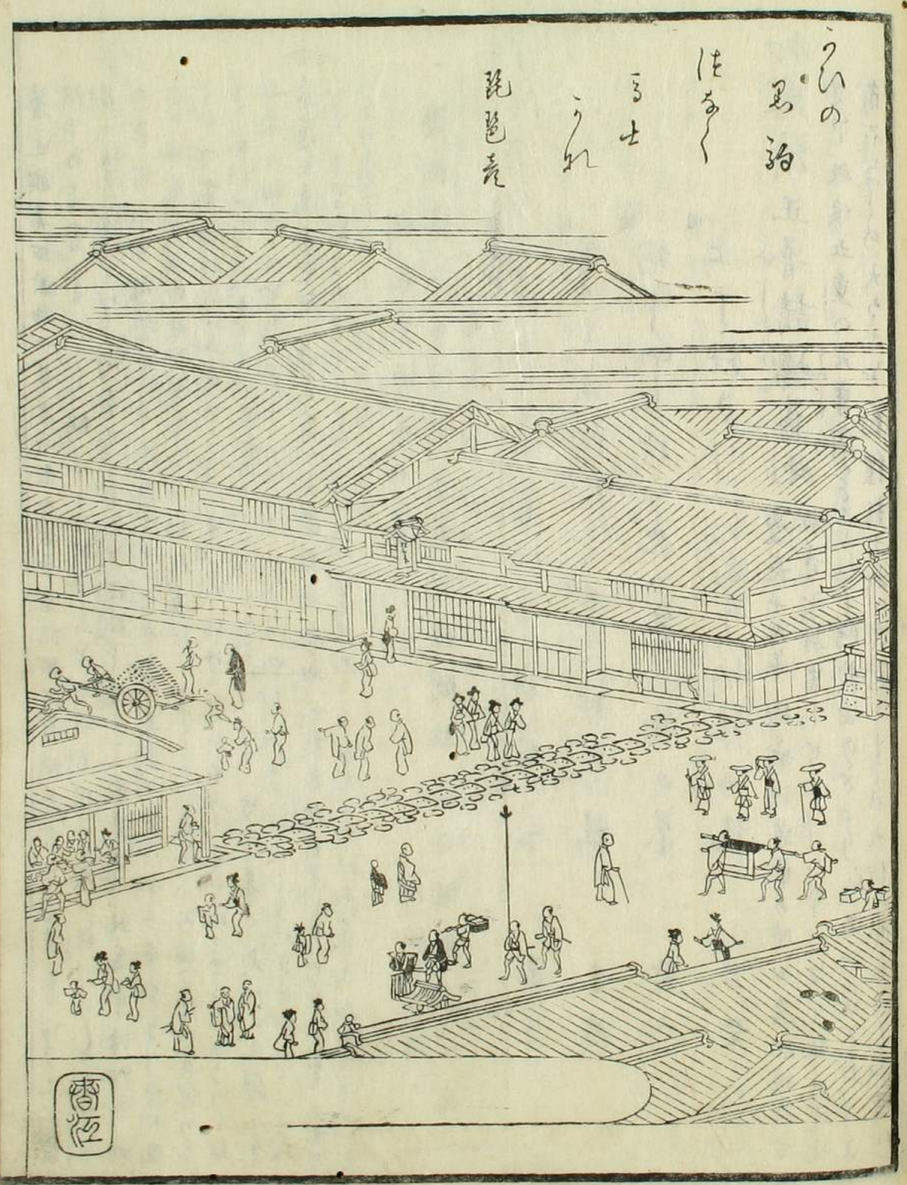
田中道麿居處碑

當寺は在中にいりて山林小入ぶかゝ山日府下の寺子供寺我道麿俗称田中庄左衛門の子道全と号し和学に長じて万葉集等は古書に通達支美濃國多羅郡榛木村の人なるがらに移住して天明四年十月四日死去に

加藤清正
石引の図
酒
酒


古人猿猴菴遺図ゝ雅亭意

傳馬會所
札ノ辻



著述撰集万葉抄万葉名所歌抄万葉東語集万葉問答書手向草等いろ〳〵又万葉以下の古書よりの解しなど地語言を発明自得し或は疑しきを本居宣長へもとゞ訪つゝ問答せしかの古写本を所持せしが延宝の印行本に甚異なりて世に重宝ありし此碑面に本居宣長の歌を勝山ありし鈴屋集に

ふるやの霊岳院〻に寺のうらに年ごろ住けるに石ぶみたてんとするにあつまりて屋敷のみぎりかたへとゝもけらひふみくつのはけ

の木の四中のをちこちにあるをちこちの椿の木わせを　氏光翁は美濃國多芸郡の椿木村の人にてやどりの木のもとにもむすめをなさてうむ山ばらのもとにもけれとも

澹泊

櫻花菅神廟　撫塵集

春半日満市賣花聲共飲牡丹錢　去醉遊唱太平

二月廿五日奉納之　神野子容

曠野集

ちんくさ梅　安かるる　荷今

同　蕗も水ぬるい　て来る神の梅　亀洞

同　何ともやうなる　ハ　梅の花　越人

同　上下はさいぬ　神の梅　昌碧

加藤清正普請場舊地

慶長十五年御城御造営の時加藤肥後侯万松寺を旅宿せられ此侯五重の天守閣を立られ此侯の奥田の方より大石を運ぶれ角石なりの大なるを毛氈敷十枚を包まきを大鋸をもて此車

の七五六千ばかり人夫をもて引せ是小性の美少年に御備を拵せ数十人を石の上に立並べ自身も片鎧れ槍を持其中央に立て木やを引せ是を石の上に立て那古野清須の商人どもの酒肴を賣買し見あの法人にこれとをあつ菓子をうげちらしてまにくひろをせけをバ数万ばかり見あの人をて一度に撒ばかりに天神の境地木やをの数ばかりよりはるかに多く夢とおし数万小普請場ほで曳ばかりばかりの世間童謡に　あるびなるをとこ　万松寺北苑ばかり一枝ばかりござる苑に

ようくくくくくいろよう　続擬清正記尾陽雑記等にあり

ちやちやとちやにも　其要を摘みて略抄せり

驛馬會所

本町通傳馬町の角にあり官道は馬継所なり京の方清須是

二里江戸の方熱田宿へ一里半慶長十八年より宿驛となる

孫竜寺も玉屋町にあり東西南北の岐路バ京大坂より吾妻へ下る官人も伊勢詣り信濃のうへ通る旅客も公私を論ぜず此所を往来

ばかりとなりて又町は中央なれバ法制礼なるもよろしき事町

なりて東の方は観音堂と名づけ寄人とさしおいて

如意山福生院

袋町通本町西へ入北側にあり真言宗海東郡蜂須賀村遍

中村にあるを元和三年に建立す　華寺末至徳年中蓮華寺の住僧順誉建立して薬初部

本尊

薬師如来大聖歓喜天の木像を相殿に安置す霊験あるて常に参詣の人多し

天満宮祠

元和三年中村にうつす　秀吉公の守護神なり

覺正寺

本町通蒲焼町上ル東側にあり浄土真宗西流なり天台宗の僧了圓建立して海東郡富永村にあり元和年中にうつし

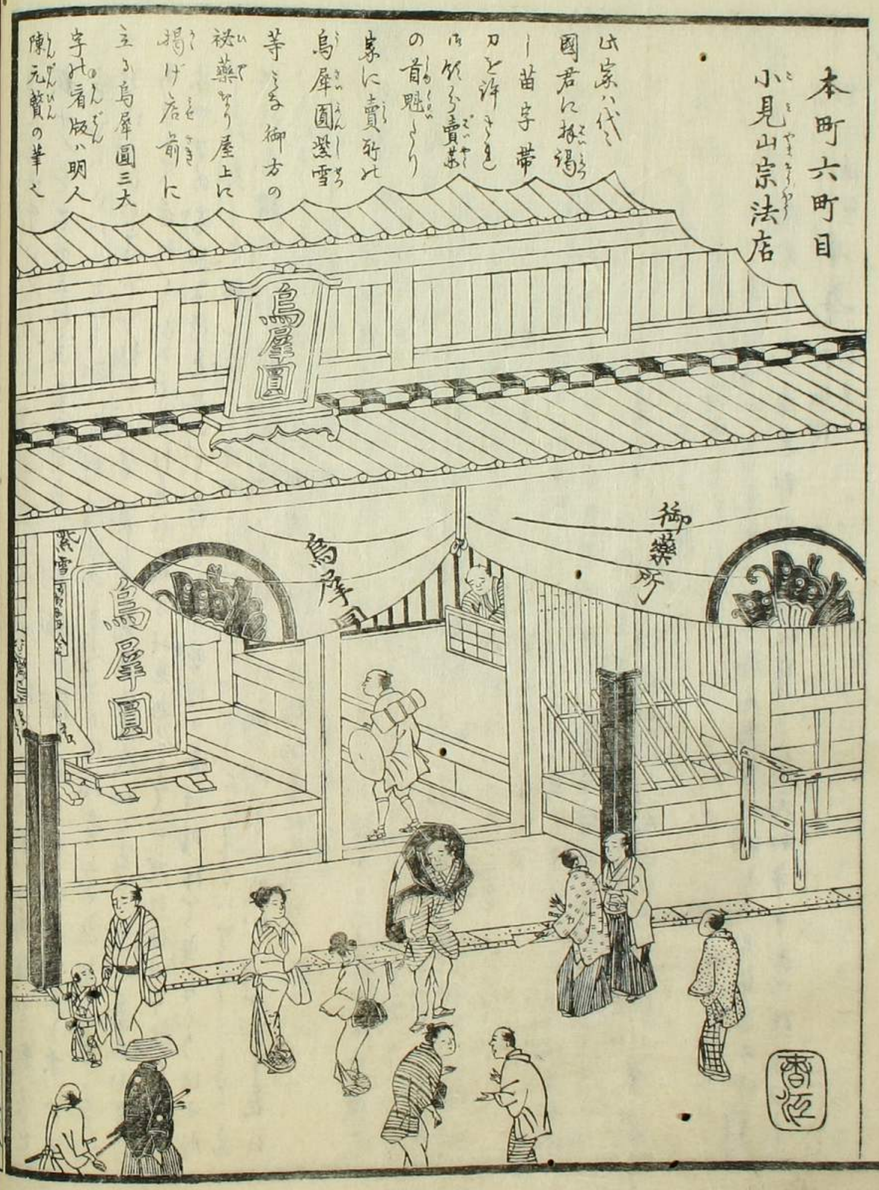
其後今此寺に改む

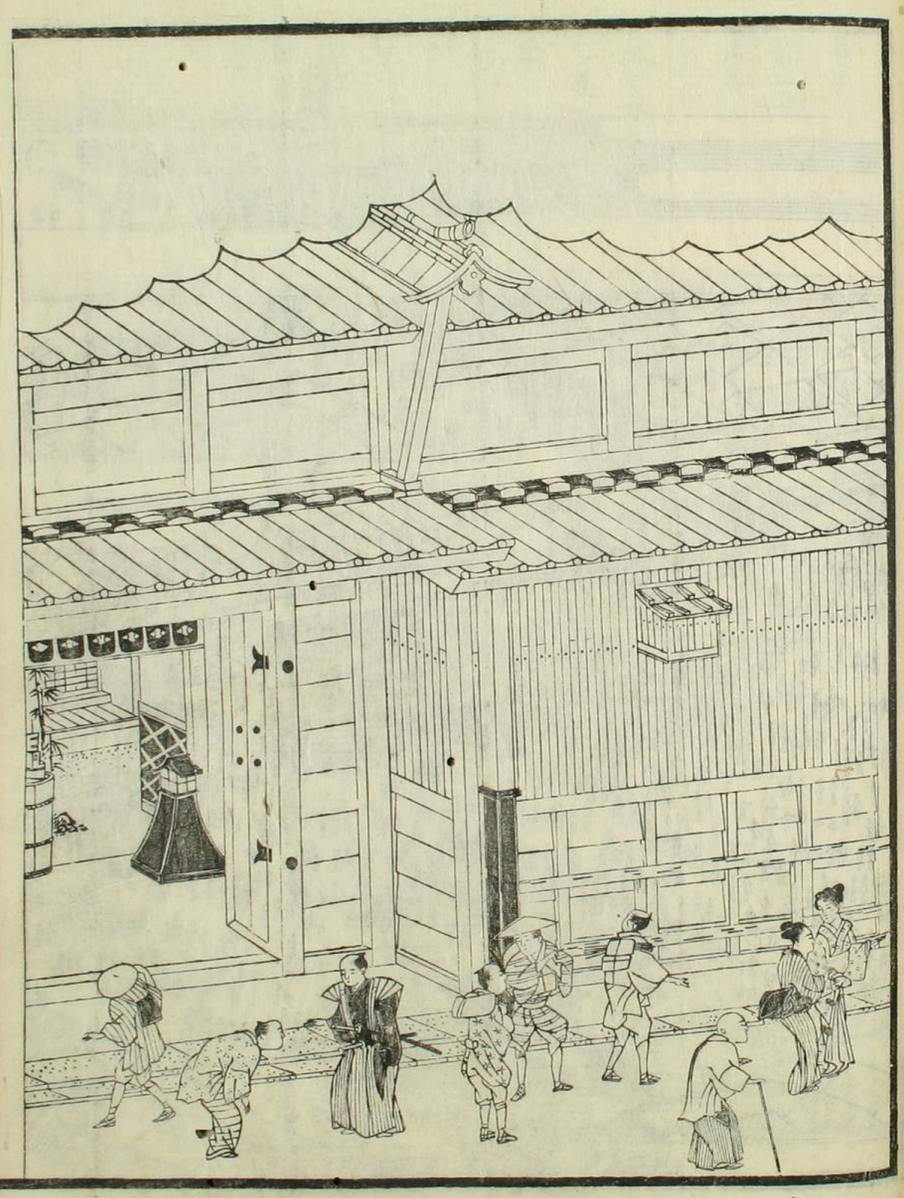
本尊

阿弥陀如来

本町六町目
小見山宗法店

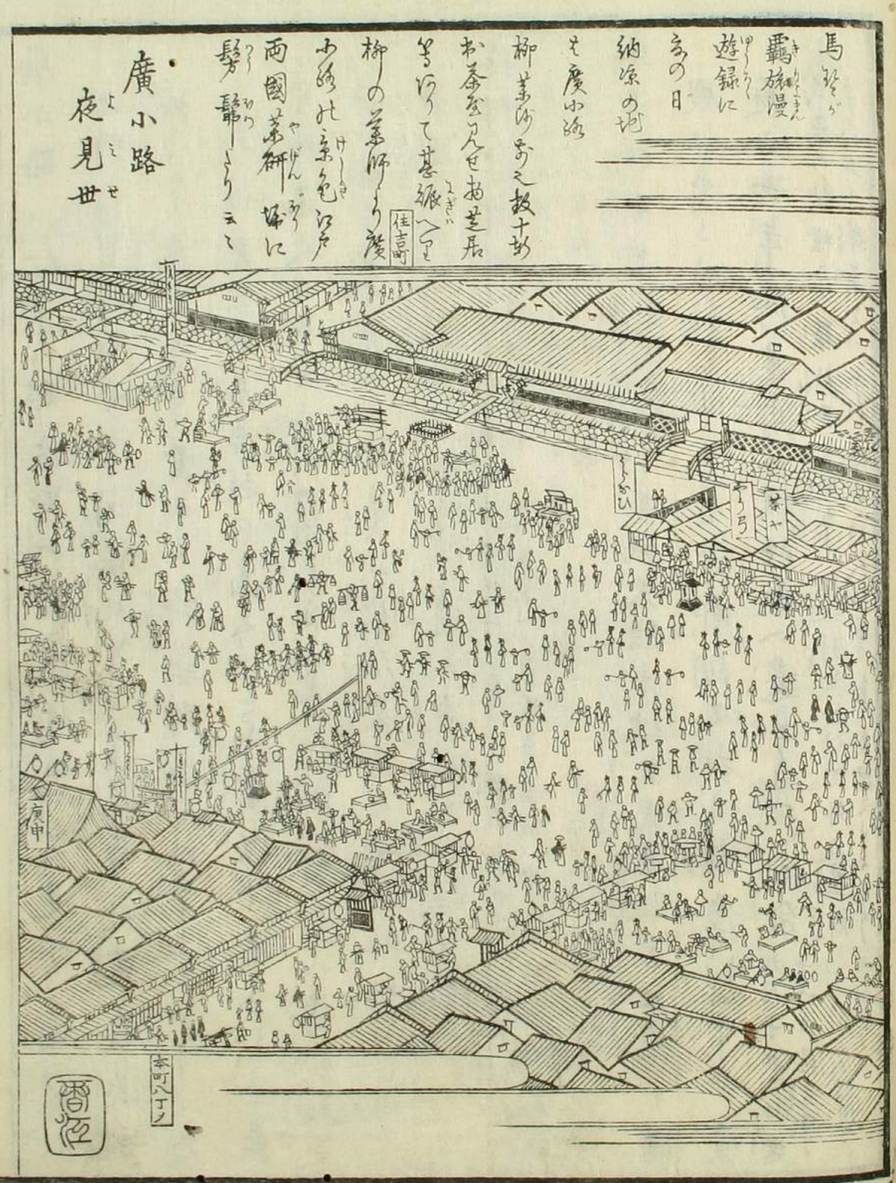
此宗ハ代々國君に拝謁し苗字帯刀を許さる
ゆゑに賣薬の首魁なり
家に賣所れ
烏屋圓霰雪
等多く御方の
被藥なり屋上に
掲げ店前に
立る烏屋圓三大
字は看版ハ明人
陳元贊の筆也





馬琴
龜旅漫
遊録に
その日
納涼の地
を廣小路
柳茶屋の数十軒
お茶を出せば芝居
茶屋にて甚繁へり
柳の葉陰より慶
住吉
少時は赤色江戸
西國茶屋軒端に
髪飾らり云々

廣小路
夜見世



廣小路　むかしハ那古野ゝ町なりしが今ハ田野なり故今を開帳札なども多くこゝに建るハ其餘

波なりと東に庚申堂西ハ柳藥師などいとなりなり

て往来人の足とゞむる礼ハ夏月納涼のゆゑハ貴賤袖を

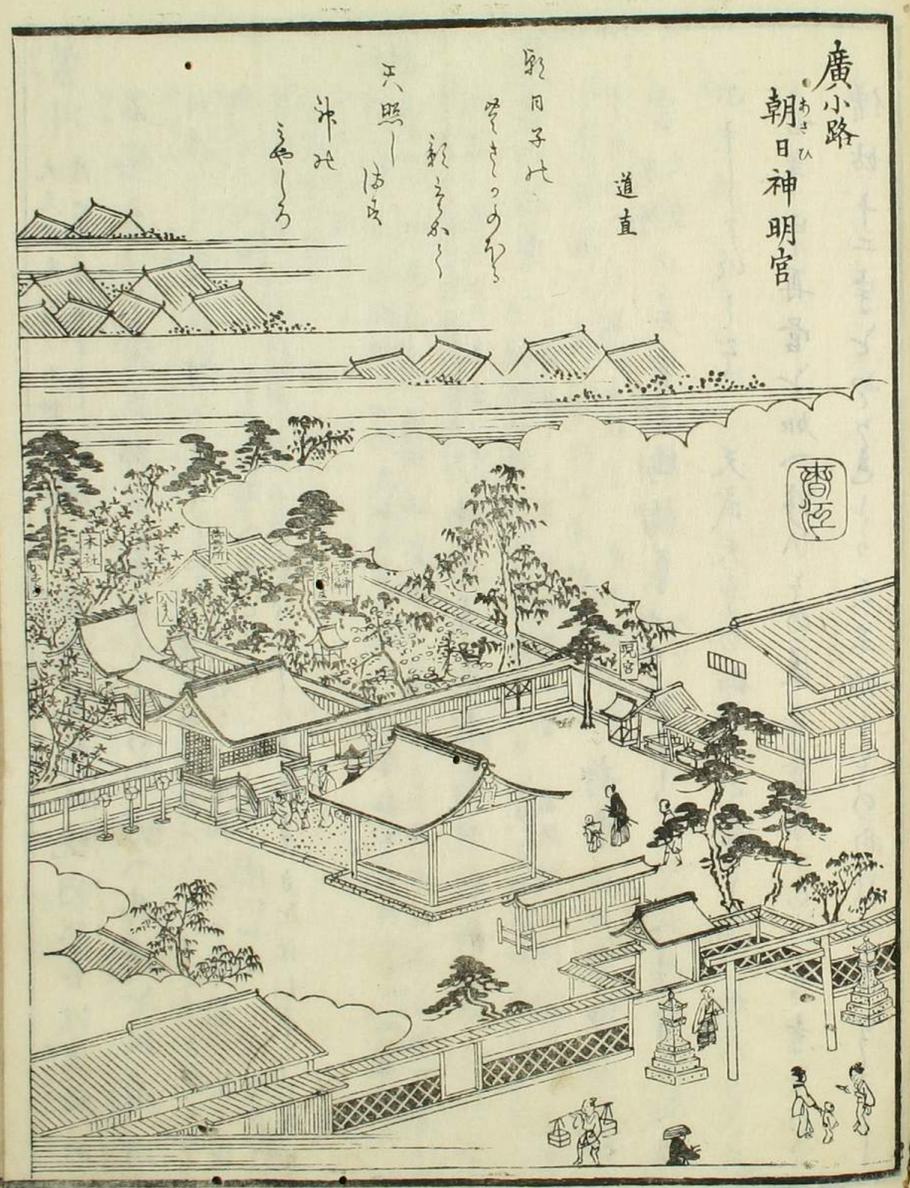
つらねて羣集し辻賣れ夜店茶店の燈火赫奕して

遊興小夜の更ゆゑ知らず實に夜陰の壯觀なり

古松山新福院　廣小路本町通の西にありて臨済宗世ゝ柳藥師と称ス門内に一柳樹あり且本尊某作め来ハ柳と以て彫刻せり毎年五月より七月ハ夜開帳なり

朝日神明宮　同七間町の東にあり　本社天照太神天児屋根命二座を相殿に祭る此社ハ春日井郡朝日村ハ鎮座なりしが慶長十六年御遷府の後此所へ遷せり　○例祭　九月十五日神樂十六明陽立なり

氏子の献燈ハ羅紗呉呂服などの水引とかけ門外の笠洋華美といふべし遠近治人の羣集言語さらなり



紫川 大久保見町より石橋を渡せる小溝とり

横三ツ蔵傳光院の境内に古紀五輪の石塔あり紫式部の墓なりといへ共其許を此溝川の流れ名付そめしとぞ 紫式部の墓は古にはなるべき古書よりて定ず 傳説もなけれ共 女童は身を鞠躬に切くれ川へ身をなげて死ハ身で沈む小袖ハ小袖で浮て沈むとハ大河を渡むとすれ共 [illegible] づりは溝川なり

御旅所 若宮横町にあり元和六年四月御造營毎年四月十七日御神祭に神輿是まで渡御御宿院へ入御ありて神供調進音樂を奏し別當ハ天台宗東漸寺

御輿舍 拜殿 御供所 御井

若宮八幡宮 末廣町の東側にあり慶長十五年清洲城築の時 東照神君淀園を [illegible] 神輿に [illegible] 此所ハ城下の法なると定め給へ [illegible] 抑當社の祭神ハ八幡宮 應神天皇 の若宮 大鶴 鶴尊 仁德天皇 ふまし〳〵て八幡宮も相殿ふまし〳〵ぞ 天武天皇の御宇小姫〳〵御陵在て延喜年中再營を加へ給ひその後安養寺と号て宮寺をたて僧坊十二宇とあり是より天王坊もその内は一宇なりしに天文元年は兵火よりて神宮僧坊もろ〳〵焼亡しけるを同八年再營ありしに社記小見えず又延喜神名式に愛知郡孫若御子神社名神大とあるハ此御社の事なるんりといふハ若宮〳〵にしてけりげ小少え又牛頭天王の若宮なるんとも云ふ共 [illegible] 且若宮八幡宮の稱年久〳〵して普く人の志る所なれバ社傳に隨て強て私意を贅せず

○本社 仁德天皇 相殿 左應神天皇 右武内宿禰 拜殿 神輿殿 末社 熊野社 稲荷社 山王社 天満宮社 連理稲荷社 例祭 六月十五日 翌十六日神輿三の丸天王社まで神幸神主束帯騎馬にて供奉し母衣頁二人 [illegible] 八幡宮 [illegible] 黒船の車ハ更に [illegible] 想像に [illegible] 其餘は六輛ハ四月の山車に等しく人形 [illegible] 異なりて都て四月に劣らぬ大祭なり美麗の行粧まさ尋常は神事ハ [illegible] 奇巧ハ大同小異なりけるに畧しぬ又 仁德天皇降誕より百年に当る年なるの九月に御霊祭の式あり迫くハ元禄二年又寛政元年に行なるとなり 祠官 氏 芝居小家 [illegible]

仁德天皇降誕至寛政元年己酉凡一千五百年城南若宮設祭奠陳雅樂賦此紀之 挺之

若宮八幡宮

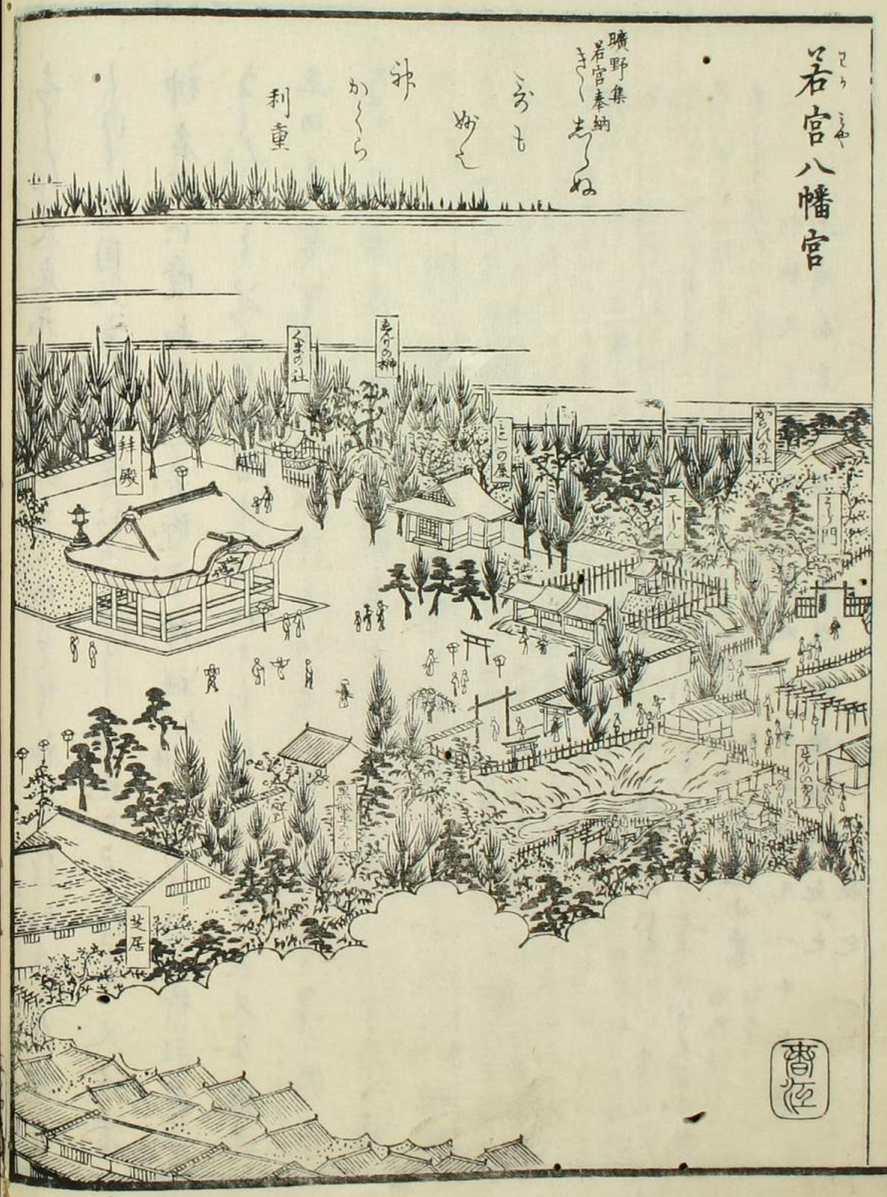
曠野集
若宮奉納
きく志ゝぬ

ふるもぬるも

神

かゝら

利重



我竟

日ゝ中

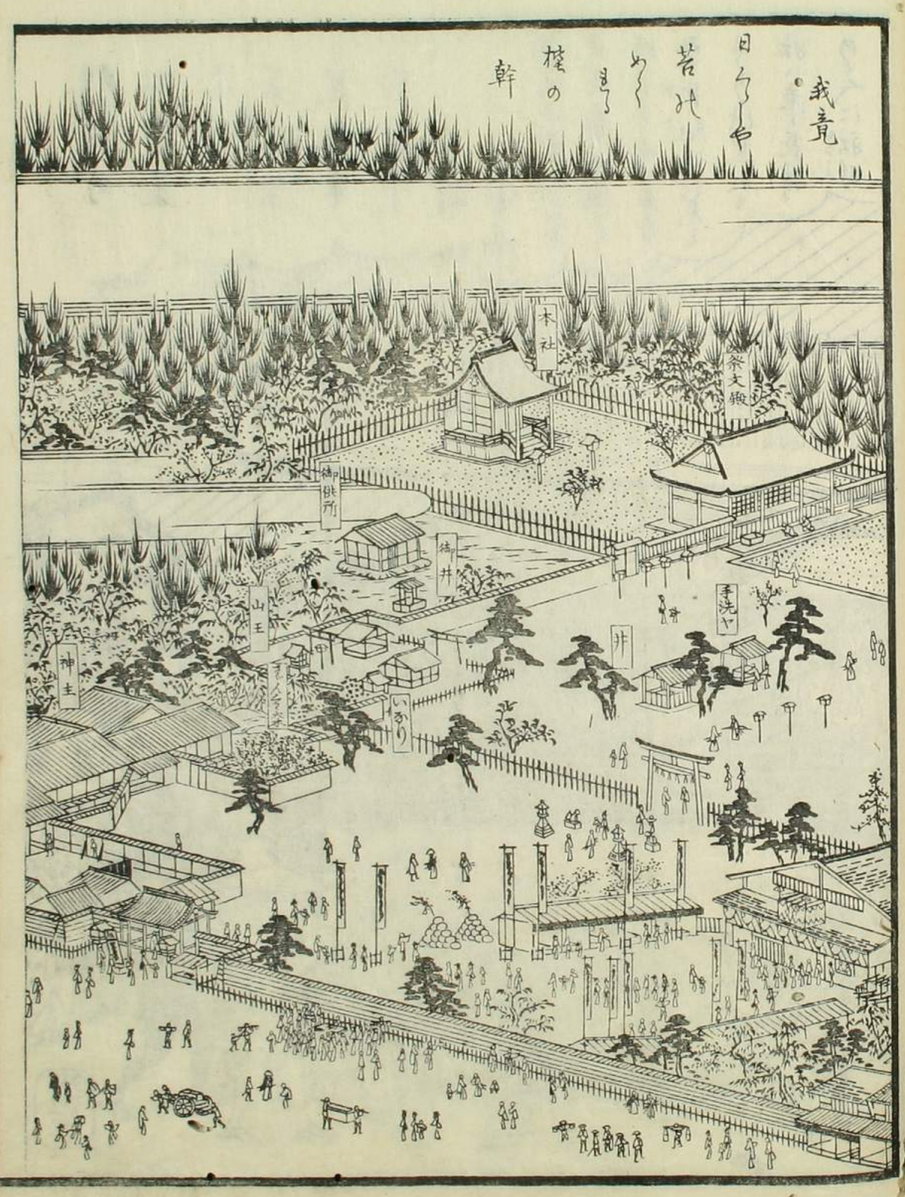
苔ゆ

めゝ

ま

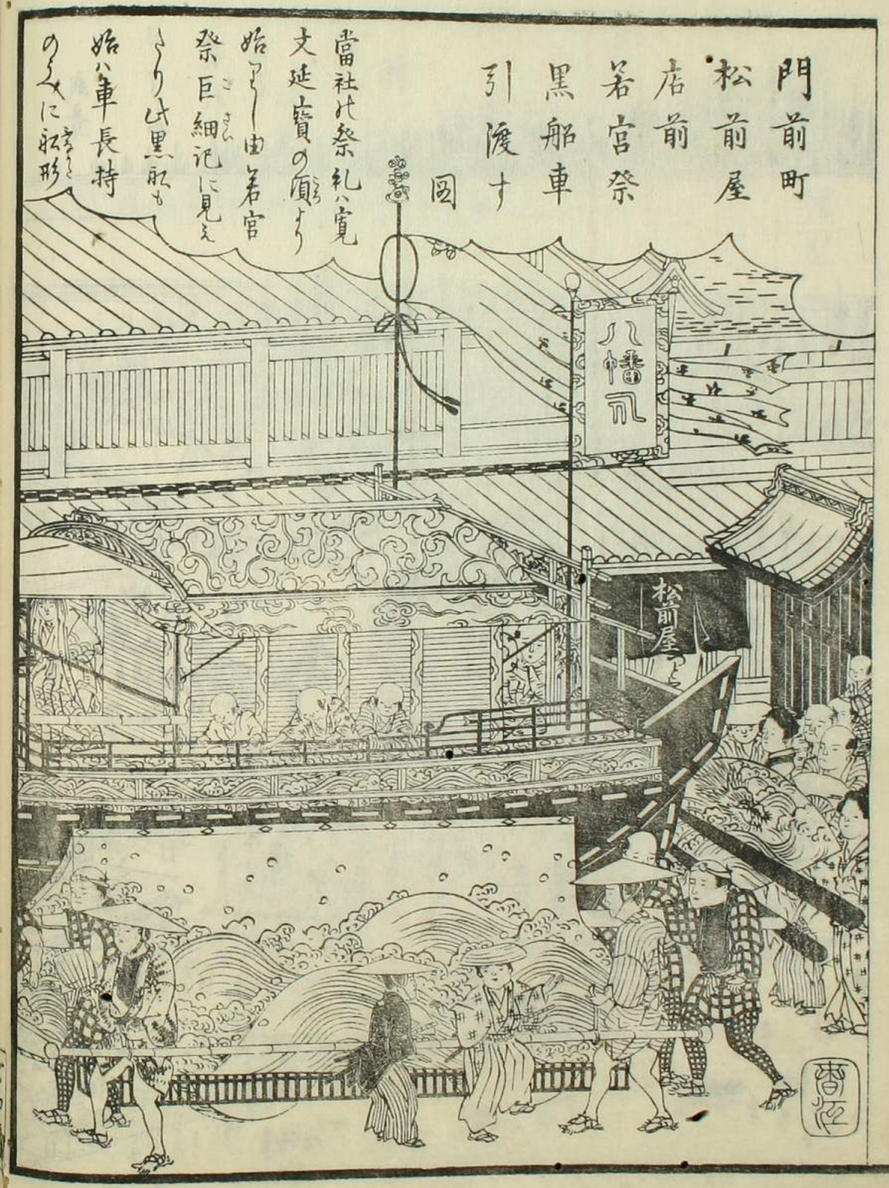
楼の

幹

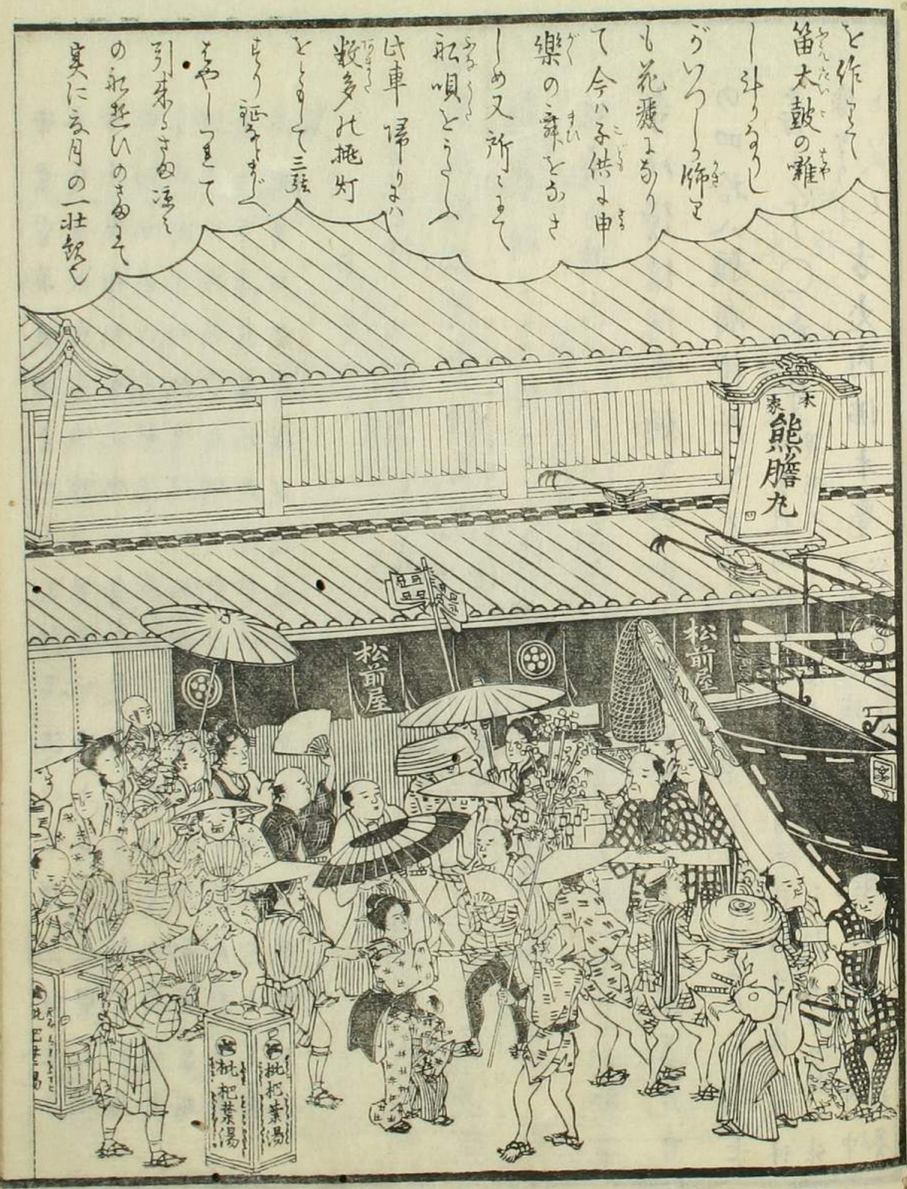


門前町
松前屋
店前
若宮祭
黒船車
引渡す
図

當社代祭礼八寛文延寶の頃より始まり由若宮祭巨細記に見えたり代黒船も始八車長持のくに紅形



と作りて笛太鼓の囃し斗りなし
ゞいろゝ飾とも花瀧よりて今ハ子供よ申樂の囃とるさしめ又所ゝにて紅唄とうゝ代車帰りよ数多れ挑灯とゝもて三弦もう賑ゝすゞやーつとて引者ゝさ白浜の紅葉いのまゝて実に五月の一壮観



帝業曾羮統神靈乃在天緬思淳化世猶記誕生年
本自畜衣聖非唯讓國賢多時停土貢高處望人烟
雁子歌相和梅花頌始傳　宸襟崇倹約黎首荷陶
甄堀地營氷室開溝漑稻田三韓聲教暨四海渥恩
宣古廟深松裡周墻列栢邊来椽標質樓金鏡象明
鐲亭祀殊顒若威儀更肅祝送迎管絃女巫鳴鐸出命士下輿
廈初日浮簾幕流風迎前殿角祥雲合階庭福草鮮太平多樂事援筆且成
菊

きと浄土ぎやうせねば宮力ゆゑなりとも世に移すん　上田仲敏

正覺山阿弥陀寺往生院　門前町西側にあり浄土宗京都智恩院末

新家村より移すべき清須にうつしと慶長年中御
迂府の時きに伊勢國多氣郡齋宮村観音
寺此僧信阿志願を興し寛文五年より信濃善光寺
の四拾八願順禮所をもうけ此所をもうけ三拾七
番とす○本尊三ツ比阿弥陀ハ佛工春日の作服士二像ハ其体異形にして佛像もえんずりうしハたき八幡の外像ともとなり　方丈内佛本尊阿弥陀の座像ハ元禄年中心侯郎の真作　涅槃堂　住僧桟誉

阿弥陀寺
木佛涅槃會

の建立にて長一丈余の木像阿羅漢以下の人畜も
ある木像にて安置す世に沿らしき像なり守夜神堂宝暦
年中の開基也十王堂近年の建立塔頭源受院天文二十三年織田彦五郎信友にの主君斯
波治部太輔義統と戦し清須の城にありしと信長公軍兵を選し
信友と謀罰し義統の嫡子義銀を取立清須の城に居らしめ尾
張屋形と称すにて阿弥陀寺の境内に仏一宇を建立し
義統の菩提所とす源受院ハ則義統朝臣の法号なり

大雄山性高院同町東側にあり浄土天正十七年三位中将忠
鎮西派智恩院直末

吉君この浄母公寶塔院殿の菩提の浄為に武蔵國埼玉郡
忍庄持田村に浄建立あり正覚寺といひしを忠吉君當
國を拝領し給ひ清須浄を城しなしかば此寺をも清須小
うつし寺領浄寄附ありしが慶長十二年三月五日忠吉
君江戸にかくれさせ給ひしかば増上寺に葬まり其浄
法号性高院殿と申奉りにより今此寺号に改め慶
長十六年浄迂府の時にこれより中興開山八満誉玄
道和尚なり○本尊阿弥陀の立像左右観音勢至寺寶忠吉君御影像一幅

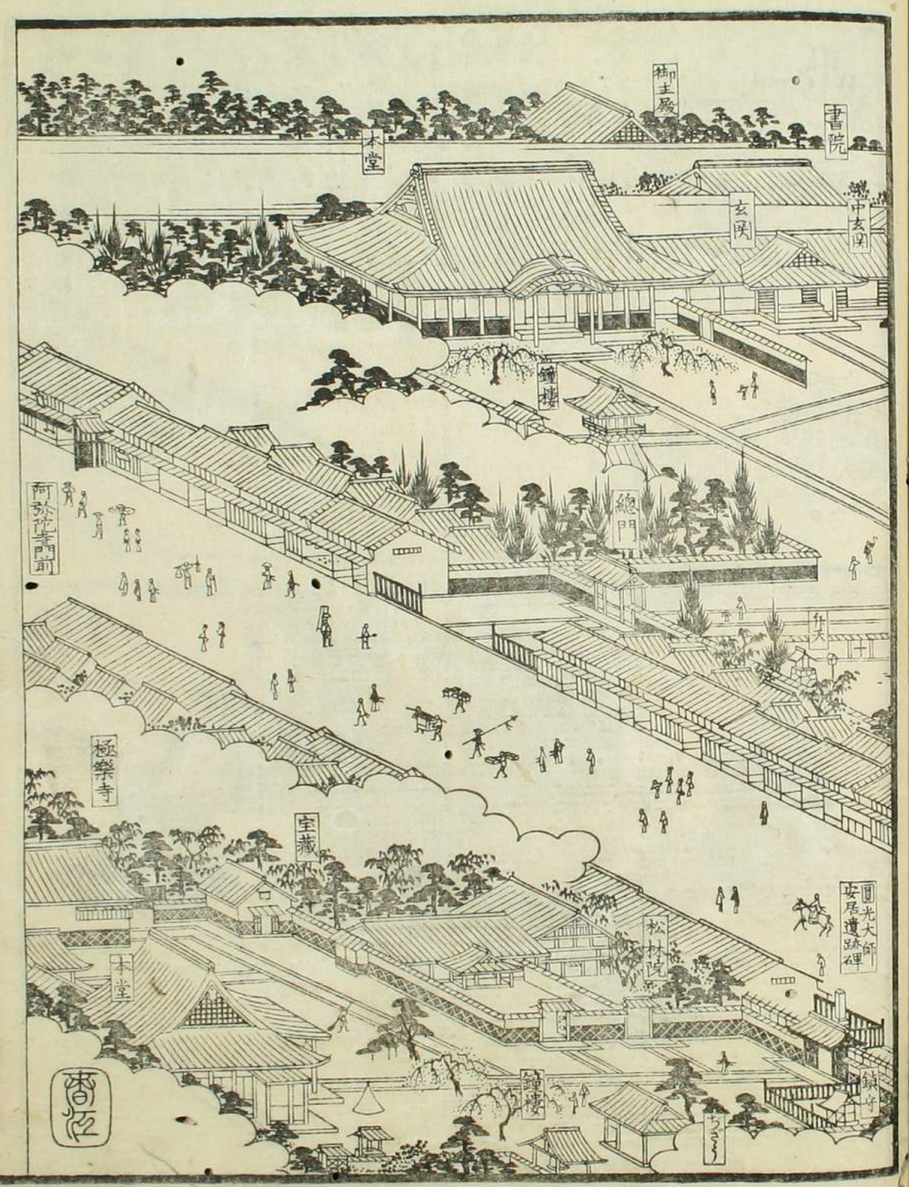
称讃浄土經一巻中将姫筆金屏風一雙古法眼元信筆繡涅槃像一幅
此類稀なる大幅にして例年涅槃會にハ本堂に掛置て諸人の結縁とす塔頭称名院慶長十六年清須
より移す境内
桜ハ大樹なり一行院堂の本尊ハ兆殿司の志なり

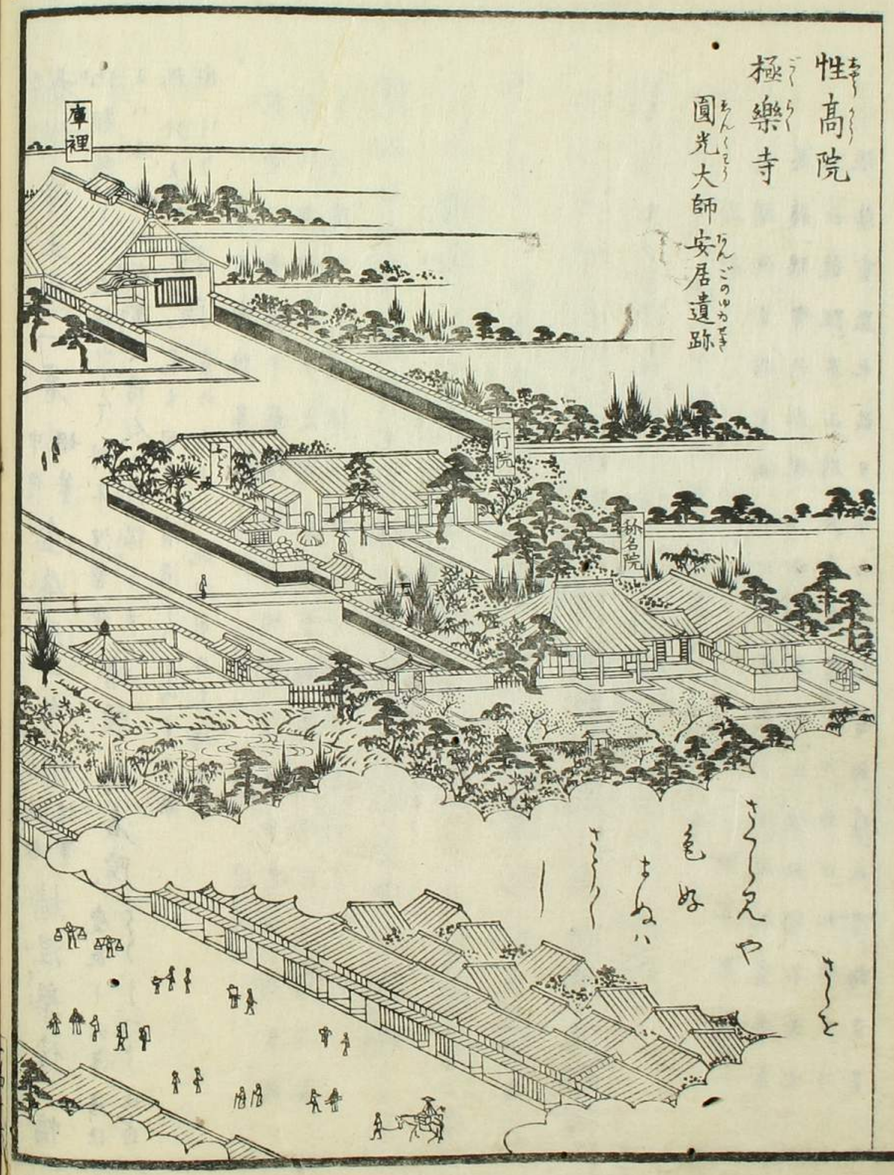
春日遊 性高院 滄洲

花臺一雨灌平蕪隔郭人烟忽有無清賞漫憐康樂
句即遊何假少文圖簷前芳樹春相映檻外歸鴻暮
自呼閑坐更聞談淨理飜知長日在須臾

寛永十三年朝鮮人来聘の時性高院を三使の旅館にせ
しと權輿にして来聘使通行毎に必此寺を休泊とす府
下の学士松平秀雲井出昌臣此數輩韓客と贈答せ
し詩文塤篪集三世唱和蓬左詩歸昆玉集後編等にの
せしこの名古屋客館の作ハ皆此性高院にての唱酬なり

甲申二月三日朝鮮國信使宿二府下一與諸子會 松平君山
通刺
自聞使星指東翻首以俟若歷三秋今也皇華無
恙獲臻弊邑奉接清標何喜如之僕姓源名秀雲
字士龍號君山別称盍菴窩主人族曰松平氏乃
張藩書監也茲日奉命小相賓館獲承清誨幸甚


御主殿
書院
本堂
玄関
中玄関
鐘楼
総門
阿弥陀堂門前
竹矢
極楽寺
宝蔵
本堂
松村院
圓光大師安居遺跡碑
鐘楼
書院


性高院
極樂寺
圓光大師安居遺跡
庫裡
一行院
秋名院

三世唱和小引

甲申春朝鮮國信使宿府下性高院僕奉命小相賓館與製述官南秋月及三書記唱和男武孫彦同侍席右秋月把筆寫曰三世一席各贈瓊篇希代之珍也嗚呼此言可以為不朽之榮也遂裒其詩為一冊題曰三世唱和命剞劂氏行于世故叙其語以弁其端云

君山題

幸甚

呈製述官南秋月

路入扶桑東又東海天萬里使星通画熊夜宿三山月彩鵠朝飛五両風野館花開停匹馬舟梁雲起度飛虹行吟此去應回首八景芙蓉積雪中

君山

奉酬源君山

秋月

性院深々稲葉東萬松村逕遠相通山川秀媚天新雨樓觀高低夜有風春早江城聞法鴈日暄橋渡過垂虹蓬莱仙老厖眉皓三世論交一席中

向韓客館性高院余同諸子在賓筵筆語唱和徹暁而罷矣再過此地有感往事因作諸以寓懐云

千村愚臣

隣市城南一梵臺知曽韓客此徘徊主賓坐定交通刺筆硯携来各闘才宴散五更群動息手分千里別愁催斯筵憂作清閑地當日繁華安在哉

贈朝鮮國製述官南秋月

蕙樓

城中春色盡楊柳獨依々萬里雲山合三韓使者歸月隨征蓋去雲傍掛帆飛借問還鄉日何人更錦衣

教報山極樂寺一心院

同町西側にあり淨土西山派京杉東山禪林寺末栗生光明寺に次ぐ

そもそも栗栗郡若栗の郷

後世極樂寺村といふ

にして法然上人安居の地なり〇天文年中木曽川の洪水流廢せしを慶長九年九月僧空朔清須に再興して極樂寺といひしを同十五年さらに民部省圖帙の殘編に栗栗郡極樂寺號若栗寺寺領四十八東有餘以浦領為貢代法然上人三夏不出之縄堂也元亨二年十月下吏日史生源忠勝史生秦行宗と見えたり上人の旧跡顯然たれば文政二卯年圓光大師安居遺跡と大石に彫りて門前に建世よいちじるさ

梵閣

〇本尊阿弥陀の立像

霊寶六字名号法然上人の書名号は下に弥陀如来雲中にたなびく彩像と画きて為父時國母妙海菩提源空と誌せり

立像阿弥陀佛若栗の郷に安置せし本尊

元祖大師供養念佛寶珠石若栗の郷より傳来の古物なり

地蔵堂

塔頭松林院慶安元年の建立なり

興國山大光院同町西側にあり曹洞宗武州忍の清善寺末

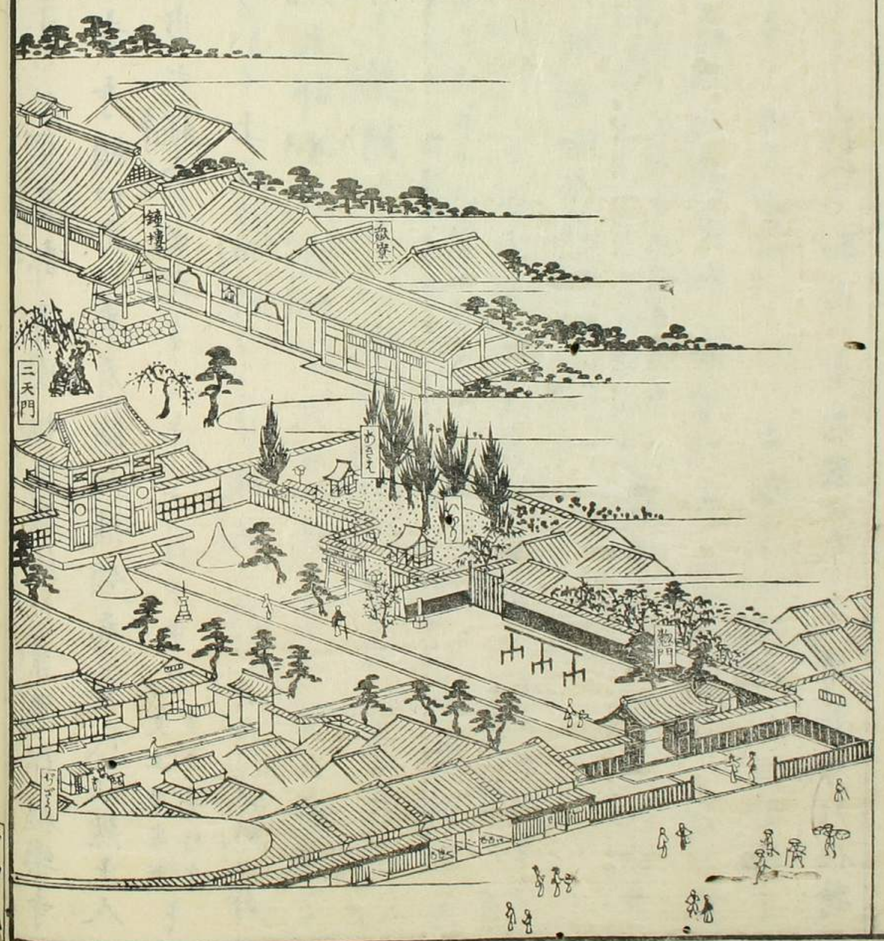
慶長のもの

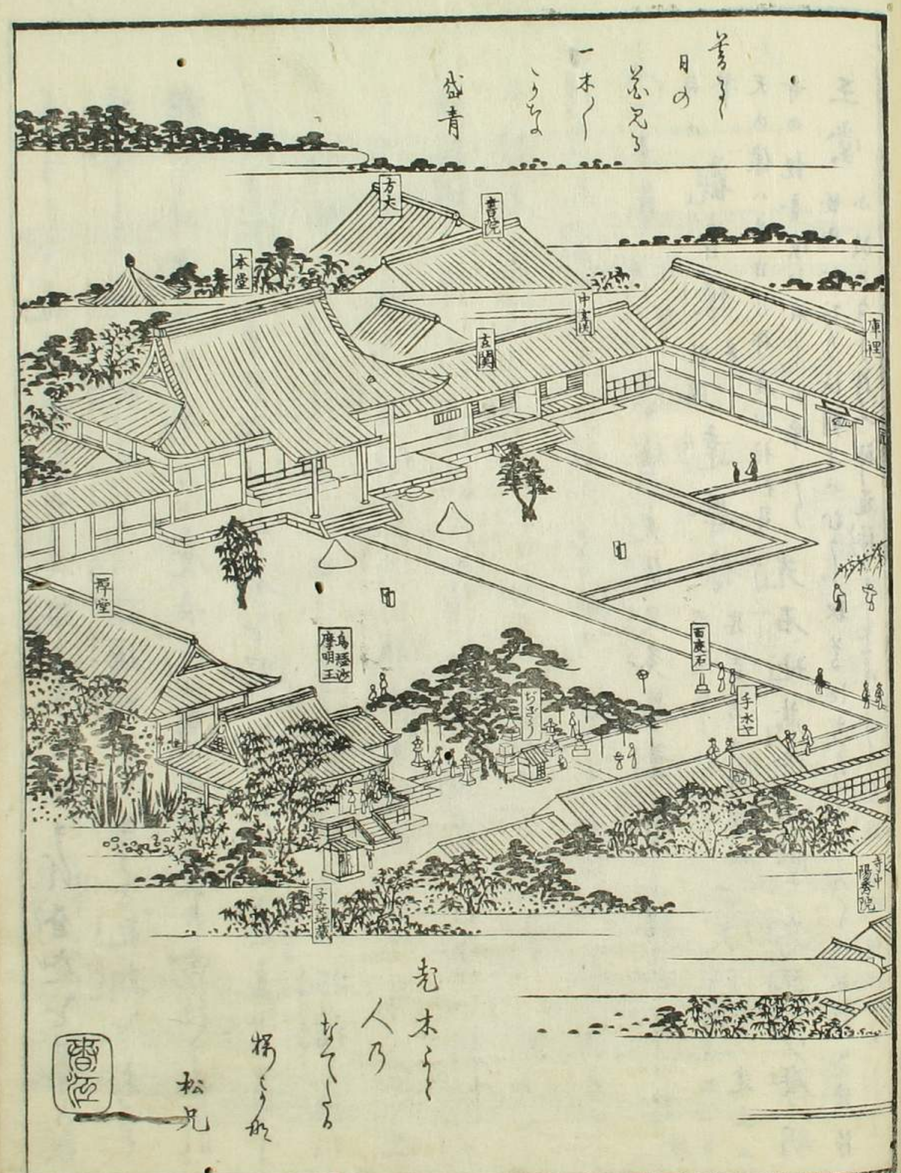
從三位中・将忠吉君清須御在城の時雲門寺なりし慶寺の跡に此寺を建立し旧名雲門を以て寺号とし明嶺和尚を請て開山とし給へり和尚は武蔵國の人にて清善寺に住持

大光院

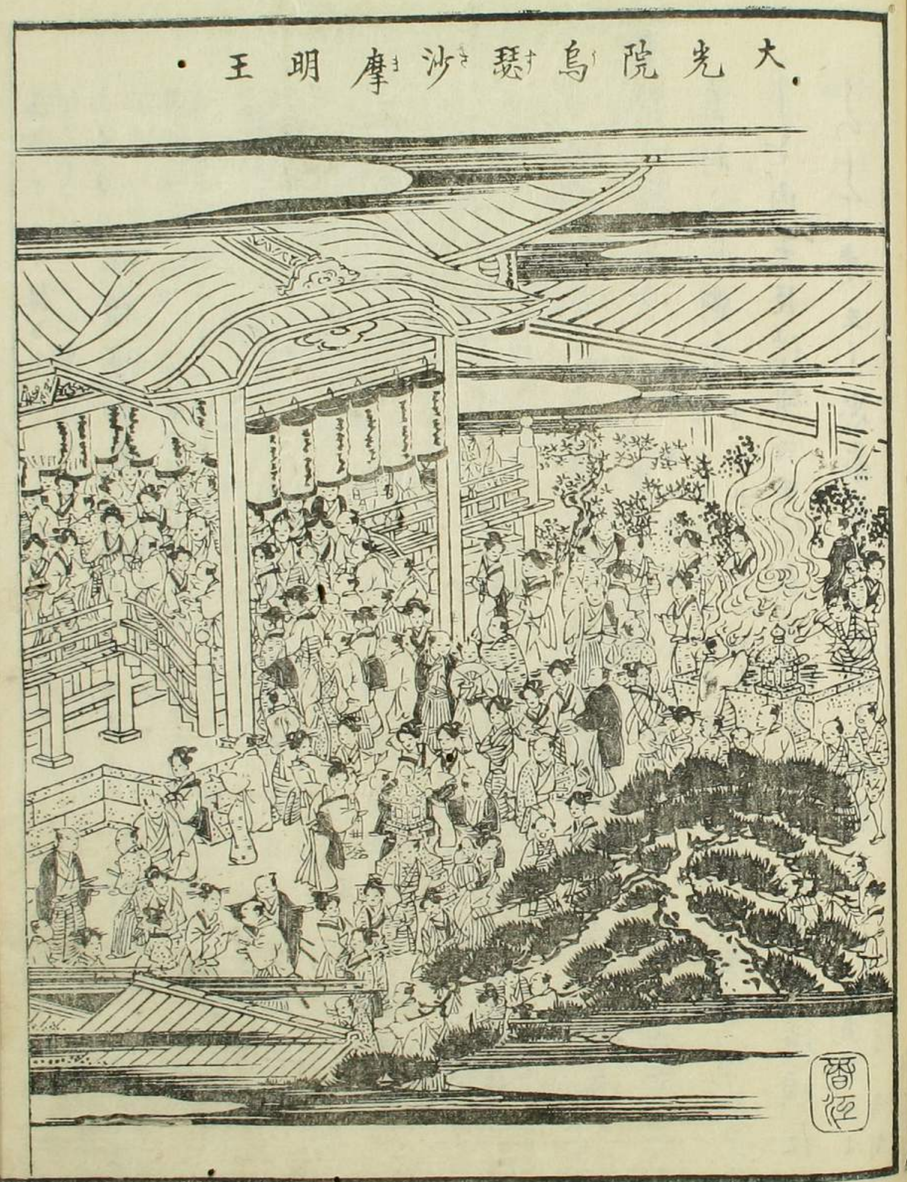
好惡萬般因
所思月花禪
室両相宜月
花興盡人歸
去花月領閑
落後時

大津常辰





松丸



きりしゝが道徳堅固なして眠る事とはまぼ昼夜をとゝ淡
端坐して道を修しけるバ道徳顕いを萬〳〵死期を志ると
種〳〵此霊異を示して慶長十四年二月廿八日遷化すゝし
ゝ　東照神君明嶺と帰依しめい　忠吉君も因て
く帰依しなるゝ厚く御ます爾に清次に招請し給ひ
〳〵　忠吉君御逝去の後大光院殿〳〵ヤ〳〵ハ氏明
嶺和尚が奉ゝ〳〵法号ゝさて慶長十五年の冬迂府
の時名古屋日置の地にうゝて日置山大光院〳〵改号〳〵
けゝ又今の山号に改む寺依ハ　忠吉君の御寄附なり
○本尊釈迦の木像霊寶　天竺貝多羅葉一枚出山釋迦像一幅兆殿
司の筆　観音像牧溪筆　達摩像周徳筆　忠吉君の御寄附　二天門寛政三年の建立二
天の像ハ春日井郡鹿田村仁昌寺の観音堂に在〳〵古像なり　光
王堂　堂内にかゝり此明王ハむゝ〳〵釈迦にちゝひてとゝゝの不浄を清浄
ふ改りゝ〳〵神通倶〳〵ま〳〵ゝ〳〵　跡金剛経に見〳〵ゝり

毎月廿八日を縁日として参詣の法人聚集とうかり又一切下部の諸病まぐ
とも治せり大悲願ある佛なれば婦女子の参詣ことに多し堂の儀は松花院諸
大樹枯の古木にして子嶺奥の建立なり **石地蔵尊** 陽秀院内にあり
腫物其外一切の諸毒を祈願する時は其に紙と線香を愈るに付ては其紙を
[illegible] 大光院の諸人絶るなく[illegible]て[illegible]容見ゆる時は[illegible]紙法[illegible]と称す

東海禹門登者悉是魚龍頭角南方佛刹到者那勢
鳥寮布毛　僧霊瑞

大光院観花　乾堂

老拙一生涯作膏儒世間名利両虚無僧房日暮看花
去嘯咏胸中与俗殊　大光院の楊は登[illegible]

狂哥槐枝集附録

花は名は大くさうゆんの糸楊さりとても人を絶せぬ　米都

大光院の楊をよんで

醉中狂興集

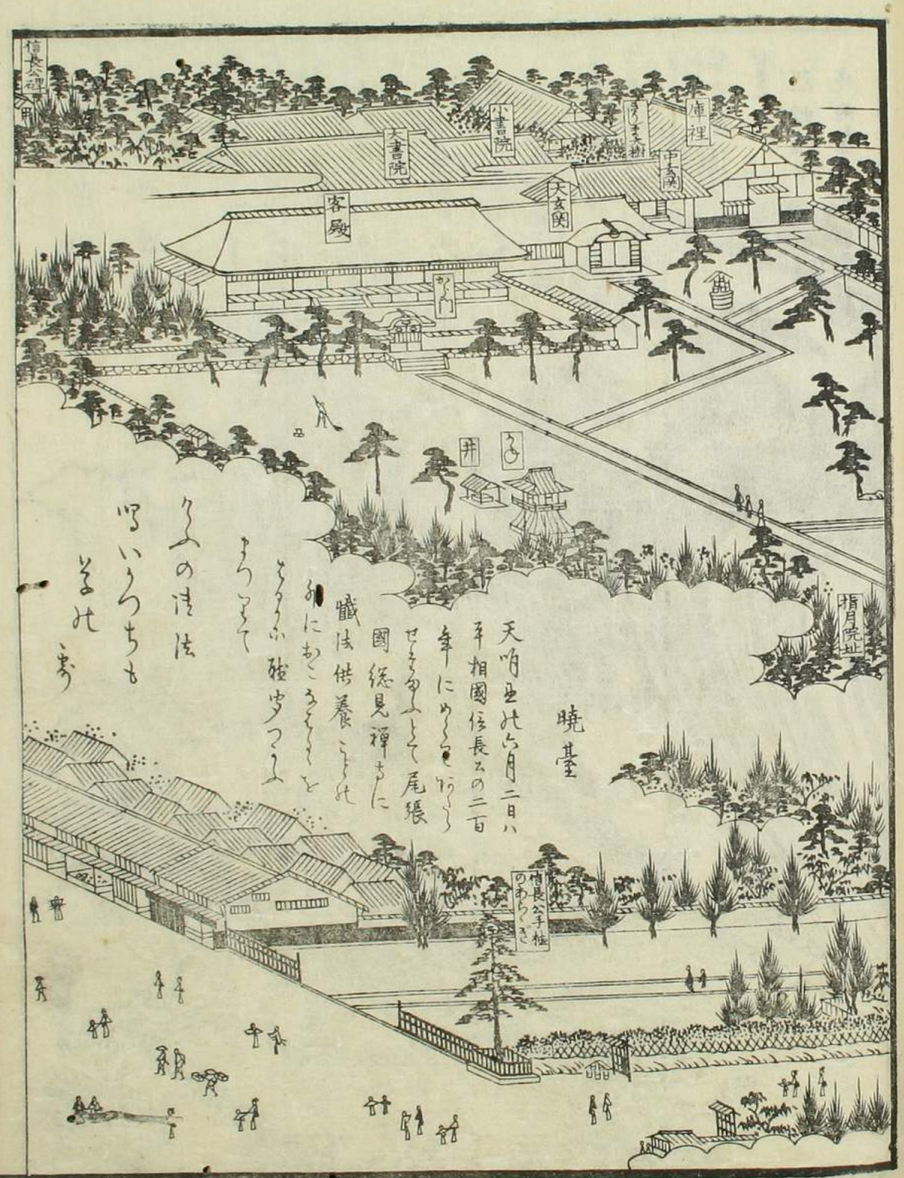
咲うけし花の姿は毋衣武者は一ツ木因前の糸楊なる　可吟

景陽山總見寺 同町東側にあり臨済宗京都妙心寺直末也 **當寺は**[illegible]伊勢の國大
島村に安國寺 開山虎關禪師は元亨釋書濟北集等の撰者なり[illegible]る廢寺のなりと
を内大臣信雄公又信長公は菩提の為に當國清須に
[illegible]て建立し忠嶽和尚を[illegible]住職[illegible]

舊貫による

禪師を開山[illegible]忠嶽を
第二世の住持[illegible]

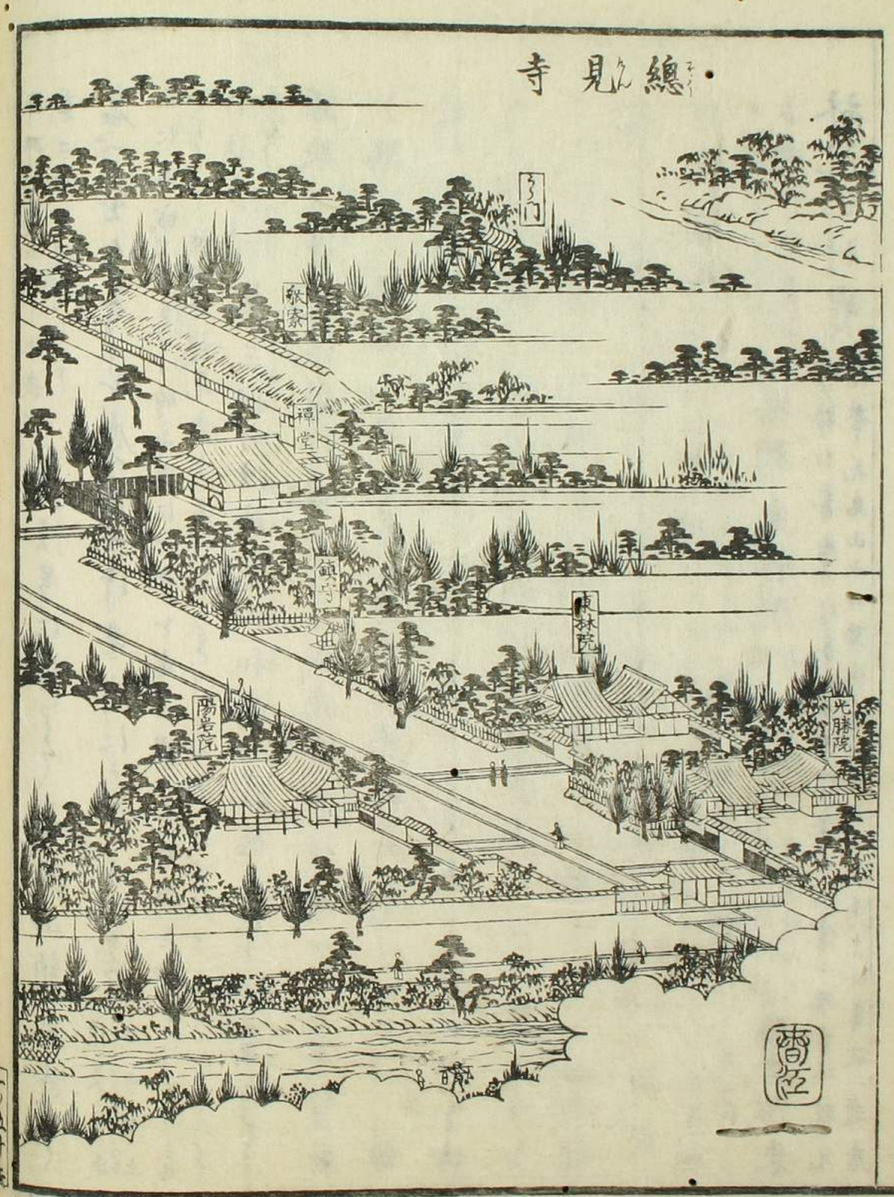
公は法号に據りて景陽山總見寺と
名づけられ慶長の沛遷府にうつりて 信長公近江の安土
山に在城[illegible]時山上に一堂を建て國中は那郷を撰見するの意
をもって彼堂を總見寺と名づけられしが公薨逝の後其寺号をもって
[illegible]法号[illegible]は **第三世の住持閑山和尚は道徳才学抜羣にて**
源敬公沛寵遇 特に厚[illegible]て或夜方丈焼失せしめ宝貨財
を賜りて正保元年十月廿四日再建造作竟 [illegible]ければ **源**
敬公来臨[illegible]**長臣に命じ宗門の耆老**[illegible]**詩を作**
らしめて賀[illegible]**る境内に古杉樹多く**[illegible]**日を**
さへ堂に参して禪堂は雲叢僧寮の石磬も自ら幽凄閑
寂なる市中に弥らし紀古浄域なり ○ **本尊** 藥師の木像 **禪堂**
方丈鐘楼 信雄公大鐘を鑄んとせしに[illegible]驚乱の世なれば財用乏
しくして今に[illegible]の古鐘を[illegible]用られ[illegible]
[illegible]奥田は神宮寺の鐘をとり用られ[illegible]
[illegible]公は始男信忠の法号にて別[illegible]の菩提所なり **陽岩院** **東**
林院 ○ **什寶** 信雄公寄附の信長公画像信雄公画像一幅古法眼元信筆花鳥山水四幅信長公書状二通秀吉公書状一通唐



天文廿七年六月二日八
年相國信長公の二百
年にゆくりなくも
せきやの上にて尾張
國德見禪寺に
職法供養ありし
かにおこなはれ
ぬ
ちなつて
ちなつて
久の法法
ちいうちも
なれ
考

曉臺

總見寺



総見寺闘山和尚の古事

或夜和尚の方丈より火ぶくれ上りしに弟子共走来て和尚と共に火焔の中に跏趺して日天示火災三四更忽然行脚可憐生尋常慘似把芽漏と作して結句いまだ終らざるに大雨忽に降り猛火忽消けぬ

孤焔堆中夜雨聲

法眼梅山筆

けぬ時庫裏より安置せし韋駄天なる大の法師と現じて火を防ぎ給ふ小杉戸の画龍雲雨を施せしも道徳の加被力冥助なる希代の霊應なり

此法は火伏せなるよし又曰く此韋駄天なるは夏侯惇の像なり

画十六善神同十三佛画像所聞禪師自画賛信長公所持の硯同麝の香爐同
沈香の枕秀吉公作安土竹の花生延文元年の雲版古銅鐸信長公影堂
の額此額ハ世に〻繪馬にて則信長公自筆のもんじゃなりしを留ち
ゆ六世白翁和尚の摹擬ふて今も往世に名うし此外什宝數けもど
枚挙に遑ら
ぬ

富士山 觀音寺清壽院 同町西側にあり山城國醍醐の三宝院の流 本尾張美濃二ケ國の修験ハ先達うり

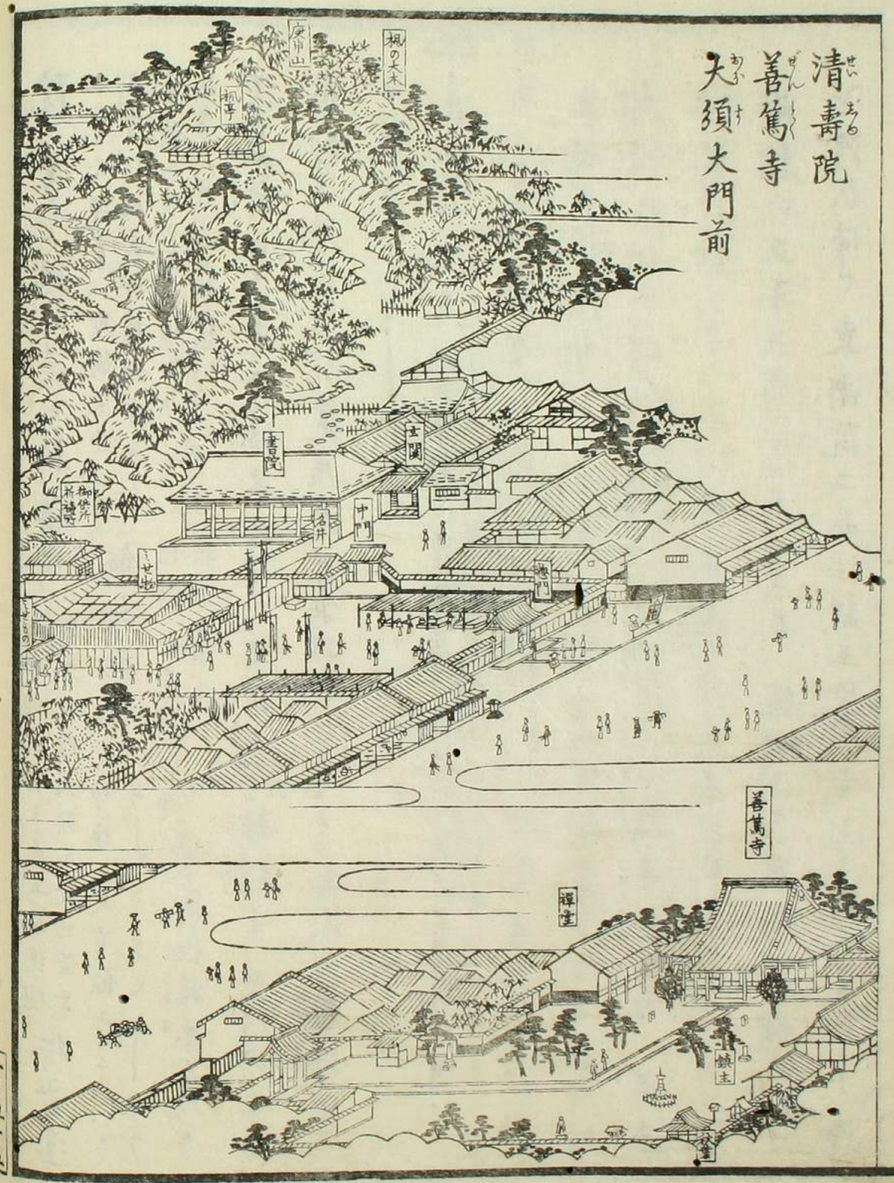
尊富士權現ハ 土御門天皇の勅によりて駿河の淺間大
神の神職此地に勸請して造営ら〻り中世前津小
林氏城主牧与三左衛門源長清富士權現を崇信して
七度〻未詣此志願を発し三度駿河小下りて登山に
〻の晩年に及びて老邁に堪ず〻ら四度を此
社に詣で其願をもち日〻為其御當社を再営ら〻し
〻ぞ〻〻信長公此家臣村瀬左馬助の末孫修験と
〻て大図坊と〻い〻し大宗院及び此院を兼帯住持
せ〻其子宝壽院 國君ら〻當社の地を拜領し清壽

院の号を賜り○祈禱所 本尊不動明王藏王權現後行者理源大師を合せ祭る 行者堂 冬尊正観音ハ聖徳太子此作 夾侍弘法大師役行者なり 霊験あ〻〻〻〻〻〻〻〻 飯綱權現社 神像六尺有餘うてあり 創年六月十日祭礼 末社 稲荷 金毘羅 菅神 境内に桂木なら
て盆栽に〻忘〻る孫木奇草を架上に排列し四時の春を
留む清玩又ハ芝居見せ物此小屋あり往人の輻湊常
ふ絶〻〻〻〻

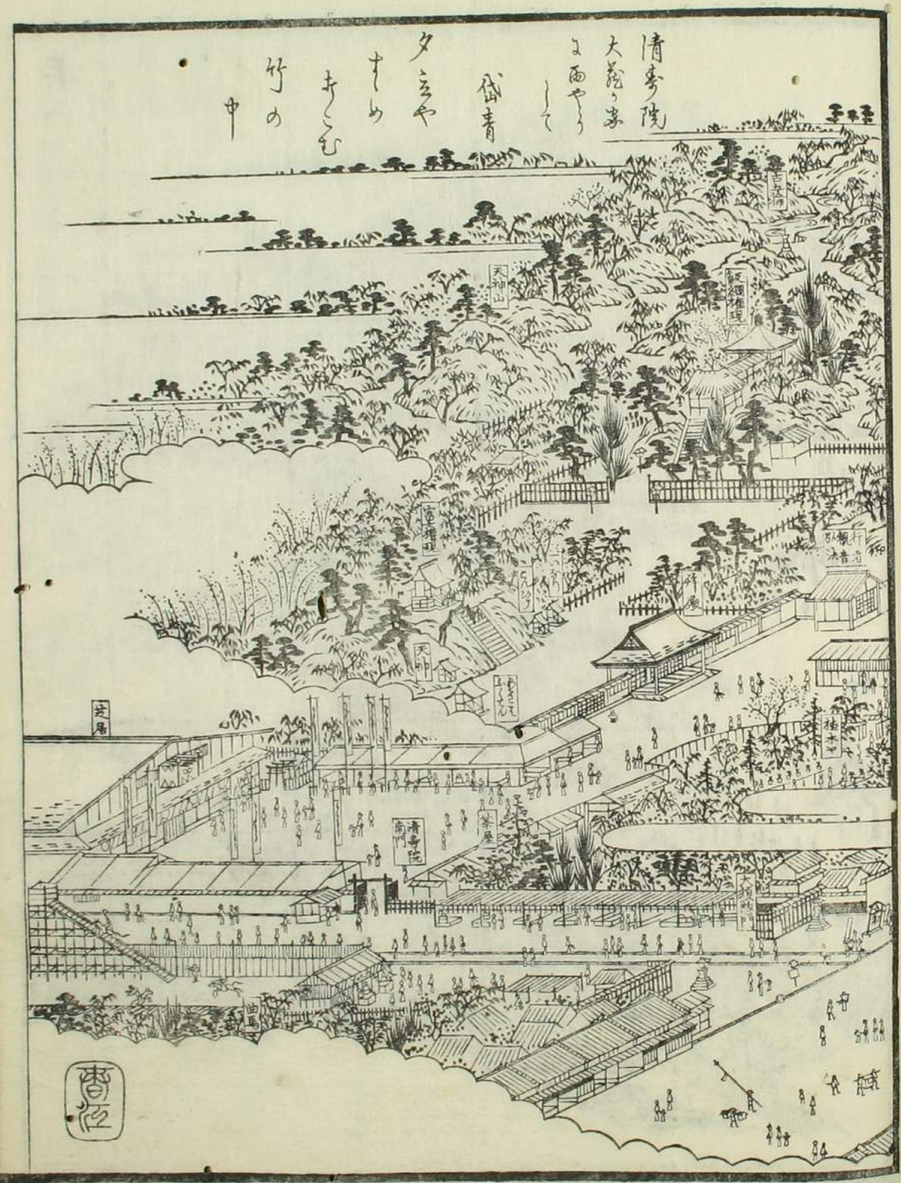
那古野山 清壽院の後園にあり古木老幹生蔵苔迫怪石攀廻る 古色閑〻〻〻る雅地〻〻ハ当年此面影其侘〻に足ふ小山之

北野山真福寺寶生院 同町西側にあり真言宗元本寺〻り 伊勢大神宮此神
主従三位度會行家の子能信上人の開基〻て中嶋郡
大須庄北野村 今ハ美濃の国に属す 慶長十七年 東照
神君此命に〻り〻〻〻任僧尭遍〻て今此地に〻つきめ〻〻
南朝の正平五年十二月十三日 後村上天皇御祈願の綸旨
を賜ひ〻〻〻東南院二品法親王の令旨を賜へ〻を因り御

清寿院
善篤寺
大須大門前

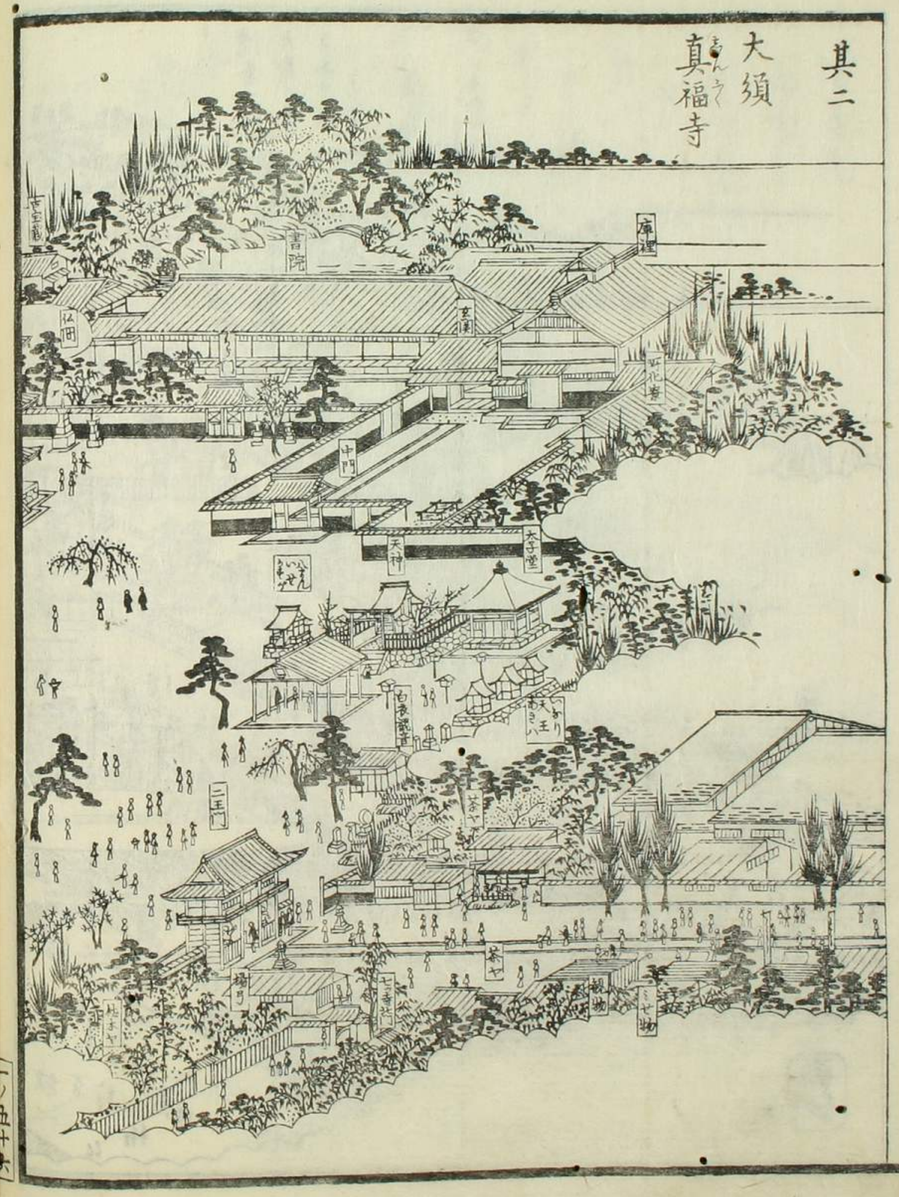


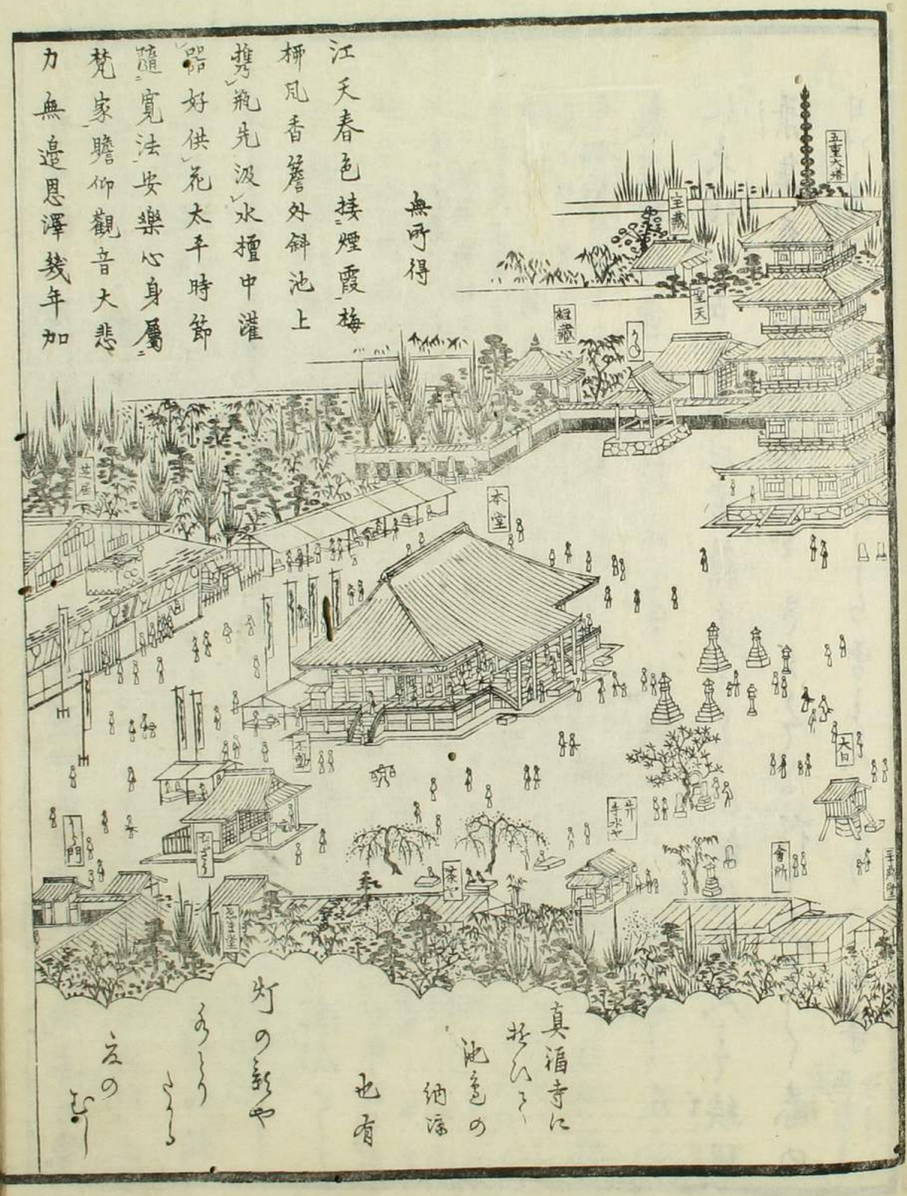
清秀院
大義ら
ま西やう
して
俗青
夕ゑや
すしめ
ちくむ
竹の
中



其二

大須
真福寺





江天春色接煙霞梅
柳凡香簷外斜池上
携瓶先汲水檀中灌
器好供花太平時節
隨寛法安樂心身屬
梵家瞻仰觀音大悲
力無邊恩澤幾年加
無所得

真福寺に
詣ずれば
池亀の
泳ぎ
也有

竹の新や
そよぐ
そよぐ
衣の
ひま

宇文和元年　勅によりて、拾ほ國四天王寺に正觀音の像をうつして當寺の本尊とし給ふ　天皇の皇子五御門二品任瑜法親王第三世に任職して、おがらげなる勅願寺なりしが中世に騒乱に衰廢せしを信長公燈明田にて北野に地を寄附なりしかども累年の水災に湮没せしゆゑ今のあへ迁せしなり

二宗と兼ねより其二ハ奈良の東大寺に別當法勢聖珍法親王の法脈其三ハ紀伊國根来の中性院の法脈なりしを安養寺を正統なりし聖一國師の弟子佛通禪師安養寺に任ぜらるし時日ごろに　大神宮に詣でて神告ありて觸穢をさけず故に　大神宮へ参詣の諸人ばかり寺に来りて釜をとのへ火を改めて炊ぐ事ハ其餘風の残るなり　佛通禪師迁化の時密今明星に茶毘をなすべしハ其餘風の残るなり

教及び禪学に書籍多くして彼經信上人へ附与せり爲今に大須に古写本に書籍多くして經信寺人を続現兼集春の部に爲花をきこえよ初てふるく春の日に光りにあらる花のしら雪ふるなり

○本尊　正記ハ珍津ハ

大須奉納馬の頭

五月十八日馬の頭ハ信長公桶狭間の合戦に勝利なりて一國の主町なりと悦び即日清須の城へ馬を引きて走せ来りしも彼の押移りしより今を府下に盛りて繁田三ヶ寺に甚多し又馬の諸馬の畫を書きて畫文字殊に玉の金韻ふ似り

其二

十八日馬の塔まで
て翌十九日礼馬にて
町ごに種々の工夫を
凝らし互に輪じて
練り音の趣向をあ
町々を終日徘徊す五十
人百人二百人〳〵町の大小
にかゝわらず多かり甚お
ゝさ茶番狂言の大仕懸
ぞ〳〵のもの今まで一と回して
大意を示す

四天王寺のおそらく二王門 五層塔 文政年中の造立かゝて本尊に安置せる毘盧明王ハ弘法大師の作むし〳〵も岡庄大須に有し古像五智如来ハ新作ゆえ木像なり 三十三所観音堂・大日堂

聖天堂 不動堂 天仏にて世に北野不動と称す

鎮守天満宮 此神像ハ延喜二年紀紫太宰府にて御自筆に画せられし北の御方及び姫君へ送らせられし画像ゆ

て天暦年中北野御鎮座の節神殿に沸田産あるを

後醍醐天皇御崇敬のいたるを畏産大須の地にむかへ

て御建立ありて舊社と 今も北野山〳〵大須と通称すハ此縁にもとゝ 例祭ハ

二月廿五日寺子供大文字を奉祭し拝殿及び書院の

小展観し諸人の目を驚ゝむ此日桜天満宮ゝゝ

数十町の名往来羣聚せり 八幡伊勢春日北三神 とゝ稲荷秋葉天王の小社側にあるひて鎮座なり 鰐口乃諸小永享十年此文字ゝゝ 境内ゝ

芝居及び見世物小屋ゆ教様ありて年中此興行

絶もるゝ府下尹一代勝地なるゞ銘中五月十八日ハ
町こゝ馬の塔を寺納して彩糊の奇記見あの羣集
又四万六千日ハ此寺なゞ実に境内ハ溢るゝ斗りの賑ひ
ゝり又堂内に絡るゝを多く掲て年〻筆の雅致奇巧と
爭へるも自ら慈眼視衆生潜人結縁ハ方便なり○霊
寶 牛玉 天竺霊山の牛のひとり牛王経一巻 牛王儀軌 世に稀ゝ経文ゝゝ有ものゝ
一ハ宝物と此経あるを宝生院の名ゝ付ゝ 心経 二巻 弘法大師の真筆 琱玉集 天平十九年に書写せ唐土高名ゝ人
の付を集ゝる書也 七大寺年表 永萬元年の書写後羣書類従に入ゝ 空也誄 天治二年の書写源為憲
の作続羣書類従に入ゝ 新修往生傳 仁平元年の書写藤原宗友作 高野大師傳 覚平
七年写 東大寺衆徒条詣伊勢大神宮記 文治二年写 秘蔵寶鑰 聖徳太子傳暦 観應元年写 倭名
應安五年写 弘法大師行状記 貞和二年写
類聚抄 弘安六年東寺知足院にて編集せし書ハ東寺紙につゝ
もゝ近世摸写して印刻ゝ白拍子玉王ゞ注進状ゝ此和名抄閲巻ゝ
須本和名抄と称ゝるゝ見なり 後七日御修法記 正應四年宗可写 權律師

寛信授灌頂於両人記 元應二年以吉祥園寺上人御本求法弟子大照写ゝ 擲金抄 弘安元年
写後世の節用集のゝ書なり 覚洞院僧正入壇資記 應長元年写 徳治元年東
寺結縁汀雑記 永和二年の写汀ハ灌頂ハ二字を一字にでゝ書ゝ 梅尾上人像 文和三年
写 三寶院印可略日記 元亨三年写 高野山順禮記 貞治六年写 神道
集 永享五年写 孔雀經法 正中二年写 遊仙窟 文和二年写 章律通致章
第二 文保元年東大寺大法師頼心筆 結縁灌頂私記 貞治六年写 如法尊勝記 保延
六年法眼寛信筆 正應記 元應二年求法弟子大照筆 灌頂應德記 應仁三年宝生院住持有覚筆 西
院傳法灌頂記 文明十年權僧都廣誉写 應長元年記 應長元年宗海筆 應
長元年於西阿弥陀院汀記 永和二年写 請雨経支度并巻數案 永久
五年勝寛筆 新樂府畧意 寛喜二年写 仁王経法 建徳二年妙然写 本朝文粋 十四の巻
の闕本建保五年写 同書 同巻の闕本正應元年藤原清範写 同書 十二の巻ハ闕本奥書ゝ錢錐の銘付て添布の印行本と異な
写 表白集 延文元年写 文鳳抄 弘安元年写 麗氣制作抄 康應元年寂俊写 醍醐
寺結縁灌頂受者記録 嘉元二年性円写 本朝詩合 文治二年写 明文抄

正安元年写 御産御祈目録 嘉暦元年大法師賴心写 弘法大師傳 應安八年写 尾張國解文 正中二年八月写 將門記 羮德三年正月廿九日写近世稲葉通邦摸写印刻して世に流布す 口遊 源為憲作 弘長三年二月五日写近年摸写印刻して世に流布す 阿弥陀經疏 嘉保二年写 新撰朗詠集 建治元年の奥書 聚分韻畧 享禄庚寅の印刻本 類聚神祇本源 應安五年の奥書 古事記 奥書に借請親忠朝臣一本吉田大納言定房卿被所望之間依家君の命書写進畢又一本書写之止之 本居宣長が古事記傳及び平田篤胤が古史徴開題等に引用せり 扶桑畧記 古写巻物 神祇祕記 三種神寶の傳 群家諍論撮要 表紙に本朝無双元孫書 大日本國現報善悪靈異記 巻物闕本中下二巻 羣書類從に真福寺本 東大寺古文書 收部 羣書類從に真福寺本 本朝神社記 神社の本縁 類聚既驗抄 神社の事實 天照皇大神遷幸時代抄 巻物元元集の原本 天照皇大神祕釋見聞 巻物続羣書類從に入る 勢田講式 巻物続羣書類從に入る 神皇正統録 続羣書類從に入る 古證文寄進狀 寛元三年同四年尾張俊村が田地を寄進せし証状 凡當寺の藏書天平年中に写せる数千部の古書籍又弘法

大師興正菩薩の真蹟南朝帝王の勅書親王家の令旨將軍家の制札等の古代の孫賢甚多くいまだ音信なきに

稲園山正覚院長福寺 同町西側にあり真言宗京都智積院末寺七ツ寺と通称す 當寺は正覚院とよびて中島郡七ツ寺村にありて天平七年行基菩薩の開基なり 光仁天皇の天應元年河内權守紀是廣 河内國舊田の人也 秋田城介にありて但國にわたりしの舊里にのこせる幼児光麿七歳に成りしは父是廣と慕ひ任國出羽に下らむとせしに旅立當國萱津の里に至る重く煩ひて身はなりぬるの時父是廣彼任終りて帰國せんが萱津に宿りて我児に遺い悲歎のあまり正覚院より来り住僧智光に逢ひて幼児が片時の蘇生を祈り給ひしに智光憐れみて寺に東せる林中

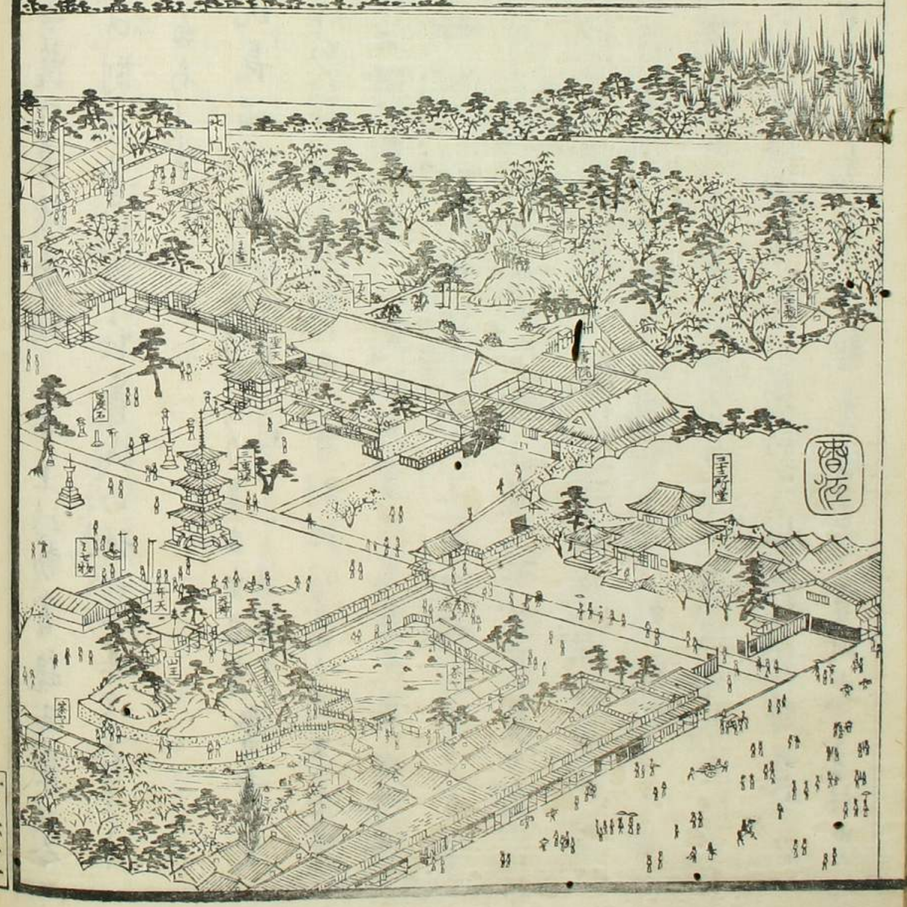
七ッ寺

過長福寺賞海棠

山邨良由

清音樓詩鈔

名花安在五雲端
似柳枝〻倒拂欄
香傍金爐飄淨域
色侵玉麈助清歡
空中濤起衣疑濕
春半雪飛風不寒
更禮竺王深洞裏
徘徊都作白毫看



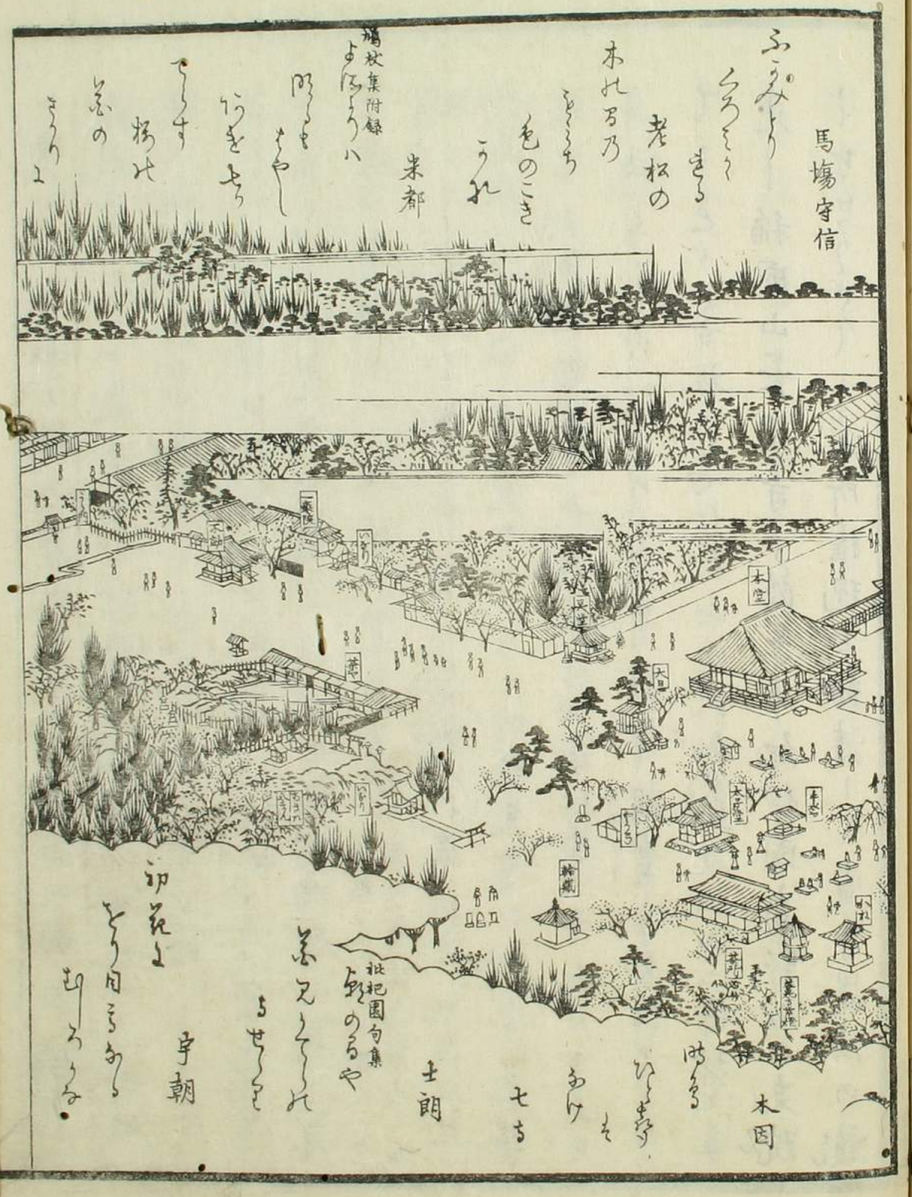
馬場守信

ふるみより
ふるゝ
まる
老松の
木れ百乃
ゝゝゝ
毛のこき
うれ

来都

塙校集附録

よ[illegible]ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



木因

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

七ち

土朗

枇杷園句集

鈴のるや
茶[illegible]
[illegible]

宇朝

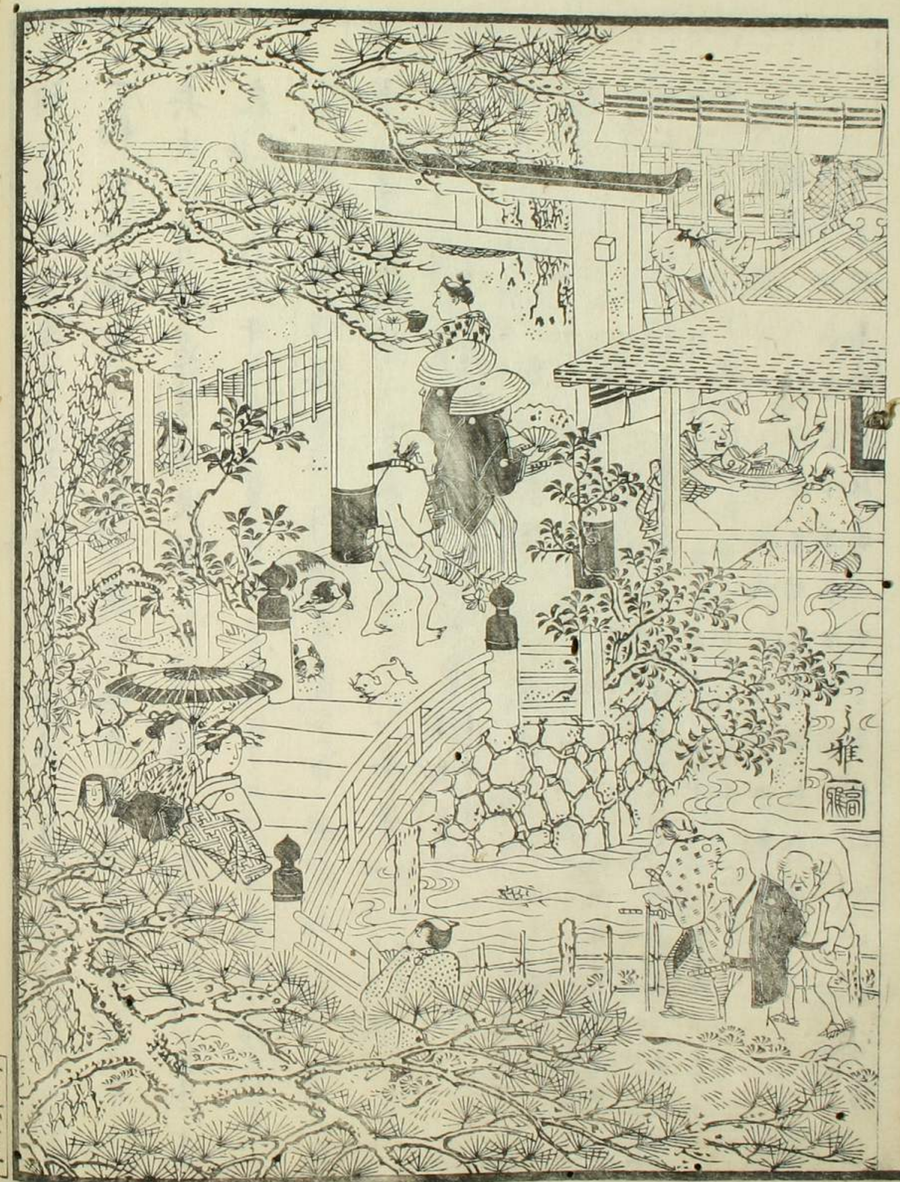
[illegible]
[illegible]
[illegible]

小壇と封じ地を清め藥師如来を壇上に安して却死
返魂香〳〵〳〵る名香をたき紀醫王密法を修せしバ香煙
児が面に掩ひ忽蘇生し父子名乗る事を得るりさて
かゝみか愛慕は情と語らひきぐ〳〵けりて全く死せ
らばあ〳〵〳〵正覺院に葬て追福の為に延暦六年十二月
七區の佛閣十二の僧坊を建立そうり七歳の七児うみに七區の佛閣を営みしれ
七寺〳〵かゝて仁和三年七月の水難天慶四年の兵火等
にあひて堂宇衰廢せしを　六條天皇の御宇尾張
權守大中臣朝臣安長寵愛の女子仁安二年六月十五日
身ゆうしらばむすめが夫豊後守親實ともにそうり
てうきが菩提の為に彼七區は伽藍及び十二僧坊を再
建し稲園山長福寺と改号し紀伊國高野山の支院
〳〵せうさて十五所權現を勧請して當寺護法の鎮

祠〳〵し又安元元年正月〳〵治承二年八月まぐ〳〵に安長
一切經を謄寫し輪蔵と建て納め置しが建武年中の
兵火に寺塔過半焼失せし洗清須は住人鬼王孫吉
久法名宗敬天正十九年豊臣家の命にりて寺を清須にう
し大塚村性海寺は住僧良圓を中興開山〳〵と爰に
十六年今は所へうせしり○本尊阿弥陀佛脇立観音勢至うり観音
堂正保二年の建立正観音及び二王の像を安置す聖天堂吳駿著き所住僧にりて陪
十王堂延宝元年の建立地蔵及び十王の像は小野篁の作影堂慶長年中の建立にて鬼
輪蔵舊蔵は廢して今は貞享二年に再興うり彼大中臣安長
寄附の一切經は全部揃うり殘闕数卷は其時の
古写にて甚奇品うり発中経唐櫃一合今に有して蓋に十六善
神の絵を附るが古雅うり又其經寄附につき五箇條の清状を
其蓋に書き付せし古の〳〵字畫は潔丈章の顛倒も多くして甚漢
〳〵けれども古意を擬ちんうるを思ひてそれに影写す

勧請　謹請　鎮守十五所權現大明神御寶前
一後々將来寺家不集来者獨竊不可閑唐櫃事
一後々將来雖族縁聚人不可奉借出他國他境事

七寺
境内丸
茶屋
池面の
夏景


雅

一 後々將来於國中雖為書寫奉讀一度一合之外
不可奉借出多合事
一 後々將来寺中居住僧炎天比一年一度可奉于
施事
一 後々將来寺中僧他人語竊不可借出事
右事為躰雖似耶見夫以世間作法或為火難或為
闕敵或為盗失其恐尤以切也若國中郡内為書寫
奉讀有奉請之望人者奉請一合令返送其一合之
後又可奉請一合連〻如此用之一度旦多奉請之
事永以停止何況於他國奉請哉若背此状之人者
可奉任大行事　勢田大明神　八釼大明神也神
威嚴重者人誰遠之作願經中所載三世十方諸如
来護法聖衆伏乞諸天善神住却垂跡諸冥衆龍神
鬼神同心令知見證明給謹起請如件
治暦二年丙戌八月　日願主惣大判官代散位大中臣安長女弟子民氏
勧進　僧　榮俊
大法師　榮俊

三層塔　元禄年中任信良快の造立　國君より也資財を助力し給い京都より
安置に因なる享保中此塔の九輪かたふく事ありしに九ふ長崎より麒麟大
夫と云る職業師出来りて其事を直さんと其まゝ檜瑞に一本
の竹を立られとつゝしてゆ我見を出さんと其まゝ檜瑞に一本
鎮守十五所權現社　天満宮と合せ多ふ社前に石燈籠
天和二年吉澤換拔弘都より遣立毎年十月十五日塔殿中庭下の換拔勾當
都名比盲人まて平曲を納す鳥居の額ハ朝鮮人雪月堂が筆す

其外稲荷八幡宮等ハ小社又護摩堂太子堂大日堂ホの山
堂多〻境内に白櫻紅楓の古樹多〻ありて緇流韻士婦女僧
俗の隅々春と称し秋と称ふ名區ありて又東南の池上に
茶店檐を並べて水面に桃を過客の餘興に添差を供す
實に府下第一の佳境〻〻〻

改号し大倫和尚を開山とす其後天文年中清須にうつし慶長十五年再び今此所へうつせり（むし）善提寺といひし時室町将軍家より寺領寄附（累年此寺絶滅に）今は寺もなし

○本尊 釈迦の木像 善篤寺の本尊にして清須にうつしし即ち寺と山嶽音座の開基なり

宗源山浄久寺

本尊 釈迦佛恵心僧都の作 霊寶 景清守本尊千手観音 悪七兵衛景清自ら知の根に彫し小佛なり景清の末葉古渡に住せしが家に持伝へしを此寺に寄附せしなり住牌もありて水月景清大居士建保二甲戌年八月十五日とあり

持永山光真寺 浄久寺に隣りて善篤寺末の僧元典の開基にして松寿院といひしを宝永二年十月今此寺号に改む

本尊 正覚吉行基の作 薬師堂 凶悪の士にして某師信仰の人此士に切腹をすすめしに不礼にして一刀に討たんとせしに足早に逃げしが追ひかけ一人の地に倒れ出血せしに某師仏の身がわりに立せ給ひしといふ其後某師と称してまやしけり

西本願寺掛所 同町西側 伊勢國桑名郡長嶋城門徒等信証院蓮如上人に乞ひて長嶋の杉江村に一寺を建立し

上人の末子實恵を招待して住持とし願證寺と名づけ伊勢尾張美濃三箇國の小本山となる天正二年甲戌九月廿九日門徒の一揆によりて亡され廃寺となりしを顕如上人内大臣信雄公にたのみて願證廃寺を當國清須に再興せり其のち又桑名郡本願寺村に願證寺を再興して清須の寺を通所とせしと慶長御遷府の後通所を今の所へうつし舊号にもどす願證寺と名づくる享保年中本坊懸所となり境内に桜の大樹数株ありて去日遊人絶えず

○本尊 阿弥陀如来

二子山の古跡 西掛所の地むかしは二子山とて高き山野なりし信長公清須へ遷府の時此地をうつして今の所へ寺院商家を移せり

七面山妙善寺 橘町西側に有り日蓮宗京都妙顕寺末 天和三年僧日春建立して愛智郡岩作村に妙禅寺と名づけ廃寺なりしを其寺

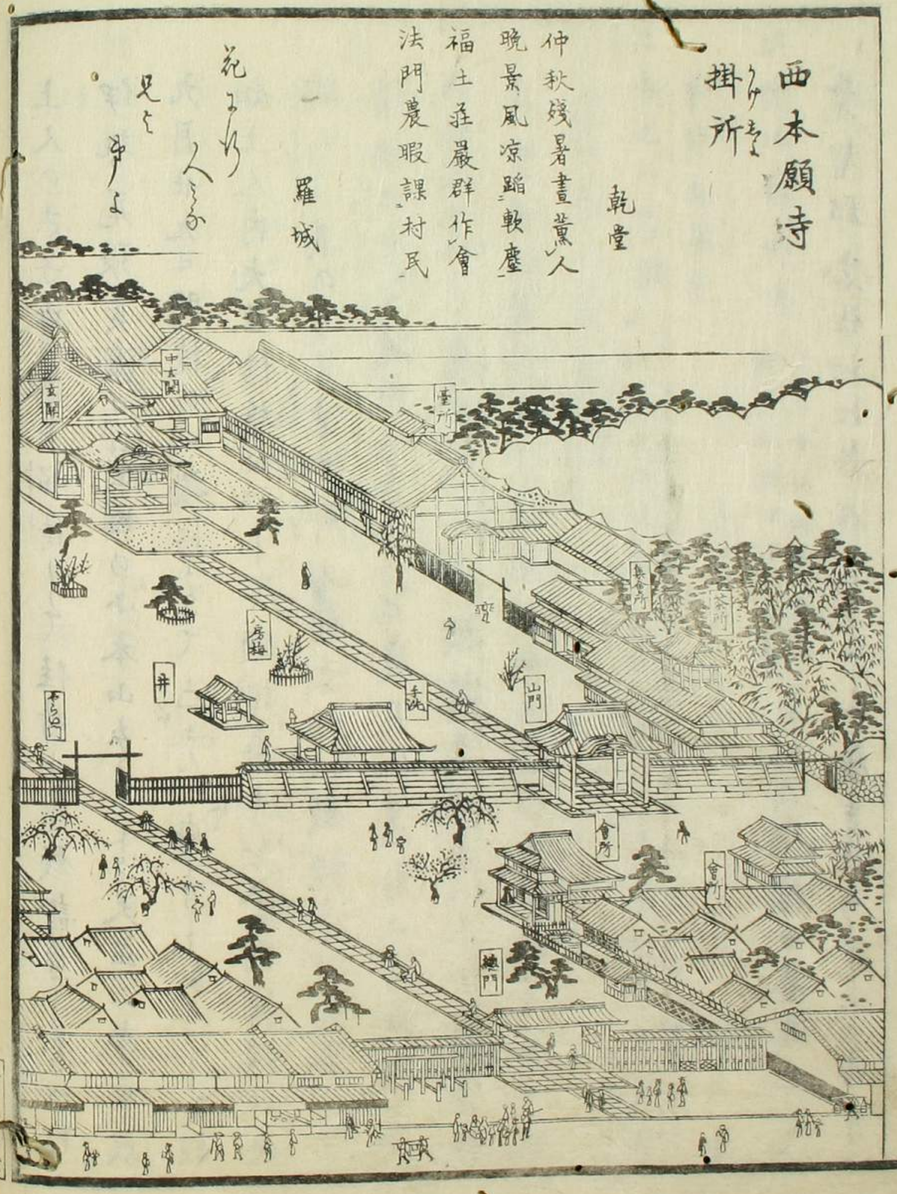
西本願寺掛所

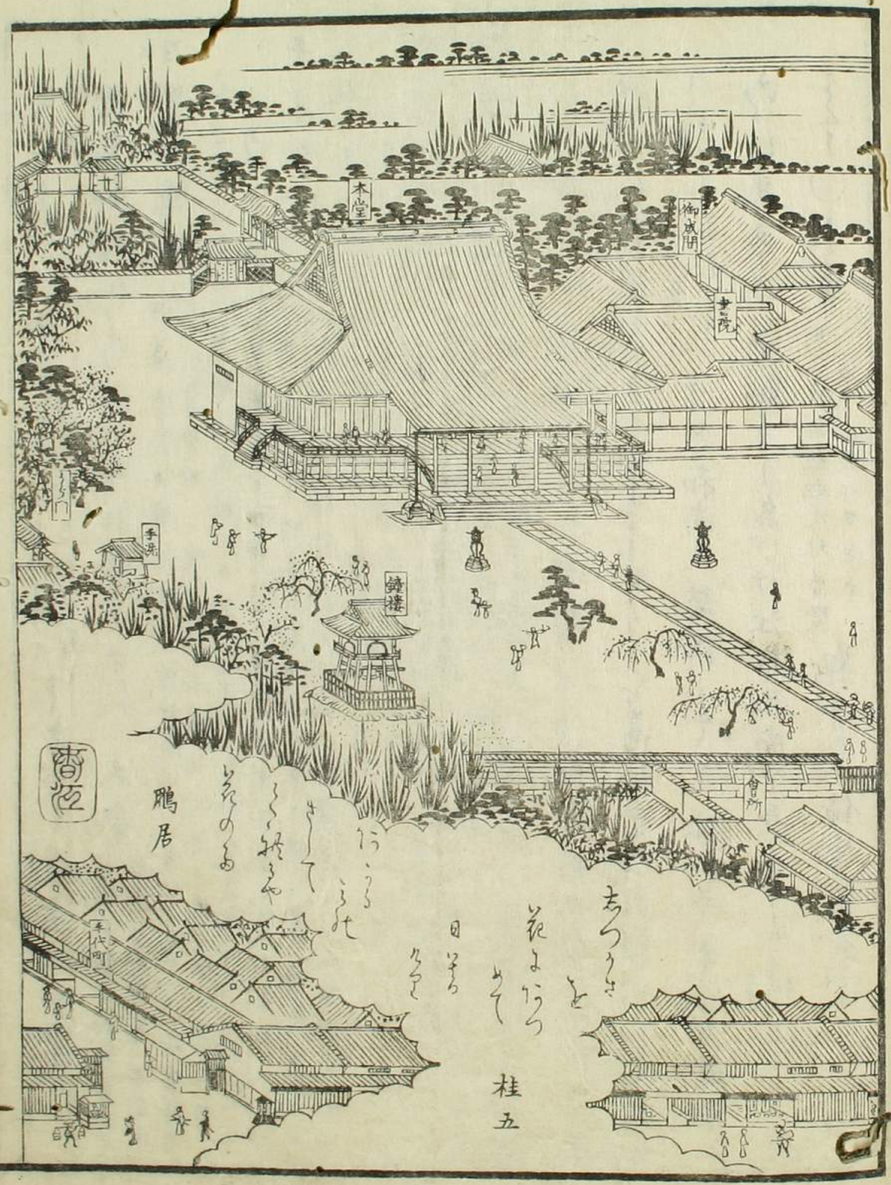
乾堂

仲秋殘暑晝薫人
曉景風涼蹈軟塵
福土莊嚴群作會
法門農暇課村民

羅城

花ゆゑに人こゝろ
見てゆく





ちるさくら
花よりなほ
をしむ
日ごろ

桂五

号をうし妙善寺 音便にて字を行ふ

国君御信仰ありて今に繁昌す ○本堂 七面の像は茶屋長以が彫刻なり天和三年安置す

延宝七年

日置八幡宮 妙善寺は西隣の日置神社本國神名帳に従三位日置天神と記せるは式に愛智郡日置郷と云ふ延喜神名式に愛智郡日置朝臣あり是日置朝臣が祖神にして應神天皇を奉祭ひ奉る

千本松 日置八幡宮の也とらふ信長公桶狭間合戦の時日置八幡宮に祷らせられ勝利を得たり寛文年中所在なり

無量山延廣寺 橋町の西側にあり西本願寺直末常川掃部延廣の開基なり寺号は伊勢國長嶋にあり元禄六酉年あらたむ

護國山東輪寺 同町大木戸際の西側にあり黄檗宗山城國宇治の萬福寺末 寛文十一年唐僧千呆号安

の草創なり即非禅師を開山とし法嗣なり故大休とん住持と守

大休なるあるべく退去し廃寺となりぬと萬松寺は末刹なり高顯寺

汲む 今日置にいふ是なり 千呆和尚又愁訴して元禄五年再び黄檗寺と

なりに建立して東輪寺と名づけ江外和尚を長崎より請して住持

となす ○本尊 明人作は釈迦文殊普賢の像を内殿に安置す 観音堂 鐘楼 芭蕉堂 大施餓

七月十五日是を執行す 好に名る

なりて盆中府下妻双の群衆なり

犬御堂 法浄寺華光院 大木戸の南西側にあり 開山僧無関 俗姓平氏

紀伊國高野山に出家す 修行は真言宗大須真福寺末 法國行脚し壽永年中此地に

来る身疲れ煩悶して息絶むとすに黒白の二犬いで

草に葉に水を浸しこれを くれ来りて僧の口をそそぎしかば

忽蘇生し心身快然なり此僧おもふに犬は高野大明神

は使者なるべし偏に明神は加護なりと知る且阿弥陀如来

夫夢の告なりしかば古に艸庵を結び弥陀佛の尊像及

び黒白両犬の姿をうつして安置し犬御堂と名づけしなり

真言古義に護摩壇側置黒白二犬是弘法大師始入高野山有二犬導

引故置犬像壇側と云ふ法瓜に高野四所明神の図に階下黒白二

犬と画く是は空海弘仁中高野山を拏登る際二犬有て導きまつる

弓箭を帶せり化人山をさり示す精舎建立は後狩場明神と号して

祭るなりこれは此形を図せるなり 密家の伝に云ふ犬御堂も真言

宗なるべし法号は為に本尊の眼なる二犬を安置しなり大樹の下に眠るに犬急に

しあるべし犬を例して是を山にはなれ犬人にはやしを我とうたんと疑ひ

を人に吠るを衣をくわへて引しかを人はやしを我とうたんと疑ひ

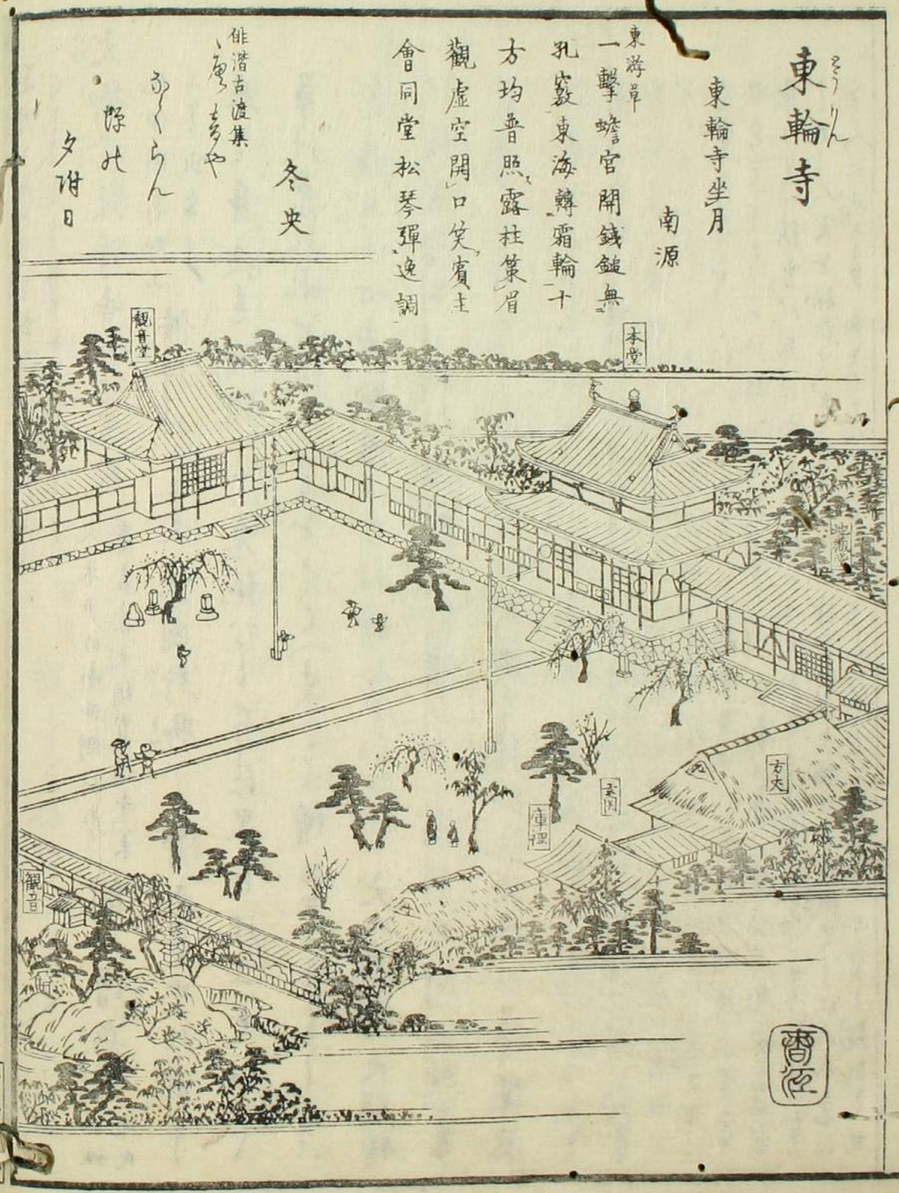
東輪寺

東輪寺坐月　南源

東游草
一擊蟾宮開錢鏹無
孔竅東海轉霜輪十
方均普照露柱策眉
觀虛空開口笑賓主
會同堂松琴彈逸調

冬夾

俳諧古渡集
夏ちかや
ふくらん
除れ
夕附日



東輪寺
芭蕉堂新成
士朗

埃るも
みなやすみ
ちるも
花の影

黄山

人去て
はるふき
窓れ
ちるか

を掘て犬の首と討ふ所に大蛇の死人と呑んと欲する
に竈附うと人比忠精でちぶりやまうと犬と数害せうると悔かれども
小寺と建立せしうでさまく附
會の説ある共も信用しがたし

古渡 當府市中にて市場の庄古渡又舊渡ともかけ明月記云尾張國
舊渡者往昔海潮没岸之跡也予赴東方之時自鳴身到於此云
うんうう

明日香井和歌集 中略 古渡

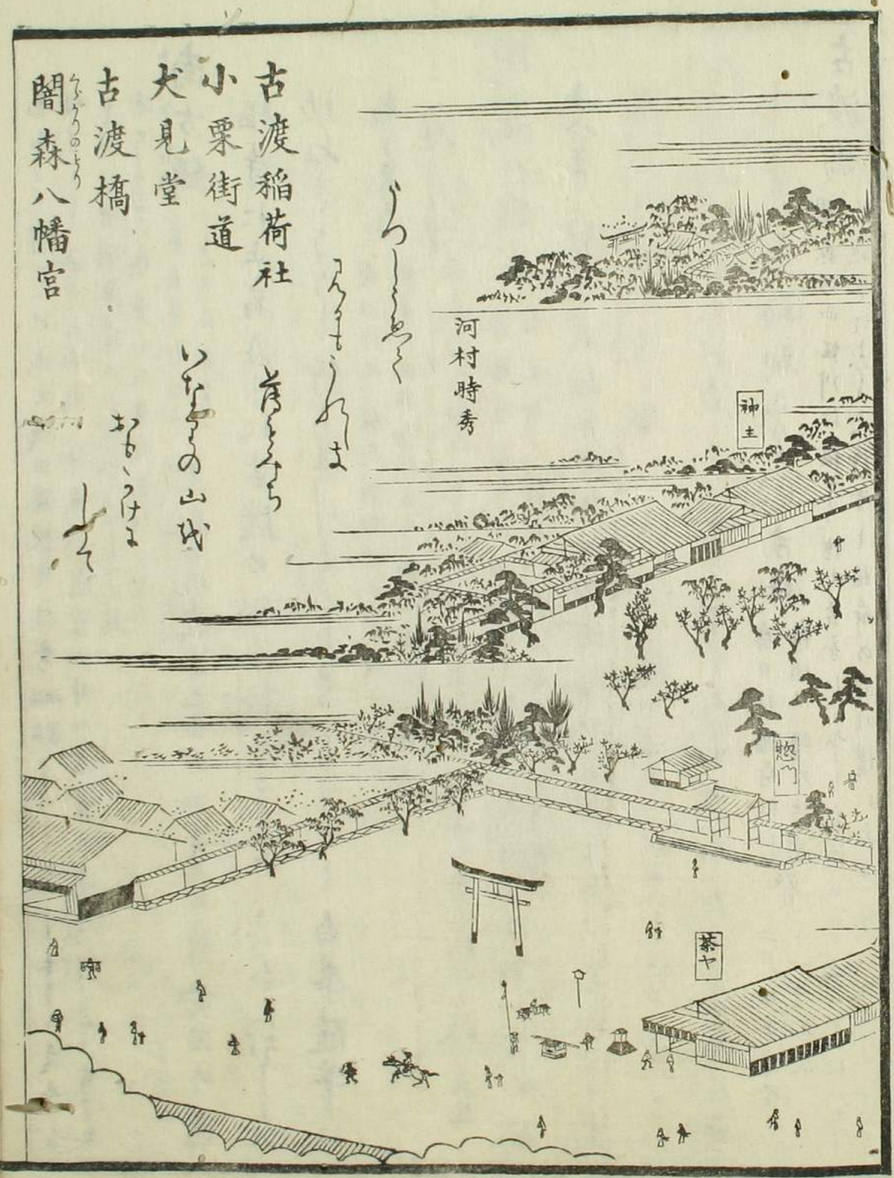
むらくもとその名かなしぬたちてもはなれぬ橋柱かな 参議雅経

日本靈異記に愛知郡片蓮里はゝ舊本今昔物語に愛智郡片輪郷と
いふは此古渡の古名なり又一女子村ともいひむ富饒の
人七人のむすめありうう成長のうち七所へ嫁うの時の住所と一女子
村といひと後世古渡村と改号す二女子村は見うう
二女子村四女子村五女子村六女子村八丸茶野村此内の字六女子村八丸茶野村此字に改と七女子今小村
ゆて戸口うく小塚村うう支配すすべて七人の娘が在住せし地名は今に
皆称久改利ら妻
ううう いへて

稲荷社 古渡のうち犬見堂の南北西側にあり祭神伊弉冊尊倉稲魂命
天津彦彦火瓊瓊杵尊猿田彦命及び住吉四大神の五尊
國君圓覚院殿元禄二年九月十七日江戸四ッ谷御館ゆく
御誕生うく稲荷と生土神うく御崇敬あり

うも吉見刑部少輔幸和に命じて丹羽郡石枕村に
稲荷の社をたてにうう正徳三年四月廿五日遷座うさ
ゆ後ゆて○末社 山王社 本社の北の方にあり本社と
同時に清須ううつす 五條天神
社 本社の南にあり本社と同時 その外の末社殿宇は図上に
に丹羽郡二宮ううつす
絶て見るべし 例祭 本社は二月初午日三月中午日四月上卯日十一月
十日十二月 節分の日うう 神主 安井氏 堀内に楓樹多くありて秋霜見と湾
八日はゝ山王社は四月中申日五条天神社は九月
時は紅い二月の花と欺き觀賞なめうるべし雅俗遊人の
履歴日小後うるく古社の奇観實に府下の尹一
龍洞山大泉寺 稲荷社の南にあり曹洞宗當所 **本尊** 宝冠の釈迦
法大師の作 **觀音堂** 正観寺末貞享三年の建立 牟尼佛は弘
の寄附ゆてたけ四一 愛智一郡の落ち佛し **愛染明王** 享保年中
尺余れ木像うう
瑞雲山洞仙寺 古渡のうち中市場筋東側にあり曹洞宗塾田の
法持寺末玉泉寺といひと寛文七年改号す
本尊 千手觀音 恵心僧都の作 源頼信うう右大将新物ゆまで数
代崇敬うう 木像うう 又桃巖梅あり紅白まうくうう

古渡橋
堀
西方
室蔵
神樂所
菅天神
本社
山王
拜殿
御供所
大見堂
小栗街道
西方


古渡稲荷社
小栗街道
大見堂
古渡橋
闇森八幡宮
河村時秀
神主
坂門
茶ヤ

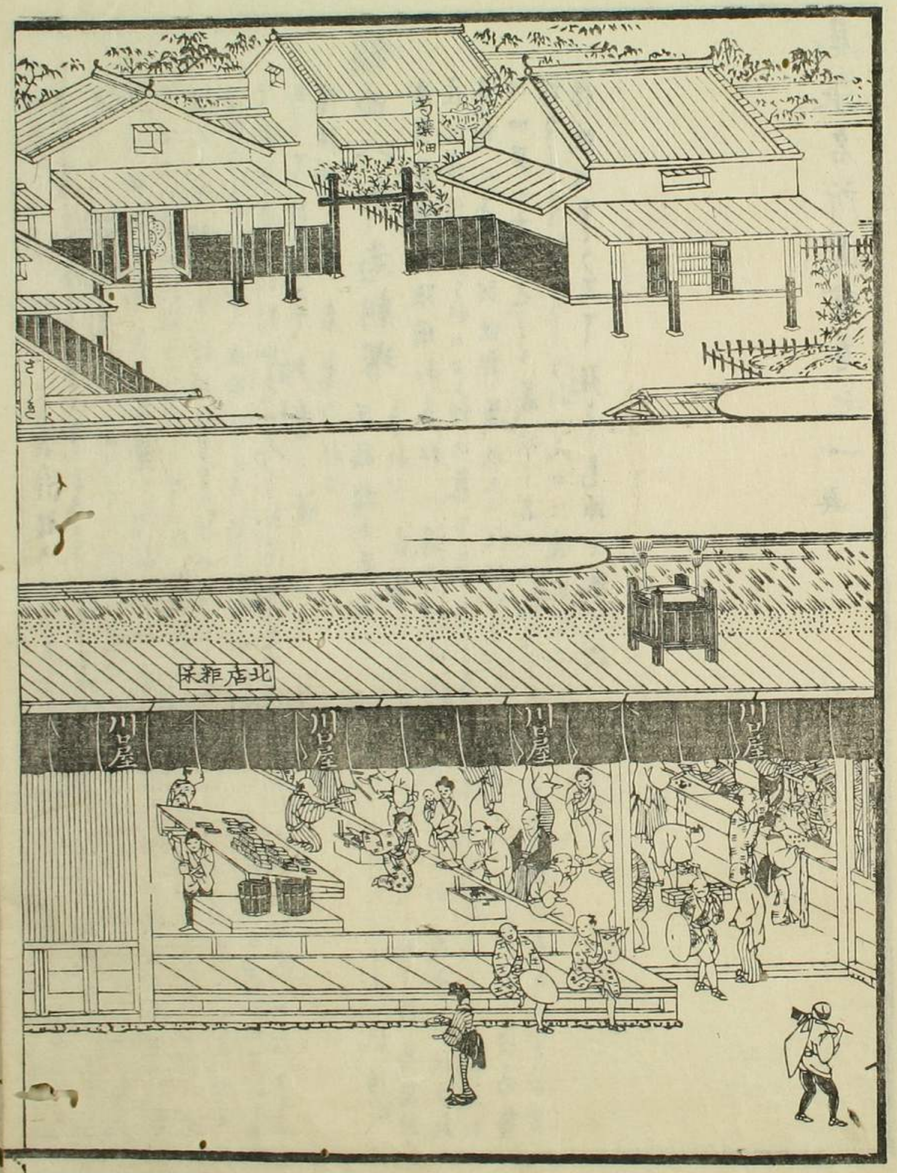
花ゆゑに當所は城主織田備後守信秀（法名巖）ゆゑに木ゝ石志名付し…氏寺の境内八御城伊造營の時加賀崇は普清場みて有し所
さゆに彼國孝横山山城守ホ…寺ホ…
返ゝ書翰多く氏寺に…

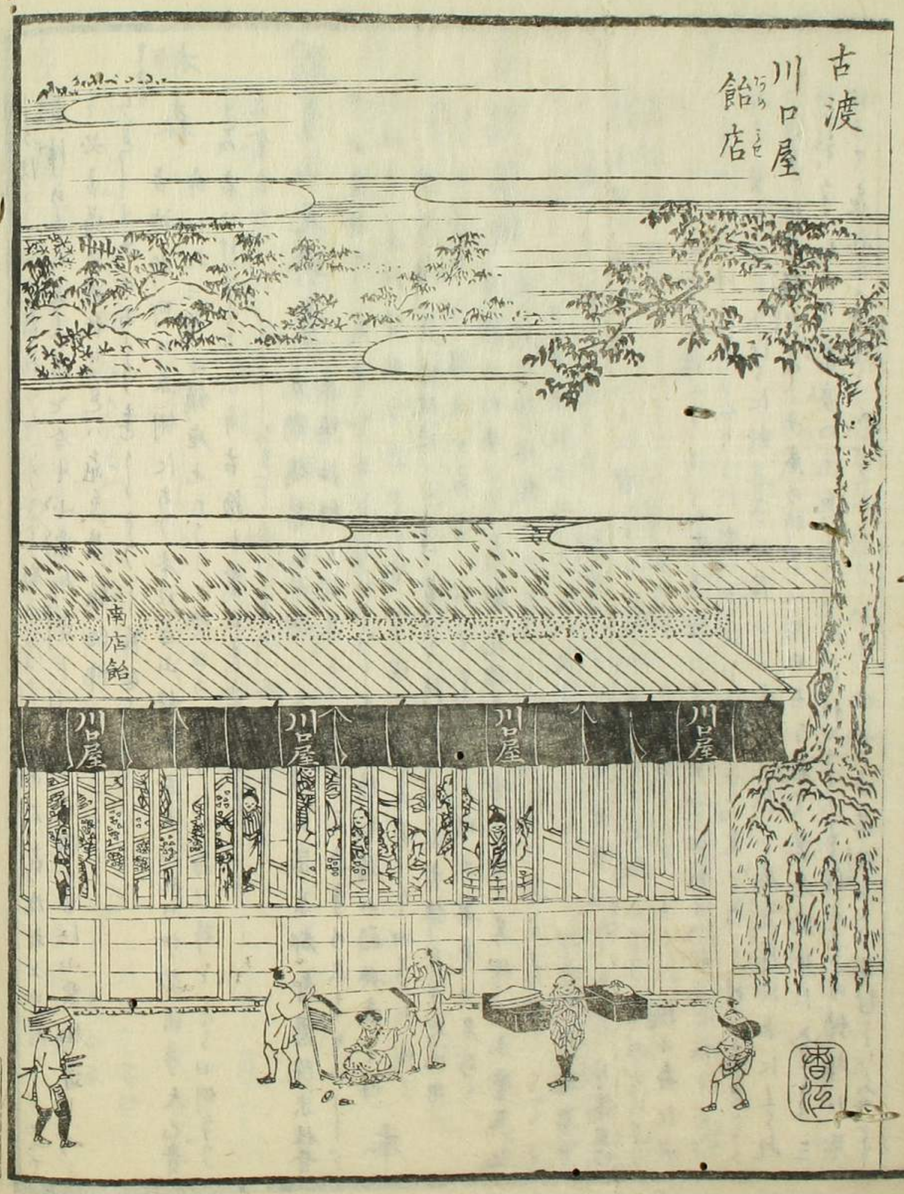
南方鐍　名古屋けぬき　足利義教公富士御覽の時　埜田の圓
名あり

福寺に止宿在しに古渡の鍛冶鐍とまらうばんぐ…
けぬきうち作らる…　白華隨筆に
…

周田挺之が暢園詠物詩の古渡の句に人
姓南方紙萍飯村名古渡自横舟と紙れり
狂哥真寸鏡
…人のゆけぬき南方くいて今ハかへらぬ　木端

闇森八幡宮　古渡橋爺の北側にあり祭神　應神天皇神功皇后也俗鎮西八郎為朝の矢と合祭　永正
十八年　鶴見道親以下六人の僧俗力をあはせて重修す　元
禄の比石黒某ゝ安　…ものむ…桂…き…け年を經て月…
…ぬ…ゝ…ゝ…ゝ


北店粮米
川口屋
川口屋
川口屋
川口屋


古渡
川口屋
飴店
南店飴
川口屋
川口屋
川口屋
川口屋

鎮西八郎為朝塚

尾頭橋の東にあり為朝ここに住せしとぞ

嫡子義實尾張國知多郡に隠れ住しかばこれを為朝の子尾張次郎義次ここに住せしとぞ

庄に居住すれども組の墓を築きしあり又牛立村義專寺は住文に

為朝の子尾張次郎義次ここに住せしとぞ

に四男一女ありとぞ義次と名のりしかども為朝のゆかりなるを

堀ふかくしてまぬかれ人口に膾炙せり

伝説にまかせて強く見非を論ずべ

尾張名所圖會巻之一 終